爲ニ設クル所ニシテ文部大臣ノ管轄ニ屬ス

第二條　東京學士會院ハ耆德碩學ノ中ヨリ選出セラレタル會員ヲ以テ組織ス其選出ノ方法及人員左ノ如シ

一　帝室ノ特選ニ依ル會員十五名

一　會員ノ推選ニ依ル會員二十五名

會員ノ推選ニ依ルモノハ文部大臣ノ認可ヲ經ルヲ要ス

會員ハ終身トス

第三條　東京學士會院會員ハ各自專攻ノ學科ニ就キ論說ヲ述ヘ又學藝及敎化ニ關スル事項ニ就キ報告スルモノトス

第四條　東京學士會院ハ學藝及敎化ニ關スル事項ニ就キ文部大臣ヨリ諮問アルトキハ審議復申スルモノトス又會員各自意見アルトキハ會院ニ於テ審議シ文部大臣ニ開陳スルコトヲ得

第五條　東京學士會院會員滿六十歲以上ノ者十名以內ヲ限リ特ニ各年金三百圓ヲ賜フコトアルヘシ

第六條　東京學士會ニ會長一人幹事二人ヲ置ク

會長幹事ハ會員ノ互選ヲ以テ文部大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム其任期ハ各一年トス但再選セラルヽコトヲ得

第七條　會長ハ文部大臣ノ監督ヲ受ケ院務ヲ統理シ議事アルトキハ議長ノ任ニ當ルモノトス會長事故アルトキハ幹事ノ內一人ヲ指定シテ其職務ヲ代理セシム

幹事ハ會長ヲ補佐シテ院務ヲ掌理ス

第八條　會長幹事ニハ手當トシテ各年金三百圓ヲ給與スヘシ但第五條ノ賜金アル者ハ之ヲ給與セス

第九條　東京學士會院ニ書記二人ヲ置キ文部屬ヲ以テ之ニ兼補ス書記ハ會長及幹事ニ屬シテ庶務ニ從事ス

第十條　東京學士會院ハ文部大臣ノ許可ヲ得テ會則ヲ設クルコトヲ得

○農商務省

○農商務省官制　明治二十四年七月　勅令第九十四號

朕農商務省官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

農商務省官制

第一條　農商務大臣ハ農、商、工、水產、林野、鑛山、發明、意匠、商標、及地質ニ關

スル事務ヲ管理ス

第二條　大臣官房ニ於テハ通則ニ掲クルモノヽ外內外博覽會及共進會農商工諮詢會圖書並報告書類ノ刊行管理及褒賞其他各局ノ主掌ニ屬セサル事務ヲ掌ル

第三條　農商務省專任參事官ハ三人專任書記官ハ三人ヲ以テ定員トス

第四條　參事官ハ通則ニ掲クルモノヽ外臨時命ヲ承ケ鑛山山林其他農商工ノ事ヲ巡視ス

第五條　農商務省ニ左ノ五局一所ヲ置ク

農務局
商工局
山林局
鑛山局
特許局
地質調査所

第六條　農務局長、商工局長、山林局長ハ勅任トシ鑛山局長特許局長ハ奏任トス

地質調査所長ハ局長又ハ技師ヲ以テ之ヲ兼ネシム

第七條　農務局ニ於テハ農業、農會、農業組合、農業土木、農產物蟲害豫防及驅除、蠶業、茶業、獸醫、蹄鐵工、家畜、家禽、牛馬籍、狩獵、有益蟲類、漁業、漁業組合、漁場、漁船、漁具、水產物製造及鹽田ニ關スル事務ヲ掌ル

第八條　商工局ニ於テハ商業、商業會議所、商工同業組合、度量衡商事會社、商業仲立人及仲立人組合、內外通商、相場所、工場及保險營業ニ關スル事務ヲ掌ル

第九條　山林局ニ於テハ森林ノ施業林野ノ區域及境界ノ調査林野ノ利用及保護蕃殖民有林保存林及林野ノ臺帳ニ關スル事務ヲ掌ル

第十條　鑛山局ニ於テハ鑛業ノ許否、鑛區ノ境界及位置訂正、鑛區ノ合併分割鑛業ノ保護及鑛業ノ技術ニ關スル事務ヲ掌ル

第十一條　特許局ニ於テハ發明意匠及商標ニ關スル事務ヲ掌ル

特許局ニ圖書館ヲ置キ審判及審査ニ關スル圖書見本及雛形ヲ保管セシム

第十二條　地質調査所ニ於テハ土性調査、主產植物及土性ノ關係試驗、地質ノ關係、地層ノ構造、鑛床ノ驗定、有用鑛物ノ驗定、有用物料ノ分析試驗、地形測量土性圖、地質圖及其說明書編纂及實測地形圖編製ニ關スル事務ヲ掌ル

第十三條　特許局ニ專任審判官一人專任審査官五人ヲ置ク

審判官ハ奏任トス審判ノ事ヲ掌ル

審査官ハ奏任トス審査ノ事ヲ掌ル

第十四條　農商務省試補ハ三人ヲ以テ定員トス

第十五條　農商務省ニ技師三十人審査官補十二人及技手六十人ヲ置ク

審査官補ハ判任トス特許局ニ屬シ審査ノ事務ヲ佐ク

第十六條　農商務省ニ技師試補十二人ヲ置ク

第十七條　農商務省屬ハ百八十人ヲ以テ定員トス

附則

第十八條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治二十三年勅令第百三號地質調査所官制ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○大小林區署官制　明治二十四年七月勅令第百四十四號

朕大小林區署官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

大小林區署官制

第一條　大林區署ハ農商務大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

一　官林ノ施業ニ關スル事項

二　官林ノ產物賣拂ニ關スル事項

三　官林ノ境界調査分合ニ關スル事項

四　官林ノ賣拂及貸渡ニ關スル事項

五　小林區署業務監督ニ關スル事項

第二條　大林區署ニ職員ヲ置ク左ノ如シ

林務官

技師

林務官補

書記

第三條　林務官ハ奏任トシ十六人ヲ以テ定員トス大林區署長トナリ農商務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ署中全般ノ事務ヲ掌理ス

第四條　技師ハ十六人ヲ以テ定員トス各大林區署ニ分屬シ署長ノ指揮ヲ承ケ署務ヲ掌ル

第五條　林務官補ハ判任トシ八十人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ署務ヲ分掌ス

第六條　書記ハ判任トシ百二十八人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第七條　小林區署ハ大林區署ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

一　官林ノ保護ニ關スル事項

二　官林ノ栽培及土功ニ關スル事項

三　官林ノ產物採取及賣拂ニ關スル事項

四　官林ノ測量製圖ニ關スル事項

第八條　小林區署ニ職員ヲ置ク左ノ如シ

營林主事

營林主事補

森林監守

第九條　營林主事ハ判任トシ三百八十七人ヲ以テ定員トス小林區署長トナリ上官ノ指揮ヲ承ケ署務ヲ掌理ス

第十條　營林主事補ハ判任トシ六百八十八ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ署務ヲ分掌ス

第十一條　森林監守ハ判任トシ七百二十八人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ官林ノ保護ニ從事ス

第十二條　農商務大臣ハ事務ノ必要ニ依リ營林主事又ハ營林主事補ヲ大林區署ニ臨時勤務セシムルコトヲ得

第十三條　大小林區署ノ名稱位置並管轄區域ハ農商務大臣ノ定ムル所ニ依ル

附則

第十四條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○鑛山監督署官制

明治二十四年七月勅令第百四十五號

朕鑛山監督署官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鑛山監督署官制

第一條　鑛山監督署ハ農商務大臣ノ管理ニ屬シ鑛業條例ノ定ムル所ニ依リ鑛山監督ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條　鑛山監督署ニ職員ヲ置ク左ノ如シ

鑛山監督官

技師

書記

技手

第三條　鑛山監督官ハ奏任トシ六人ヲ以テ定員トス鑛山監督署長トナリ農商務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ署中全般ノ事務ヲ掌理ス

第四條　技師ハ十人ヲ以テ定員トス各監督署ニ分屬シ署長ノ指揮ヲ承ケ署務ヲ掌ル

第五條　書記ハ判任トシ四十八人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第六條　技手ハ五十八人ヲ以テ定員トス

第七條　農商務大臣ニ於テ必要ト認ムルトキハ鑛山監督支署ヲ置キ鑛山監督署員ヲ分派スルコトヲ得

第八條　鑛山監督署及鑛山監督支署ノ名稱位置並管轄區域ハ農商務大臣ノ定ムル所ニ依ル

附則

第九條　本令ハ鑛業條例實施ノ日ヨリ施行ス

○遞信省

○遞信省官制　明治廿四年七月勅令第九十五號

朕遞信省官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

遞信省官制

第一條　遞信大臣ハ郵便、電信、船舶、海員、航路標識及郵便爲替、郵便貯金ニ關スル事務ヲ管理シ電氣事業ヲ監督ス

第二條　大臣官房ニ於テハ通則ニ揭クルモノヽ外遞信監察ニ關スル事務ヲ掌ル

第三條　遞信省ニ左ノ三局ヲ置ク

郵務局

管船局

電務局

第四條　郵務局長、管船局長ハ勅任トシ電務局長ハ奏任トス

第五條　郵務局ハ郵便及郵便爲替、郵便貯金ニ關スル事務ヲ掌ル

第六條　管船局ハ船舶、海員、航路標識ニ關スル事務ヲ掌ル

第七條　電務局ハ電信電話ニ關スル事務及電氣事業監督ノ事ヲ掌ル

第八條　遞信省專任參事官ハ二人專任書記官ハ三人ヲ以テ定員トス

第九條　遞信省ニ遞信監察官二人遞信監察官補十人ヲ置ク遞信監察官ハ大臣官房ニ屬シテ遞信監察ノ事務ヲ掌理シ遞信監察官補ハ監察ノ事務ニ從事ス

遞信監察官ハ奏任トシ遞信監察官補ハ判任トス

第十條　遞信省ニ遞信事務官五人ヲ置ク奏任トス大臣官房郵務局及電務局ニ屬シテ各其務ヲ分掌ス

第十一條　遞信省ニ技師四人技手二十九人ヲ置ク技師及技手ハ大臣官房及各局ニ屬シテ其事務ニ從事ス

第十二條　遞信省試補ハ三人ヲ以テ定員トス

第十三條　遞信省ニ技師試補二人ヲ置ク

第十四條　遞信省屬ハ二百八十八人ヲ以テ定員トス

附則

第十五條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○郵便及電信局官制　明治二十四年七月勅令第百四十七號

朕郵便及電信局官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

郵便及電信局官制

第一條　郵便電信ノ業務ヲ執行スル爲地方ニ郵便電信局郵便局及電信局ヲ置キ遞信大臣ノ管轄ニ屬セシム

第二條　郵便電信局ニ左ノ職員ヲ置ク

局長
書記
技手
書記補

東京及大阪一等郵便電信局ニ限リ各事務官一人技手一人ヲ置ク

第三條　郵便局ニ左ノ職員ヲ置ク

局長
書記
書記補

第四條　電信局ニ左ノ職員ヲ置ク

局長
書記
技手

書記補

第五條　郵便電信局郵便局及電信局ノ等級ヲ分テ各一等二等三等トス

第六條　一等郵便電信局ノ局長ハ奏任又ハ判任トス其奏任ヲ以テ局長ニ任スル局ノ位置左ノ如シ

東京　大阪　横濱　神戸
長崎　京都　函館　新潟
名古屋　熊本　仙臺　廣島

一等郵便電信局二等三等郵便電信局郵便局電信局ノ局長ハ判任トス

郵便電信局郵便局長電信局長ハ遞信大臣ノ命ヲ承ケ局中全部ノ事ヲ掌理ス

第七條　事務官ハ奏任トス局長ノ指揮ヲ承ケ郵便ノ業務ヲ掌理シ局長事故アルトキ之ヲ代理ス

第八條　技師ハ局長ノ指揮ヲ承ケ電信ノ業務ヲ掌理ス

第九條　書記ハ判任トス局長ノ指揮ヲ承ケ郵便又ハ電信ノ業務ニ從事シ事務官ヲ置カサル局ニ於テハ局長事故アルトキハ之ヲ代理ス

第十條　技手ハ局長ノ指揮ヲ承ケ電信ノ業務ニ從事ス

第十一條　書記補ハ判任トス書記ノ事務ヲ助ク

第十二條　書記書記補ハ二千八百七十六人ヲ以テ定員トス

第十三條　技手ハ九百四十七人ヲ以テ定員トス

第十四條　一等郵便電信局一等郵便局ハ遞信大臣ノ指定スル區域内ノ郵便電信局郵便局及電信局ノ業務ヲ監督ス

附　則

第十五條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○郵便爲替貯金管理所官制　明治二十四年七月　勅令第百四十八號

朕郵便爲替貯金管理所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

郵便爲替貯金管理所官制

第一條　郵便爲替貯金管理所ハ遞信大臣ノ管轄ニ屬シ郵便爲替及郵便貯金ニ關スル事務ヲ掌理スル所トス

第二條　郵便爲替貯金管理所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長
事務官
書記
書記補

第三條　郵便爲替貯金管理所長ハ奏任トス遞信大臣ノ命ヲ承ケ所中ノ事務ヲ掌理ス

第四條　事務官ハ奏任トシ二人ヲ以テ定員トス所長ノ指揮ヲ承ケ所務ヲ分掌ス

第五條　書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ書記簿記計算ノ事務ニ從事ス

第六條　書記補ハ判任トス書記ノ事務ヲ助ク

第七條　書記書記補ハ五百八十七人ヲ以テ定員トス

第八條　遞信大臣ハ必要ト認ムル地ニ郵便爲替貯金管理支所ヲ置キ其事務ヲ分掌セシメ事務官ヲ以テ所長ニ充ルコトヲ得

附　則

第九條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治二十三年勅令第百十三號郵便爲替貯金局官制ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ズ

○航路標識管理所官制　明治二十四年七月　勅令第百四十九號

朕航路標識管理所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

航路標識管理所官制

第一條　航路標識管理所ハ遞信大臣ノ管轄ニ屬シ航路標識ノ工事及其保守ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條　航路標識管理所ニ左ノ職員ヲ置ク

技師
書記
技手
看守

第三條　技師ハ一人ヲ以テ定員トス航路標識管理所長ト爲リ遞信大臣ノ命ヲ承ケ所中全部ノ事務ヲ掌理ス

第四條　書記ハ判任トシ二十三人ヲ以テ定員トス所長ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第五條　技手ハ十六人ヲ以テ定員トス所長ノ指揮ヲ承ケ航路標識ノ工事ニ從事ス

第六條　看守ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ航路標識ノ看守ニ從事ス其定員ヲ定ムルコト左ノ如シ

一等燈臺　各三人
二等燈臺
三等燈臺
四等燈臺　各二人
五等燈臺
六等燈臺
等外燈臺

燈船　二人
霧警號　二人

遞信大臣ニ於テ必要ト認ムルトキハ航路標識看守豫備員十五人マテヲ置クコトヲ得

附則

第七條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○船舶司檢所官制

明治二十四年七月勅令第百五十號

朕船舶司檢所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

船舶司檢所官制

第一條　船舶司檢所ハ遞信大臣ノ管轄ニ屬シ海員水先人ノ試驗、審問、船舶ノ檢査、測度、新造船ノ工事監督ヲ掌ル所トス

第二條　船舶司檢所ハ東京大阪長崎函館其他遞信大臣必要ト認ムル地ニ之ヲ置ク

第三條　船舶司檢所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長
司檢官
司檢官補

書記

第四條　所長ハ司檢官ヲ以テ之ニ充ツ遞信大臣ノ命ヲ承ケ所中全部ノ事務ヲ掌理ス

第五條　司檢官ハ奏任トシ十八ヲ以テ定員トス各船舶司檢所ニ分屬シ所長ノ指揮ヲ承ケ所務ヲ分掌シ若クハ管船局ノ課長ヲ兼テ課務ヲ掌理ス

第六條　司檢官補ハ判任トシ十二人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ事務ニ從事ス

第七條　書記ハ判任トシ十二人ヲ以テ定員トス上官ノ命ヲ承ケ庶務會計ニ從事ス

附則

第八條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○電信建築署官制 明治二十四年七月 勅令第百五十一號

朕電信建築署官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

電信建築署官制

第一條　電信建築署ハ遞信大臣ノ管轄ニ屬シ電線建設電機裝置及其保存ニ關スル事務ヲ掌ル所トス其名稱位置及所轄區域ヲ定ムル左ノ如シ

名稱	位置	管轄區域
東京電信建築署	武藏國東京	東京府 神奈川縣 新潟縣 埼玉縣 栃木縣 群馬縣 千葉縣 茨城縣 山梨縣 靜岡縣 長野縣
大阪電信建築署	攝津國大阪	京都府 大阪府 兵庫縣 滋賀縣 奈良縣 三重縣 和歌山縣 鳥取縣 德島縣
札幌電信建築署	石狩國札幌	北海道
仙臺電信建築署	陸前國仙臺	宮城縣 福島縣 岩手縣 青森縣 秋田縣 山形縣
名古屋電信建築署	尾張國名古屋	愛知縣 岐阜縣 福井縣 石川縣 富山縣
廣島電信建築署	安藝國廣島	廣島縣 山口縣 岡山縣 島根縣 香川縣 愛媛縣 高知縣

熊本電信建築署

肥後國熊本

熊本縣　福岡縣
長崎縣　佐賀縣
大分縣　宮崎縣
鹿兒島縣

第二條　電信建築署ニ左ノ職員ヲ置ク

技師
書記
技手

第三條　技師ハ七人ヲ以テ定員トス電信建築署長ト爲リ遞信大臣ノ命ヲ承ケ署中全部ノ事務ヲ掌理ス

第四條　書記ハ判任トス署長ノ指揮ヲ承ケ書記簿記計算ノ事務ニ從事ス

第五條　技手ハ署長ノ指揮ヲ承ケ工事ヲ分掌ス

第六條　書記技手ハ七十六人ヲ以テ定員トス

附　則

第七條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○電話交換局官制

明治二十四年七月勅令第百五十二號

朕電話交換局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

電話交換局官制

第一條　電話交換局ハ遞信大臣ノ管轄ニ屬シ電話交換ノ業務ヲ執行スル所トス

第二條　電話交換局ニ左ノ職員ヲ置ク

技師
書記
技手

第三條　技師ハ二人ヲ以テ定員トス電話交換局長トナリ遞信大臣ノ命ヲ承ケ局中全部ノ事務ヲ掌理ス

第四條　書記ハ判任トス局長ノ指揮ヲ承ケ書記簿記計算ノ事務ニ從事ス

第五條　技手ハ局長ノ指揮ヲ承ケ電話線ノ建設電話機ノ裝置及其保存ニ關スル工事ヲ分掌ス

第六條　書記技手ハ十八ヲ以テ定員トス

第七條　電話交換局ノ名稱及位置ハ遞信大臣之ヲ定ム

附　則

第八條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○東京郵便電信學校官制

明治二十四年七月勅令第百五十四號

朕東京郵便電信學校官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

東京郵便電信學校官制

第一條　東京郵便電信學校ハ遞信大臣ノ管轄ニ屬シ郵便電信事業上須要ノ學術及技藝ヲ教授スル所トス

第二條　東京郵便電信學校ニ左ノ職員ヲ置ク

校長
幹事
教授
助教
書記

第三條　校長ハ一人遞信省高等官之ヲ兼任ス遞信大臣ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理ス

第四條　幹事ハ一人教授之ヲ兼任ス校長ノ監督ヲ承ケ庶務會計ヲ掌理シ校長事故アルトキ其職務ヲ代理ス

第五條　教授ハ奏任トシ五人ヲ以テ定員トス校長ノ監督ヲ承ケ生徒ノ教授ヲ掌ル

第六條　助教ハ判任トシ八人ヲ以テ定員トス校長ノ監督ヲ承ケ教授ノ職掌ヲ助ク

第七條　書記ハ判任トシ六人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務會計ニ

從事ス

附則

第八條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○警視廳

○警視廳官制　明治二十四年四月　勅令第三十四號

朕警視廳官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム（明治二十四年七月勅令第百十號改正ニ依ル）

警視廳官制

第一條　警視廳ニ職員ヲ置ク左ノ如シ

警視總監
警視
技師
消防司令長
警察醫長
典獄
警部
警視屬
技手

消防士
警察醫
監獄書記
看守長
消防機關士

第二條　總監ハ一人勅任トス

第三條　警視ハ三十六人奏任トス

第四條　消防司令長ハ一人奏任二等以下トス

第五條　警察醫長ハ一人奏任三等以下トス

第六條　典獄ハ一人奏任四等以下トス

第七條　警部警視屬消防士警察醫監獄書記ハ判任トシ看守長消防機關士ハ判任三等以下トス

警部警視屬消防士警察醫監獄書記看守長消防機關士ノ定員ハ四百十六人トシ其各官ノ定員ハ警視總監内務大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム

第八條　技師技手ハ警視廳ノ須要ニ依リ判任官俸給豫算定額内ニ於テ技術官俸給令ニ依リ之ヲ置クコトヲ得

第九條　警視總監ハ内務大臣ノ指揮監督ニ屬シ東京府下ノ警察消防及監獄ノ事務ヲ總理ス

第十條　警視總監ハ各省ノ主務ニ關スル警察事務ニ就テハ各省大臣ノ指揮監督ヲ承ケ高等警察事務ニ就テハ内閣總理大臣及内務大臣ノ指揮ヲ承ク

第十一條　警視總監ハ東京府下ノ警察事務ニ付其職權若クハ特別ノ委任ニ依リ法律命令ノ範圍内ニ於テ管内一般又ハ其一部ニ警察令ヲ發スルコトヲ得

警察令ハ特ニ施行ノ日ヲ揭クルモノヲ除クノ外官報ニ依リ部内ニ公布シタル後七日ヲ以テ施行ノ期限トス但伊豆七島ハ其島役場ニ到達シタル翌日ヨリ起算ス

第十二條　警察令ハ内務大臣其他主務大臣ニ於テ公益ヲ害シ成規ニ違ヒ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ之ヲ取消又ハ中止セラルヽコトアルヘシ

第十三條　警視總監ハ其主務ニ付テハ東京府下ノ郡長及町村長ヲ指揮ス

第十四條　警視總監ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任官ノ進退ハ内務大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第十五條　警視總監ハ法律命令ノ定ムル所ニ從ヒ所部ノ官吏ヲ懲戒ス其奏任官ニ係ルモノハ内務大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第十六條　警視總監ハ其廳ノ豫算定額内ニ於テ奏任官以下特別ノ勤勞アル者ヲ賞與スルコトヲ得

其奏任官ニ係ルモノハ內務大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第十七條　警視總監ハ須要ニ依リ判任官俸給豫算定額內ニ於テ雇員ヲ使用スルコトヲ得

第十八條　警視總監ハ內務大臣ノ認可ヲ經テ警察署ヲ廢置スルコトヲ得

第十九條　警視總監ハ廳中處務ノ細則ヲ設クルコトヲ得

第二十條　警視總監事故アルトキハ巡査本部長其職務ヲ代理ス

第二十一條　警視ハ總監ノ命ヲ承ケテ警察ニ關スル事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ統督ス

第二十二條　消防司令長ハ總監ノ命ヲ承ケ水火消防ニ關スル事務ヲ掌理シ消防士以下ヲ統督ス

第二十三條　警察醫長ハ總監ノ命ヲ承ケ警察監獄ニ關スル醫務ヲ掌理シ警察醫及監獄醫ヲ統督ス

第二十四條　典獄ハ總監ノ命ヲ承ケ監獄ニ關スル事務ヲ掌理シ監獄書記以下ヲ統督ス

第二十五條　警部ハ上官ノ指揮ヲ承ケ警察ニ關スル事務ヲ分掌シ巡査ヲ指揮監督ス

第二十六條　警視屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ總監官房及各局ニ分屬シ庶務ニ從事ス

第二十七條　消防士ハ消防司令長ノ命ヲ承ケ消防組ヲ指揮監督ス

第二十八條　警察醫ハ警察醫長ノ命ヲ承ケ警察ニ關スル醫務ヲ掌ル

第二十九條　監獄書記ハ典獄ノ命ヲ承ケ監獄ニ關スル庶務ニ從事ス

典獄事故アルトキハ總監ノ命ヲ承ケ上席書記其職務ヲ代理ス

第三十條　看守長ハ典獄ノ命ヲ承ケ監獄ノ戒護ヲ掌リ看守ヲ指揮監督ス

第三十一條　消防機關士ハ上官ノ指揮ヲ承ケ蒸氣喞筒ノ運用ヲ掌ル

第三十二條　巡査及看守ニ關スル規定ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第三十三條　警視總監官房ニ左ノ三部ヲ置ク

第一部

第二部

第三部

第三十四條　第一部ニ左ノ二課ヲ置ク其分掌左ノ如シ

第一課

一　新聞紙雜誌及政治風俗ニ關スル出版物並政社集會ニ關スル事項

第二課

一　外國人ニ關スル事項

第三十五條　第二部ニ左ノ三課ヲ置ク其分掌左ノ如シ

第一課

一　機密文書並官吏ノ進退賞罰其他身分ニ關スル事項

第二課

一　公文ノ接受發送並官印廳印ノ管守ニ關スル事項

第三課

一　公文ノ編纂保存統計並書籍ノ管理ニ關スル事項

第三十六條　第三部ニ左ノ三課ヲ置ク其分掌左ノ如シ

第一課

一　經費豫算決算及金錢出納ニ關スル事項

第二課

一　金錢物品出納ノ檢査ニ關スル事項

第三課

一　需用物品ノ調度及地所建物ニ關スル事項

一　官沒並保管ノ金錢物品及不用物品ニ關スル事項

第三十七條　警視廳ノ事務ヲ分掌セシムル爲メニ左ノ局部ヲ置ク

警務局

醫務局

巡査本部

消防署

監獄署

第三十八條　警務局ニ左ノ三課ヲ置ク其分掌左ノ如シ

第一課

一　營業及風俗警察並銃砲火藥刀劍等ニ關スル事項

第二課

一　交通警察並田野森林河海堤防取締及水火災遺流失物埋藏物等ニ關スル事項

第三課

一　衛生警察ニ關スル事項

第三十九條　醫務局ニ於テハ警察監獄ニ關スル醫務及分析等ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十條　巡査本部ニ左ノ三課ヲ置ク其分掌左ノ如シ

第一課

一　警察署警察分署派出所等ノ廢置及警察區畫ニ關スル事項

一　警察署以下處務規程及其職員ノ配置並禮式服裝ニ關スル事項

一　巡査召募及教習ニ關スル事項

第二課

一　刑事警察ニ關スル事項

第三課

一　警衛ニ關スル事項

第四十一條　巡査本部ニ部長及副長各一人其他ノ各局部ニ局部長一人各課ニ課長一人課僚若干人ヲ置ク

第四十二條　巡査本部長ハ奏任一等以下其他ノ局部長ハ奏任二等以下ノ警視ヲ以テ之ニ補シ巡査本部副長ハ奏任三等以下ノ警視ヲ以テ之ニ補ス

課長課僚ハ警部又ハ屬ヲ以テ之ニ充ツ

警務局長ハ警察醫長ヲ以テ之ニ補シ警察醫ヲ以テ課僚トス

第四十三條　巡査本部長ハ警察事務ニ就キ警察署長以下ヲ指揮スルコトヲ得

第四十四條　第四十一條ノ外總監官房ニ參事及巡視各二人ヲ置ク

參事ハ總監ノ諮詢ニ應シ意見ヲ具ヘ及審議立案ヲ掌ル

參事ハ總監ノ命ヲ承ケ局部ノ事務ヲ補助スルコトアルヘシ

巡視ハ總監ノ命ヲ承ケ常ニ警察全般ヲ巡視シ其警察署ニ關スル事項ハ巡査本部長ニ報告シ其他ハ總監ニ具狀スヘシ

第四十五條　參事巡視ハ奏任二等以下ノ警視ヲ以テ之ニ補ス

第四十六條　消防署ハ水火消防ニ關スル事務ヲ掌ル

第四十七條　消防署ニ署長一人課僚若干人ヲ置ク

署長ハ消防司令長ヲ以テ之ニ補シ課僚ハ消防士消防機關士ヲ以テ之ニ充ツ

第四十八條　東京市內ニ消防分署若干ヲ置キ分署長一人課僚若干人ヲ置ク

消防分署長ハ消防士ヲ以テ之ニ補シ課僚ハ消防士消防機關士ヲ以テ之ニ充ツ

第四十九條　監獄署ニ左ノ二課ヲ置ク其分掌左ノ如シ

第一課

一　文書ノ接受發送保存統計ニ關スル事項

一　囚人ノ出入名籍願訴特赦假出獄給與品差入品所有貨物ニ關スル事項

一　作業工錢器具材料製品ニ關スル事項

一　第二課ノ主掌ニ屬セサル事項

第二課

一　囚人ノ戒護書信接見ニ關スル事項

一　囚人ノ行狀賞罰ニ關スル事項

第五十條　監獄署ニ署長一人各課ニ課長一人課僚若干人ヲ置ク

署長ハ典獄ヲ以テ之ニ補シ第一課長及其課僚ハ監獄書記、第二課長及其

課僚ハ看守長ヲ以テ之ニ充ツ

第五十一條　東京府下ニ監獄支署若干ヲ置キ支署長一人課僚若干人ヲ置ク

支署長ハ監獄書記ヲ以テ之ニ補シ課僚ハ監獄書記看守長ヲ以テ之ニ充ツ

第五十二條　東京府下ニ警察署若干ヲ置キ其部内ニ便宜分署ヲ置ク

第五十三條　警察署ニ署長一人課僚若干人ヲ置ク

署長ハ奏任三等以下ノ警視ヲ以テ之ニ補シ課僚ハ警部ヲ以テ之ニ充ツ

第五十四條　警察分署ニ分署長一人ヲ置キ警部ヲ以テ之ニ補シ警部若干人ヲ以テ課僚ニ充ルコトヲ得

第五十五條　警視廳職員ノ外監獄醫教誨師ヲ置キ判任ノ待遇トス其定員ハ總監之ヲ定メ内務大臣ノ認可ヲ受ク可シ

○北海道廳

○北海道廳官制　明治二十四年七月勅令第百十一號

朕北海道廳官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

北海道廳官制

第一條　北海道廳ニ左ノ職員ヲ置ク

長官

書記官

警部長

財務長

參事官

技師

典獄

屬

技手

警部

監獄書記

看守長

監獄醫

第二條　長官一人勅任トス

第三條　書記官二人警部長一人財務長一人參事官二人典獄一人奏任トス

第四條　屬警部監獄書記看守長監獄醫ハ判任トス郡區書記ヲ通シテ四百十五人ヲ以テ定員トス

前項各官ノ定員ハ内務大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム

第五條　技師技手ハ道廳ノ須要ニ依リ判任官豫算定額内ニ於テ本年勅令第八十四號技術官俸給令ニ依リ之ヲ置クコトヲ得

第六條　長官ハ內務大臣ノ指揮監督ニ屬シ各省ノ主務ニ就テハ各省大臣ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ執行シ北海道ノ拓地殖民並部內ノ行政事務ヲ總理ス

第七條　長官ハ屯田兵ノ開墾授產ノ事ヲ監督シ並北海道集治監ヲ管理ス

第八條　長官ハ北海道ノ事務ニ付其職權若クハ特別ノ委任ニ依リ法律命令ノ範圍內ニ於テ管內一般又ハ其一部ニ廳令ヲ發スルコトヲ得

第九條　廳令ハ內務大臣其他主務ノ大臣ニ於テ公益ヲ害シ或規ニ違ヒ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ之ヲ取消シ又ハ中止スルコトアルヘシ

第十條　長官ハ非常急變ノ場合ニ臨ミ兵力ヲ要シ又ハ警護ノ爲メ兵備ヲ要スルトキハ師團長旅團長及屯田兵司令官ニ移牒シ出兵ヲ請フコトヲ得

第十一條　長官ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任官ノ進退ハ內務大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第十二條　長官ハ法律命令ノ定ムル所ニ從ヒ所部ノ官吏ヲ懲戒ス其奏任官ニ係ルモノハ之ヲ內務大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第十三條　長官ハ豫算定額內ニ於テ奏任官以下特別ノ勸勞アルモノヲ賞與スルコトヲ得其奏任官ニ係ルモノハ之ヲ內務大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第十四條　長官ハ須要ニ從ヒ判任官俸給豫算定額內ニ於テ雇員ヲ使用スルコトヲ得

第十五條　長官ハ廳中及其所轄官廳ノ處務細則ヲ定ムルコトヲ得

第十六條　北海道廳ニ長官官房ヲ置ク

長官官房ニ書記若干名ヲ置ク屬ヲ以テ之ニ充ツ

第十七條　長官官房ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　官吏ノ進退身分ニ關スル事項

二　文書ノ往復

三　官印廳印ノ管守

四　記錄編輯統計報告ニ關スル事項

五　外國人ニ關スル事項

第十八條　長官事故アルトキハ上席書記官其職務ヲ代理ス

第十九條　道廳ノ事務ヲ分掌セシムル爲メニ左ノ三部一署ヲ置ク

內務部

一　學務衛生社寺ニ關スル事項

二　兵事戶籍褒賞賑恤及區町村費ニ關スル事項

三　農工商務ニ關スル事項

四　地理山林ニ關スル事項

五　水陸運輸ニ關スル事項
六　漁獵ニ關スル事項
七　河港堤防道路鐵道橋梁排水渠ニ關スル事項
八　官衙ノ建築修繕ニ關スル事項
九　他部ノ主掌ニ屬セサル事項

警察部

一　高等警察及行政警察ニ關スル事項

財務部

一　金錢物品ノ管理出納ニ關スル事項
二　豫算決算ニ關スル事項
三　租稅ノ賦課徵收ニ關スル事項

監獄署

一　道廳監獄ニ關スル事項

第二十條　書記官ハ內務部長、警部長ハ警察部長、財務長ハ財務部長、典獄ハ監獄署長ト爲リ各長官ノ指揮ヲ承ケ部下ノ官吏ヲ監督シ所部ノ事務ヲ掌理ス

第二十一條　參事官ハ長官ノ諮詢ニ應シ意見ヲ具ヘ及審議立案ヲ掌ル
參事官ハ長官ノ命ヲ承ケ內務部各課長トナリ又ハ臨時各部課ノ事務ヲ助クルコトアルヘシ

第二十二條　技師ハ長官又ハ部長ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス

第二十三條　各部署中便宜課ヲ設ケ各課ニ課長一人ヲ置キ部署長ノ指揮ヲ承ケ課務ヲ掌理ス
課長ハ屬ヲ以テ之ニ充ツ但技師ヲ以テ之ニ充ツルコトアルヘシ

第二十四條　屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第二十五條　技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス

第二十六條　警部ハ上官ノ指揮ヲ承ケ警察事務ヲ分掌シ部下ノ巡査ヲ指揮監督ス

第二十七條　監獄書記ハ典獄ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス
典獄事故アルトキハ上席書記長官ノ命ヲ承ケ其職務ヲ代理ス

第二十八條　看守長ハ典獄ノ指揮ヲ承ケ監獄ノ戒護ヲ掌リ看守ヲ指揮監督ス

第二十九條　監獄醫ハ典獄ノ指揮ヲ承ケ監獄ニ係ル醫務ニ從事ス

第三十條　道廳職員ノ外教誨師ヲ置ク判任ノ待遇トス其定員ハ長官之ヲ定メ內務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第三十一條　巡査及看守ニ關スル規定ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第三十二條　每郡若クハ數郡及每區ニ警察署ヲ置キ各警察署ノ部內ニ警察

分署ヲ配置ス

警察署長ハ郡區長ヲ以テ之ニ充テ警察分署長ハ戸長ヲ以テ之ニ充ツ但土地ノ情況ニ依リ特ニ警察署又ハ分署ヲ設置シ警部ヲ以テ其署長ニ充ツルコトヲ得

第三十三條　監獄支署若干ヲ置キ書記ヲ以テ其長ニ充ツ

第三十四條　各郡區職員ヲ置ク左ノ如シ

郡長
區長
郡書記
區書記

第三十五條　郡長ハ每郡若クハ數郡ニ一人區長ハ每區ニ一人ヲ置ク但函館區長ハ書記官ノ內一人之ヲ兼任ス

第三十六條　郡長區長ハ奏任トス長官ノ指揮ヲ承ケ法律命令ヲ部內ニ執行シ部內ノ行政事務ヲ掌理ス

第三十七條　郡區書記ハ判任トス郡區長ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第三十八條　地方官官制中警察官及郡長郡書記ニ係ル條項ニシテ本令ニ牴觸セサルモノハ北海道廳警察官及郡區長並郡區書記ニモ適用ス

附則

第三十九條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○北海道集治監官制 明治二十四年七月 勅令第百八號

朕北海道集治監官制ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

第一條　北海道集治監ニ左ノ職員ヲ置ク

典獄
分監長
書記
看守長
監獄醫

第二條　典獄一人奏任トス北海道廳長官ノ指揮監督ヲ承ケ監獄ノ事務ヲ掌理ス

第三條　典獄ハ所屬ノ官吏ヲ監督シ判任官以上ノ進退ハ北海道廳長官ニ具狀シ看守以下ハ之ヲ專行ス

第四條　典獄ハ臨時ノ須要ニ依リ判任官以下俸給豫算定額內ニ於テ雇員ヲ使用スルコトヲ得

第五條　典獄ハ北海道集治監據算定額內ニ於テ判任官以下特別ノ勤勞アル

モノヲ賞與スルコトヲ得其判任官ニ係ルモノハ北海道廳長官ニ具狀シ看守以下ニ係ルモノハ之ヲ專行ス

第六條　典獄ハ法律命令ノ定ムル所ニ從ヒ所屬官吏ヲ懲戒ス其判任官以上ニ係ルモノハ北海道廳長官ニ具狀シ看守以下ハ之ヲ專行ス

第七條　分監長三人奏任トス各分監ノ長トナリ典獄ノ指揮監督ヲ承ケ分監ノ事務ヲ掌理ス

本監及分監ノ廢設竝其位置ハ內務大臣之ヲ定ム

第八條　典獄事故アルトキハ上席分監長北海道廳長官ノ命ヲ承ケ其事務ヲ掌理ス

第九條　書記ハ判任トス本監及分監ニ分屬シ典獄又ハ分監長ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第十條　看守長ハ判任トス本監及分監ニ分屬シ典獄又ハ分監長ノ命ヲ承ケ監獄ノ戒護ヲ掌リ看守ヲ指揮監督ス

第十一條　監獄醫ハ判任トス本監及分監ニ分屬シ典獄又ハ分監長ノ命ヲ承ケ監獄ニ係ル醫務ニ從事ス

第十二條　書記ハ三十一人看守長ハ六十一人監獄醫ハ八人ヲ以テ定員トス

第十三條　看守ニ係ル規程ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第十四條　事務ノ分課竝處務ノ規程ハ北海道廳長官之ヲ定ム

第十五條　監獄職員ノ外教誨師六人以下ヲ置ク判任待遇トス

附則

第十六條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○地方官官制

明治二十三年十月勅令第二百二十五號

朕地方官官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

地方官官制

第一條　各府縣ニ職員ヲ置ク左ノ如シ

知事
書記官
警部長
收稅長
參事官
技師
典獄
屬
技手
警部

收稅屬
監獄書記
看守長

第二條　知事一人勅任トス
第三條　書記官一人奏任トス
第四條　警部長收稅長各一人奏任二等以下トス
第五條　參事官二人奏任三等以下トス
第六條　典獄一人奏任四等以下トス
第七條　屬警部收稅屬監獄書記ハ判任トシ看守長ハ判任三等以下トス
判任官ハ各府縣ヲ通シテ左ノ人員ヲ以テ定員トス
屬警部監獄書記看守長　六千二百九十六人
收稅屬　五千六百六人
屬警部監獄書記看守長ノ每府縣ノ定員ハ內務大臣之ヲ定メ其各官ノ定員ハ府縣知事內務大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム
收稅屬ノ每府縣ノ定員ハ大藏大臣之ヲ定ム
第八條　技師技手ハ府縣ノ須要ニ依リ判任官俸給豫算定額內ニ於テ技術官官等俸給令ニ依リ之ヲ置クコトヲ得
第九條　知事ハ內務大臣ノ指揮監督ニ屬シ各省ノ主務ニ就テハ各省大臣ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ執行シ部內ノ行政事務ヲ總理ス
第十條　知事ハ部內ノ行政事務ニ付其職權若クハ特別ノ委任ニ依リ法律命令ノ範圍內ニ於テ管內一般又ハ其一部ニ府縣令ヲ發スルコトヲ得
府縣令ハ特ニ施行ノ日ヲ揭クルモノヲ除クノ外官報其他特ニ定ムル方法ニ依リ部內ニ公布シタル後七日ヲ以テ施行ノ期限トス但島地ハ其所轄島廳若クハ郡役所ニ到達シタル翌日ヨリ起算ス
第十一條　府縣令ハ內務大臣其他主務ノ大臣ニ於テ公益ヲ害シ成規ニ違ヒ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ之ヲ取消シ又ハ中止セラルヽコトアルヘシ
第十二條　知事ハ非常急變ノ場合ニ臨ミ兵力ヲ要シ又ハ警護ノ爲メ兵備ヲ要スルトキハ師團長若クハ旅團長ニ移牒シテ出兵ヲ請フコトヲ得
第十三條　知事ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任官ノ功過ハ內務大臣及主務大臣ニ具狀シ判任官以下ノ進退ハ之ヲ專行ス
第十四條　知事ハ法律命令ノ定ムル所ニ從ヒ所部ノ官吏ヲ懲戒ス其奏任官ニ係ルモノハ之ヲ內務大臣若クハ主務大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス
第十五條　知事ハ其廳ノ豫算定額內ニ於テ奏任官以下特別ノ勤勞アル者ヲ賞與スルコトヲ得其奏任官ニ係ルモノハ之ヲ內務大臣若クハ主務大臣ニ

具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第十六條　知事ハ須要ニ依リ判任官俸給豫算定額內ニ於テ雇員ヲ使用スルコトヲ得

第十七條　知事ハ廳中處務ノ細則ヲ設クルコトヲ得

第十八條　知事事故アルトキハ書記官其職務ヲ代理ス

第十九條　知事官房ヲ置ク

知事官房ニ書記若干名ヲ置ク屬ヲ以テ之ニ充ツ

第二十條　知事官房ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　官吏ノ進退身分ニ關スル事務

一　文書ノ受付

一　官印府縣印ノ管守

一　外國人ニ關スル事務

第二十一條　府縣ノ事務ヲ分掌セシムル爲メニ左ノ二部三署ヲ置ク

內務部

警察部

直稅署

間稅署

監獄署

第二十二條　書記官ハ內務部長、警部長ハ警察部長、收稅長ハ直稅署長及間稅署長、典獄ハ監獄署長トナリ各知事ノ命ヲ承ケテ部下ノ官吏ヲ統督シ所部ノ事務ヲ掌理ス

第二十三條　內務部ニ左ノ四課ヲ置ク其分掌左ノ如シ

第一課

一　議員選擧及府縣會、郡會、市町村會、公共組合會等ノ會議ニ關スル事項

一　府縣稅備荒儲蓄並郡町村ノ經濟ニ關スル事項

一　右ノ外他課ノ主管ニ屬セサル事項

第二課

一　農工商務及土木ニ關スル事項

一　官有地及土地收用ニ關スル事項

第三課

一　學務、衛生、兵事、社寺及戶籍ニ關スル事項

第四課

一　府縣費ノ會計ニ關スル事項

一　府縣稅及備荒儲蓄ノ收支出納ニ關スル事項

第二十四條　警察部ハ高等警察及行政警察ノ事務ヲ掌ル

第二十五條　直稅署ハ直稅ノ賦課租稅ノ徵收及徵稅費ニ關スル事務ヲ掌ル

間税署ハ間税ノ賦課及間税犯則者處分ニ關スル事務ヲ掌ル

第二十六條　監獄署ハ監獄ニ關スル事務ヲ掌ル

第二十七條　參事官ハ知事ノ諮詢ニ應シ意見ヲ具ヘ及審議立案ヲ掌ル

參事官ハ知事ノ命ヲ承ケテ内務部各課長トナリ又ハ臨時各部課ノ事務ヲ助クルコトアルヘシ

第二十八條　内務部各課長ハ屬ヲ以テ之ニ充ツ但參事官兼掌スル場合ハ此限ニ在ラス

第二十九條　警察部直税署間税署監獄署ノ事務ノ分課ハ知事之ヲ定メ主務大臣ニ報告ス可シ

第三十條　前諸條ニ定ムルノ外臨時ノ事件アルトキハ知事ニ於テ便宜其主掌ノ部課ヲ指定ス可シ

第三十一條　屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ内務部各課及知事官房ニ分屬シ庶務ニ從事ス

第三十二條　警部ハ上官ノ指揮ヲ承ケ警察事務ヲ分掌シ部下ノ巡査ヲ指揮監督ス

第三十三條　收税屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ直税署間税署各課ニ分屬シ庶務ニ從事ス

第三十四條　監獄書記ハ典獄ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

典獄事故アルトキハ上席書記知事ノ命ヲ承ケテ其職務ヲ代理ス

第三十五條　看守長ハ典獄ノ命ヲ承ケ監獄ノ戒護ヲ掌リ看守ヲ指揮監督ス

第三十六條　各郡市ニ警察署ヲ置キ警察署ノ下其部内ニ於テ警察分署ヲ配置ス

京都市大阪市ハ内務大臣ノ認可ヲ經テ二箇以上ノ警察署ヲ設クルコトヲ得

警察署長及警察分署長ハ警部ヲ以テ之ニ充ツ

第三十七條　巡査及看守ニ關スル規程ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第三十八條　府縣内須要ノ地ニ直税分署及間税分署ヲ配置ス其配置及管轄區域ハ大藏大臣之ヲ定ム

第三十九條　直税分署長及間税分署長ハ收税屬ヲ以テ之ニ充ツ

第四十條　府縣職員ノ外監獄醫及教誨師ヲ置キ判任ノ待遇トス其定員ハ知事之ヲ定メ内務大臣ノ認可ヲ受ク可シ

第四十一條　東京府ノ警察及監獄ニ關スル事項ハ警視廳官制ニ依ル

第四十二條　各郡職員ヲ置ク左ノ如シ

郡長

郡書記

第四十三條　郡長一人奏任三等以下トス

第四十四條　郡書記ハ判任トス其定員ハ知事之ヲ定メ内務大臣ノ認可ヲ受ク可シ

第四十五條　郡長ハ知事ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ部内ニ執行シ部内ノ行政事務ヲ掌理ス

第四十六條　郡長ハ法律命令ヲ以テ委任シ及知事ヨリ特ニ分任スル條件ハ便宜施行スルコトヲ得

第四十七條　郡長ハ行政事務ニ就テ其部内町村ノ町村長ヲ指揮シ其公同事務ニ就テハ之ヲ監督ス

第四十八條　郡長ハ郡書記ノ任免ヲ知事ニ具申ス

第四十九條　郡長ハ法律命令若クハ知事ヨリ委任セラレタル事件ニ付警察規則ヲ發スルコトヲ得但特ニ施行ノ日ヲ掲クルモノヲ除クノ外地方ノ慣行若クハ特ニ定ムル方法ニ依リ部内ニ公布シタル後七日ヲ以テ施行ノ期限トス

第五十條　郡ノ警察規則ハ知事及内務大臣主務大臣ニ於テ公益ヲ害シ成規ニ違ヒ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ之ヲ取消シ又ハ中止セラルヽコトアルヘシ

第五十一條　郡書記ハ郡長ノ命ヲ承ケテ庶務ヲ分掌ス

郡長事故アルトキハ上席郡書記知事ノ命ヲ承ケテ其職務ヲ代理ス

第五十二條　勅令ヲ以テ指定スル所ノ島地ニ特ニ島廳ヲ置ク

第五十三條　島廳職員左ノ如シ

島司

島廳書記

第五十四條　島司一人奏任二等以下トス

第五十五條　島廳書記ハ判任トス其定員ハ其府縣判任官ノ定員内ヲ以テ知事之ヲ定ム

第五十六條　島司ハ知事ノ指揮監督ヲ承ケ部内ノ行政事務ヲ掌理シ知事ヨリ委任スル事項ハ便宜施行スルコトヲ得

第五十七條　島司ハ第四十九條ニ依リ警察規則ヲ發スルコトヲ得

第五十八條　島司ハ島廳書記ノ任免ヲ知事ニ具申ス

前項ノ警察規則ニ付テハ第五十條ヲ適用ス

第五十九條　島司ハ行政事務ニ就テハ其部内町村ノ吏員ヲ指揮監督ス

第六十條　島廳書記ハ島司ノ命ヲ承ケテ庶務ヲ分掌ス

島司事故アルトキハ上席島廳書記知事ノ命ヲ承ケテ其職務ヲ代理ス

○稟請ヲ要セス處分後報告條件　明治廿四年三月農商務省訓令第十號

北海道廳　府縣

自今左記ノ條件稟請ヲ要セス處分後報告スヘシ（明治二十四年五月農商務省訓令第二十五號改正ニ依ル）

一　官有山林原野ノ枯木倒木危險木障害木處分ノ件

二　官有山林原野中測量ニ支障ノ立竹木伐採ノ件

三　官有山林原野ニ於テ季節アル產物賣却ノ件

　但五箇年以上ノ年期賣渡ハ此限リニアラス

四　官有山林原野ヲ官林ヘ編入ノ件

五　官有山林原野地種目組替ニ付地上立竹木賣却ノ件

六　官有山林原野ヘ公益ノ爲メ竹木獻植ノ件

七　非常ノ際治水ノ爲メ官有山林原野ノ立竹木處分ノ件

八　官有山林原野ニ於テ鑛業上必要ナル地所貸渡ノ件

　但五箇年以上ノ年期貸渡ハ此限リニアラス

九　官有山林原野一區域段別五町歩以下ニシテ一箇年借受料金五十圓以下ノ土地貸渡ノ件

　但數區域ニシテ五町歩ヲ超過スルトキ又ハ五箇年以上ノ年期貸渡ハ此限ニアラス

十　從來ノ慣行ニ由リ官有山林原野（國土保安ニ關係ナキ箇所）ニ於テ代金五十圓以下ノ土石賣却ノ件

　但五年以上ノ年期賣渡ハ此限リニアラス

十一　官有山林原野ニ於テ墓地火葬場汚穢物埋却場及斃牛馬捨場新設又ハ取廣メノ爲メ段別一町歩以下賣却ノ件

　但其地上立竹木賣渡代金五拾圓以上アルトキハ此限リニアラス

十二　官有山林原野一段歩以內ニシテ賣渡代金十圓以下ノ箇所民有地又ハ河川道路等ニ介在セルモノ接續地主ヘ賣却ノ件

以上十二項ハ北海道廳沖繩縣ヲ除ク

十三　試掘並ニ借區廢業願聞届ノ件

十四　鑛山借區稅怠納者鑛業禁止ノ件

十五　試掘期限經過ノ者指令並ニ借區期限經過ノ者坑區劵引揚ノ件

　但以上十三項乃至十五項ノ場合ニ於テハ報告ノ際該證劵若クハ指令書ヲ添附スヘシ

十六　試掘借區廢業期限經過若クハ禁止後鑛業跡取締ノ件

十七　砂鐵ノ爐稼願許可ノ件

十八　砂金砂錫砂鐵採取人及爐稼人相續加除名並讓受渡願許可ノ件

○官有土地水面ニ關スル處分委任條件（明治二十四年七月內務省訓令第十四號）

北海道廳　府縣

第一條　官有土地水面ニ關スル處分ノ內左ニ揭クルモノハ之ヲ委任ス但處分ノ後內務報告例ニ依リ報告スヘシ

一官有堤塘道路並木敷港灣溝渠溜池用惡水路等ノ新設修繕ニ際シ官有土地水面ヲ其敷地ニ充用スル事

二北海道ニ於テ警察署郡區役所戶長役場及官立學校病院等ノ敷地ニ官有土地ヲ充用スル事

三直接公用ニ供シタル官有土地水面ヲ相當ノ料金ヲ徵シ季節ヲ限リ一時ノ使用ヲ許シ並從前既ニ許可シタルモノヽ繼續使用ヲ許ス事

四明治二十三年七月勅令第百三十五號官有地特別處分規則第二條ニ依リ官有土地水面ノ使用ヲ許ス事

五直接公用ニ供セサル五町歩以下ノ官有土地水面ヲ相當ノ料金ヲ徵シ貸付スル事

六府縣ニ於テ五町歩以下ノ官有土地ヲ明治二十三年十一月勅令第二百七十六號官有地取扱規則第七條ニ依リ貸付スル事

七直接公用ニ供セサル官有土地水面市街ニ在テハ百五十坪以下村落ニ在テハ三段歩以下ノ箇所ヲ賣拂フ事

八府縣ニ於テ豫約代價ヲ以テ開墾既成ノ土地ヲ賣拂フ事

九明治二十三年七月勅令第百三十五號官有地特別處分規則第三條並同年十一月勅令第二百七十五號官有財產管理規則第十二條及第十三條ニ依リ一段歩以下ノ官有土地水面ヲ讓與スル事

十明治二十三年十月當省訓令第三十六號ニ依リ直接公用ニ供シタル官有水面一町歩以下ヲ埋立ツル事並同上ノ訓令ニ依リ埋立成功ノ後其土地ヲ處及スル事

十一官有土地水面ニ屬スル土石砂利並水陸ノ生產物ヲ賣拂フ事

十二官有土地ニ屬スル枯損障害又ハ測量ニ支障アル竹木ヲ伐採シ及處分スル事並盜伐誤伐ニ係ル竹木處分ノ事

十三天災事變ニ際シ公益ノ爲メ必要已ムコトヲ得サル場合ニ於テ官有土地ニ屬スル竹木ヲ伐採シ及處分スル事

十四各廳ノ所用ニ供スルモノヲ除ク外民有土地ノ寄付ヲ受納シ並民有土地ノ上地ヲ許可スル事

十五前各項ノ處分其他官廳ノ處分又ハ形質ノ變更所用ノ廢改等ニ基キ官民有土地水面ノ種目ヲ變換スル事但皇宮地及各廳ノ所有地ニ關スルトキハ此限ニアラス

第二條　前條ノ官有土地水面ニシテ當省直轄又ハ流域兩管轄以上ニ跨ル河川及國道港灣河口ニ關係アルモノハ先ツ土木監督署ニ協議シテ本大臣ニ稟議スヘシ

官國幣社延喜式內國史現在神社境內ニ關係アルモノ亦本大臣ニ稟議スヘシ

第三條　明治八年五月當省達乙第六十五號第一項及第二項並同十二年六月當省達乙第二十九號同十七年二月當省達乙第十號ハ之ヲ廢止ス

第四類　官等俸給　旅費手當

○官等俸給

○非職官吏府縣市町村及公共組合ノ吏員ト爲リ給料ヲ受クル者ハ非職俸ヲ給セス　明治廿三年八月勅令第百六十一號

朕非職官吏俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

非職官吏ニシテ府縣郡市町村及公共組合ノ吏員トナリ共給料ヲ受クル者ニハ官吏非職條例第五條ノ俸給ヲ給セス

○侍從職幹事俸給　明治二十三年十月宮內省達第十九號

侍從職幹事俸給ハ其等位ニ依リ宮內省官制第五十條高等官俸給第三級俸第四級俸第五級俸第六級俸ノ內ヲ賜フ

○集治監假留監看守人員及俸給　明治二十三年十月勅令第二百廿八號

朕集治監假留監看守人員及俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

集治監假留監看守ノ人員及俸給ヲ定ムルコト左ノ如シ

一　看守ノ人員ハ在監人五百名ニ付七十五名トス

但三池集治監及北海道ニアル各集治監ニハ此定員ノ外五十名以下ノ看守ヲ増置スルコトヲ得

二　在監人五百名ヲ超ユルトキハ百名ヲ増ス毎ニ看守十名ヲ加ヘ五百名ニ満タサルトキハ百名ヲ減スル毎ニ看守十名ヲ減ス

三　看守人員ノ増減ヲ行フハ在監人ノ員數ニ百名ノ差ヲ生シタルトキニ於テスヘシ

四　看守俸給ハ月俸拾圓以下六圓以上トス但勤續満九年以上ノ者ハ拾貳圓満十二年以上ノ者ハ拾五圓ヲ給スルコトヲ得

五　在監人ノ減少ニ由リ過員トナリタル看守ハ休職ヲ命シ現俸ノ三分一ヲ給スルコトヲ得但休職ハ一年ヲ期トス期満ツレハ其職ヲ免ス

○廳府縣看守俸給ノ件

明治二十三年十月勅令第二百二十九號

廢廳府縣看守俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令第二百二十八號集治監假留監看守人員及俸給ノ件中俸給及休職ニ關ル規定ハ廳府縣看守ニモ適用ス

○官林巡邏給料支給規則

明治二十三年九月農商務省訓令第四十九號

官林巡邏給料支給規官則左ノ通リ改定ス

林巡邏給料支給規則

第一條　官林巡邏ノ給料ハ年給トシ左表定ムル所ニ依ル

第二條　年給ハ毎年三月末日ニ十二箇月分ヲ取經メ之ヲ支給スヘシ

第三條　新ニ採用シタルトキ當月分ノ給料ハ發令ノ翌日ヨリ解免シタルトキ當月分ノ給料ハ發令ノ翌日ヨリ日割ヲ以テ計算シ死亡ノトキハ月割ヲ以テ計算スヘシ

第四條　増俸減俸ノ場合ニハ發令ノ翌日ヨリ日割計算ニテ支給スヘシ（明治廿三年十一月農商務省訓令第六十六號ヲ以テ本條以下追加）

第五條　日割計算ノ法ハ其月ノ現日數ニ依ル

	一等	二等	三等	四等	五等	六等	七等	八等	九等	十等	十一等	十二等	十三等	十四等	十五等	十六等	十七等
年給	拾五圓	拾四圓	拾三圓	拾貳圓	拾壹圓	拾圓	九圓	八圓	七圓	六圓	五圓	四圓	三圓	貳圓五拾錢	貳圓	壹圓五拾錢	壹圓

○錦鷄間祇候待遇

明治二十三年十一月宮内省達第二十一號

錦鷄間祇候ハ勅任官ノ待遇ヲ受ク

○郡長ニ特別年俸ヲ支給スヘキ各郡指定

明治廿三年十一月内務省告示第三十九號

明治二十三年十月勅令第二百二十六號地方官々等俸給令第四條第八條ニ依リ

左ノ郡ヲ指定ス

東京府　荏原郡　北豐島郡　東多摩郡南豐島郡

京都府　與謝郡　天田郡　紀伊郡　加佐郡

大坂府　西成郡　南郡日根郡　石川郡八上郡古市郡安宿部郡錦部郡志紀郡丹南郡

神奈川縣　南多摩郡　三浦郡　足柄下郡

兵庫縣　明石郡　津名郡　城崎郡美含郡

長崎縣　西彼杵郡　南高來郡　北松浦郡

新潟縣　中頸城郡　北蒲原郡　古志郡　雜太郡加茂郡羽茂郡

埼玉縣　北足立郡新座郡　入間郡高麗郡　秩父郡

群馬縣　東群馬郡南勢多郡　西群馬郡片岡郡

千葉縣　千葉郡市原郡　印幡郡下埴生郡南相馬郡　安房郡平郡朝夷郡長狹郡　海上郡匝瑳郡

茨城縣　新治郡　眞壁郡

栃木縣　河內郡　下都賀郡

奈良縣　添上郡添下郡山邊郡廣瀨郡平群郡　宇智郡吉野郡

三重縣　度會郡　三重郡朝明郡　桑名郡　阿拜郡山田郡

愛知縣　渥美郡　額田郡　知多郡　愛知郡

靜岡縣　長上郡敷知郡濱名郡　賀茂郡那賀郡　有渡郡安倍郡　駿東郡

山梨縣

中巨摩郡　南都留郡
滋賀縣
滋賀郡　犬上郡
岐阜縣
大野郡益田郡吉城郡　安八郡
長野縣
東筑摩郡　上水內郡　小縣郡　下伊那郡
宮城縣
牡鹿郡　志田郡玉造郡　柴田郡刈田郡　宮城郡
福島縣
伊達郡　信夫郡　北會津郡　菊多郡磐前郡磐城郡
撮手縣
西磐井郡東磐井郡　東閉伊郡中閉伊郡北閉伊郡　南九戸郡北九戸郡
青森縣
東津輕郡　三戸郡
山形縣
飽海郡　西田川郡　南村山郡

秋田縣
南秋田郡　仙北郡　北秋田郡
福井縣
坂井郡　南條郡今立郡　遠敷郡
石川縣
鹿島郡　能美郡　鳳至郡
富山縣
射水郡　礪波郡　上新川郡
鳥取縣
會見郡汗入郡　久米郡河村郡八橋郡
島根縣
那賀郡　島根郡秋鹿郡意宇郡
岡山縣
西北條郡東南條郡　淺口郡　兒島郡
廣島縣
安藝郡　御調郡世羅郡　深津郡沼隈郡安那郡　佐伯郡
山口縣
吉敷郡　阿武郡三島郡　玖珂郡

和歌山縣　名草郡海部郡　西牟婁郡
德島縣　那賀郡　板野郡
香川縣　那珂郡多度郡　大內郡寒川郡三木郡
愛媛縣　南宇和郡北宇和郡　風早郡和氣郡溫泉郡久米郡　越智郡野間郡
高知縣　幡多郡　高岡郡　土佐郡
福岡縣　企救郡　三潴郡　遠賀郡
大分縣　大分郡　下毛郡　日田郡
佐賀縣　東松浦郡　佐賀郡
熊本縣　飽田郡託摩郡宇土郡　天草郡　玉名郡

宮崎縣　宮崎郡北那珂郡　東臼杵郡　北諸縣郡
鹿兒島縣　鹿兒島郡谿山郡北大隅郡　高城郡薩摩郡甑島郡　南伊佐郡姶羽郡桑原郡西囎唹郡

○外交官及領事官ノ俸給旅費ニ關スル件

明治二十三年十二月勅令第二百十一號

朕外交官及領事官ノ俸給旅費等ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十三年勅令第二百五十七號外交官及領事官官制ニ依リ任セラレタル勅任二等特命全權公使、奏任二等代理公使、奏任二等公使館參事官及奏任二等總領事ニ給スヘキ俸給及旅費等ハ交際官並領事費用條例中ニ規定シタル特命全權公使、辨理公使、代理公使、參事官及總領事ノ給額ニ依ル

○神宮職員官等表中改正

明治廿三年十二月勅令第二百八十五號

朕茲ニ神宮職員官等表中改正ノ件ヲ裁可ス

神宮職員官等表中主典ノ官等ヲ四等ニ宮掌ノ官等ヲ五等ニ改ム

○巡査本部警察署警察分署詰警部及消防士消防機關士監獄書記看守長俸給令

明治廿四年四月勅令第三十六號

朕茲ニ巡査本部警察署警察分署詰警部及消防士消防機關士監獄書記看守長俸給令ヲ裁可ス

巡査本部警察署警察分署詰警部及消防士消防機關士監獄書記看守長俸給令

第一條　巡査本部警察署警察分署詰警部及消防士消防機關士監獄書記看守長ノ俸給ハ別表ニ依ル

第二條　前條規定ノ外ハ總テ明治十九年勅令第三十六號判任官官等俸給令ニ依ル

消防士消防機關士月俸表

官名／署名	消防署	第一分署	第二分署	第三分署	第四分署	第五分署	第六分署
消防士（分署長）		四拾五圓	四拾圓	同上	同上	同上	同上
消防士	四拾五圓	四拾圓	貳拾五圓	三拾圓	貳拾五圓	同上	同上
	貳拾五圓	貳拾圓	貳拾五圓	貳拾五圓	貳拾圓		
	貳拾五圓	貳拾圓	貳拾五圓	貳拾五圓	貳拾五圓		
消防機關士	三拾五圓	三拾圓	三拾圓	貳拾五圓	三拾圓	貳拾五圓	同上
	三拾圓	貳拾圓	貳拾圓	貳拾圓	貳拾圓		

監獄書記看守長月俸表

官名／署名	監獄書記（支署長）	監獄書記看守長（監獄書記課長）	監獄書記	看守長
監獄署		四拾圓	三拾五圓	拾五圓
		三拾圓	三拾圓	拾圓
石川島支署	五拾圓		三拾五圓	三拾圓
			貳拾五圓	貳拾圓
市ヶ谷支署	五拾圓		三拾五圓	三拾圓
			貳拾五圓	貳拾圓

○警察署長俸給區別ニ關シ警察署指定　明治二十四年四月

内務省告示第九號

明治二十四年四月勅令第三十五號警視廳高等官俸給令第四條ニ依リ警察署長俸給ノ區別ニ關シ警察署ヲ指定スルコト左ノ如シ

京橋警察署　久松町警察署
芝愛宕町警察署　麹町警察署
小川町警察署　淺草猿屋町警察署
淺草象潟町警察署　下谷警察署
本所相生町警察署
右警察署長年俸九百圓

阪本町警察署　和泉橋警察署
麻布警察署　品川警察署
牛込警察署　本郷警察署
富岡門前警察署　業平橋警察署
右警察署長年俸八百圓

高輪警察署　赤阪警察署
四谷警察署　新宿警察署
小石川警察署　板橋警察署
千住警察署　小松川警察署
水上警察署
右警察署長年俸七百圓

○市町村立小學校長及教員名稱及待遇　明治二十四年六月勅令第七十三號

朕市町村立小學校長及教員名稱及待遇ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　市町村立小學校長及教員名稱及待遇

一　小學校長
二　高等訓導　高等小學校ノ本科正教員タル者及尋常小學校ノ本科正教員中高等小學校ノ本科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ノ名稱トス
三　訓導　尋常小學校ノ本科正教員タル者ノ名稱トス
四　准訓導　小學校ノ本科准教員タル者ノ名稱トス
五　授業師　小學校ノ專科正教員タル者ノ名稱トス

六　准授業師　小學校ノ專科准教員タル者ノ名稱トス

第二條　市町村立小學校長及教員ハ左ノ區別ニ從ヒ判任官ヲ以テ待遇ス

一　小學校長教員ノ職ニ對スル待遇ニ從フ

二　高等訓導　判任官五等以上

三　訓導　判任官二等以下五等以上但特別ノ勤勞アル者ハ判任官一等ノ待遇ニ陞進スルコトヲ得

四　准訓導　判任官六等但從前文部省ノ認可ヲ經テ授與シタル修身科教授免許狀ヲ有スル者ハ判任官二等以下五等以上ノ待遇陞進スルコトヲ得又高等小學校ノ本科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ハ高等訓導ノ待遇ニ從ヒ、尋常小學校ノ本科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ハ訓導ノ待遇ニ從ヒ、小學校ノ專科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ハ授業師ノ待遇ニ從フコトヲ得

五　授業師　判任官三等以下五等以上但高等小學校ノ授業師及尋常小學校ノ授業師中高等小學校ノ專科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者又ハ特別ノ勤勞アル者ハ判任官二等ノ待遇ニ陞進スルコトヲ得又高等小學校ノ本科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ハ高等訓導ノ待遇ニ從ヒ、尋常小學校ノ本科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ハ訓導ノ待遇ニ從フコトヲ得

六　准授業師　判任官六等但高等小學校ノ本科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ハ高等訓導ノ待遇ニ從ヒ、尋常小學校ノ本科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ハ訓導ノ待遇ニ從ヒ、小學校ノ專科正教員タルコトヲ得ルノ資格ヲ有スル者ハ授業師ノ待遇ニ從フコトヲ得

○高等官任命及俸給令　明治二十四年七月　勅令第八十二號

朕茲ニ高等官任命及俸給令ヲ裁可ス

高等官任命及俸給令

第一條　高等官ヲ分テ勅任官奏任官トス

第二條　勅任官中親任式ヲ以テ任スル官ノ辭令書ハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ內閣總理大臣又ハ首座大臣之ニ副署ス

第三條　親任式ヲ以テ任スル官ヲ除クノ外勅任官ノ辭令書ハ御璽ヲ鈐シ內閣總理大臣之ヲ奉行ス

第四條　奏任官ノ辭令書ハ其內閣ニ屬スルモノハ內閣ノ印ヲ鈐シ內閣總理大臣之ヲ宣行シ其各省ニ屬スルモノハ省印ヲ鈐シ主任大臣之ヲ宣行ス

第五條　勅任奏任文官ノ年俸ハ別ニ定ムルモノヽ外左ノ如シ

內閣ノ部

內閣總理大臣	九千六百圓
內閣所屬職員	
書記官長	三千五百圓
局長	一號表ニ依ル
書記官	二號表ニ依ル
內閣總理大臣祕書官	一級俸千四百圓
恩給局審査官	二級俸千二百圓
一級俸二級俸各一人トス	
賞勳局	
總裁	四千圓
副總裁	三千圓
書記官	一級俸二千四百圓 二級俸二千圓
一級俸二級俸各一人トス	
法制局	
長官	四千圓
部長	三千圓
參事官	二號表ニ依ル
各省ノ部	

大臣	六千圓
次官	四千圓
局長	一號表ニ依ル
參事官	二號表ニ依ル
祕書官	
書記官	三號表ニ依ル
外務省翻譯官	千八百圓
內務省警保局主事	二號表ニ依ル
大藏省主計官	
大藏省主稅官	三號表ニ依ル
文部省視學官	千二百圓
農商務省特許局審判官	技術官俸給令ニ依ル
農商務省特許局審査官	千圓
遞信省監察官	三號表ニ依ル
遞信事務官	

第六條　年俸ニ等級アル者ハ主任大臣別表ニ依リ之ヲ給ス

第七條　陸海軍武官ノ年俸ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第八條　局長ハ奏任官ニ在ルコト五年以上ニアラサレハ之ニ任スルコトヲ

得ス

第九條　高等文官滿七年以上同一ノ職ヲ奉シ功績顯著ナル者ハ內閣總理大臣ノ上奏ニ依リ特ニ現俸八分ノ一以內ヲ增給スルコトヲ得同職中俸給ニ等級アルモノハ其最上級ニ達シタル日ヨリ起算ス

府縣知事ハ等級ニ拘ラス其知事令在職ノ年月ヲ通算ス

判事ハ大審院長檢事ハ檢事總長ニ補セラレタル日ヲ以テ最上級ニ達シタルモノトス

第十條　奏任官他ノ官廳ニ涉ルノ兼官ハ兼ヌル所ノ俸給三分ノ一以內ヲ給スルコトヲ得

同官廳ニ於ケル兼官ハ俸給ノ多額ニ就キ之ヲ給ス

第十一條　官ニ在リテ死亡シタル者ハ年俸三分ノ一ヲ其遺族ニ給ス非職者ニ於テモ亦同シ

第十二條　高等文官ノ年俸ハ之ヲ四分シ二月五月八月十一月ノ四期ニ於テ之ヲ給ス

第十三條　俸給ハ新任增俸減俸トモ總テ發令ノ翌日ヨリ計算ス

第十四條　非職廢官退官及死亡ノトキハ年俸ヲ月割計算トシテ當月分ノ全額ヲ給ス

第十五條　非職廢官退官者事務引繼殘務調理ノ爲特ニ命ヲ承ケ公務ニ從事スルトキハ其間尙從前ノ年俸ヲ給ス

第十六條　病氣ノ爲執務セサルコト九十日ヲ踰ユルモノハ俸給ノ半額ヲ減ス但公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹ルモノ及優恩ニ由リ賜暇休養スルモノハ此限ニアラス

第十七條　前條ノ外私事ノ故障ニ由リ執務セサルコト三十日ヲ踰ユルモノハ俸給ノ半額ヲ減ス

第十八條　他ノ高等官俸給令ニ於テ別ニ規定ナキモノハ總テ本令ノ規定ニ依ル

第十九條　俸給支給ニ關スル細則ハ大藏大臣省令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

第二十條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治十九年勅令第六號高等官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

一號表

官名	年俸	官名	年俸
內閣恩給局長	二千五百圓	大藏省主稅局長	三千圓
同記錄局長	二千五百圓	同國債局長	三千圓
同統計局長	二千五百圓	同監査局長	二千五百圓
同官報局長	二千五百圓	同預金局長	二千五百圓

官名	年俸等級
外務省政務局長	三千圓
同　通商局長	二千五百圓
同　取調局長	二千五百圓
同　飜譯局長	二千五百圓
內務省縣治局長	三千圓
同　警保局長	三千圓
同　土木局長	三千圓
同　衛生局長	二千五百圓
同　社寺局長	二千五百圓
同　庶務局長	二千五百圓
大藏省主計局長	三千圓
司法省總務局長	三千圓
文部省專門學務局長	三千圓
同　普通學務局長	三千圓
農商務省農務局長	三千圓
同　商工局長	三千圓
同　山林局長	三千圓
同　鑛山局長	二千五百圓
同　特許局長	二千五百圓
遞信省郵務局長	三千圓
同　管船局長	三千圓
同　電務局長	二千五百圓

二號表

官名	年俸等級
內閣書記官 內閣總理大臣秘書官	一級二千五百圓　三級二千四五級千六百圓　七級千二百圓　九級九百圓
法制局參事官	二級二千二百圓　四級千八百圓　六級千四百圓　八級千圓　十級八百圓
各省參事官	一級千八百圓　三級千四百圓　五級千　圓　七級　八百圓
各省大臣秘書官	二級千六百圓　四級千二百圓　六級　九百圓　八級　七百圓
各省書記官	一級千二百圓　三級九百圓　五級　七百圓
大藏省主計官	二級千　圓　四級八百圓
外務省翻譯官	一級千八百圓　三級千四百圓　五級千　圓　七級　八百圓
文部省視學官	二級千六百圓　四級千二百圓　六級　九百圓　八級　七百圓
遞信事務官	一級千二百圓　三級九百圓　五級　七百圓 二級千　圓　四級八百圓

三號表

○判任官俸給令 明治二十四年七月 勅令第八十三號

朕茲ニ判任官俸給令ヲ裁可ス

判任官俸給令

第一條　判任文官ノ月俸ヲ別テ十級トシ別表ニ依リ毎月下旬ニ於テ之ヲ支給ス

第二條　陸海軍准士官下士ノ月俸ハ別ニ定ムル所ニ依ル其他特ニ定ムルモノハ前條ノ限ニアラス

第三條　判任官ハ毎級在職一年以上ニ至ラサレハ增給スルコトヲ得ス

第四條　判任官最上俸ヲ受ケ五年ヲ踰ヘ事務練熟優等ナル者ハ特別ヲ以テ別表ノ範圍ニ拘ラス漸次七十五圓マテ增俸スルコトアルヘシ

第五條　官ニ在リテ死亡シタル者ハ月俸三箇月分ヲ其遺族ニ給ス非職者ニ

於テモ亦同シ

第六條　前條ノ外俸給支給ニ關シテハ高等官任命及俸給令第十三條第十四條第十五條第十六條第十七條ノ例ニ依ル

第七條　俸給支給ニ關スル細則ハ大藏大臣省令ヲ以テ之ヲ定ム

附　則

第八條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治十九年勅令第三十六號判任官官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

別表

一級	六十圓	三級	四十五圓	五級	三十五圓	七級	二十五圓	九級	十五圓
二級	五十圓	四級	四十圓	六級	三十圓	八級	二十圓	十級	十二圓

○技術官俸給令　明治二十四年七月　勅令第四十三號

朕茲ニ技術官俸給令ヲ裁可ス

技術官俸給令

第一條　各廳ニ於テ工藝技術ヲ要スルモノハ職員ノ外特ニ技術官ヲ置ク

第二條　技術官ヲ分テ技監技師技手トス

第三條　技監ハ勅任トシ技師ハ奏任トシ技手ハ判任トス

第四條　技監ノ年俸ハ三千圓トシ技師ノ年俸ハ特ニ定ムルモノヽ外本年勅令第八十二號高等官任命及俸給令第二號表ニ依ル

第五條　技術官ハ各廳事務ノ繁簡ニ依リ俸給最低額以下ヲ給スルコトアルヘシ

第六條　本令ニ規定スルモノヲ除クノ外技監技師ニ關シテハ本年勅令第八十二號高等官任命及俸給令ヲ適用シ技手ニ關シテハ本年勅令第八十三號判任官俸給令ヲ適用ス

附　則

第七條　技術官ニシテ現ニ休職中ノ者ハ其休職滿期迄仍ホ現俸三分ノ一ヲ支給ス

第八條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治十九年勅令第三十八號技術官官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○樞密院議長副議長顧問官竝書記官長書記官年俸

朕茲ニ樞密院議長副議長顧問官並書記官長書記官年俸改正ノ件ヲ裁可ス

樞密院議長副議長顧問官並書記官長書記官ノ年俸左ノ通改ム

議長	五千圓
副議長	四千五百圓
顧問官	四千圓
書記官長	三千五百圓 高等官任命及俸給令中第二號表ニ依ル
書記官	

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○會計檢査院高等官年俸明治二十四年七月勅令第九十七號

朕茲ニ會計檢査院高等官年俸ノ件ヲ裁可ス

會計檢査院高等官年俸左ノ通定ム

院長	四千圓
部長	三千圓
檢査官	一級　二千五百圓 二級　二千二百圓 三級　二千圓 四級　千八百圓
書記官	一級　二千圓 二級　千五百圓
書記官ハ一級二級俸各一人トス	
檢査官補	一級　九百圓 二級　八百圓 三級　七百圓 四級　六百圓

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○行政裁判所長官並評定官年俸明治二十四年七月勅令第九十八號

朕茲ニ行政裁判所長官並評定官年俸改正ノ件ヲ裁可ス

行政裁判所長官評定官年俸左ノ通改ム

長官	四千圓

評定官

勅任　三千圓

奏任
一級　二千五百圓
二級　二千二百圓
三級　二千圓
四級　千八百圓
五級　千六百圓
六級　千四百圓
七級　千二百圓

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○貴族院衆議院書記官長竝書記官年俸　明治二十四年七月勅令第百一號

朕茲ニ貴族院衆議院書記官長竝書記官年俸ノ件ヲ裁可ス

貴族院書記官長竝書記官年俸左ノ通定ム

貴族院書記官長　三千圓
衆議院書記官長

貴族院書記官
衆議院書記官
一級　二千圓
二級　千八百圓
三級　千六百圓
四級　千四百圓
五級　千二百圓
六級　千圓
七級　九百圓
八級　八百圓

○土木監督署長等ノ俸給　明治二十四年七月勅令第百十四號

朕茲ニ土木監督署、衛生試驗所、中央氣象臺高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

土木監督署長、衛生試驗所長、中央氣象臺長ノ年俸左ノ如シ

第一區土木監督署長　二千圓
第二區土木監督署長　千五百圓
第三區土木監督署長　千五百圓
第四區土木監督署長　二千圓
第五區土木監督署長　千五百圓
第六區土木監督署長　千五百圓
東京衛生試驗所長　千四百圓
大阪衛生試驗所長　千二百圓
横濱衛生試驗所長　千七百圓

中央氣象臺長　千四百圓

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○集治監假留監高等官俸給明治廿四年七月勅令第百十五號

朕茲ニ集治監假留監高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

集治監假留監高等官ノ年俸左ノ通定ム

東京集治監典獄　千四百圓

三池集治監典獄　千四百圓

宮城集治監典獄　千圓

兵庫假留監典獄　千圓

北海道集治監典獄　千八百圓

北海道集治監分監長　八百圓

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○鐵道廳高等官俸給明治廿四年七月勅令第百十七號

朕茲ニ鐵道廳高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條　鐵道廳高等官ノ年俸左ノ通定ム

長官　四千圓

部長　三千圓

第二條　事務官及參事官ノ年俸ハ本年勅令第八十二號高等官任命及俸給令第二號表ニ依ル

附則

第三條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○警視廳高等官俸給令明治二十四年七月勅令第百十八號

朕茲ニ警視廳高等官俸給令ノ改正ヲ裁可ス

警視廳高等官俸給令

第一條　警視廳高等官ノ年俸左ノ如シ

警視總監　四千圓

警視　巡査本部長ニ補スルモノ　二千二百圓

警視　巡査本部副長ニ補スルモノ　千二百圓

警視　警務局長ニ補スルモノ　千五百圓
警視　官房第一部長ニ補スルモノ　千八百圓
警視　同　第二部長ニ補スルモノ　千二百圓
警視　同　第三部長ニ補スルモノ　千二百圓
警視　參事ニ補スルモノ　千圓
警視　巡視ニ補スルモノ　千二百圓
警視　警察署長ニ補スルモノ　九百圓、八百圓、七百圓
消防司令長　千五百圓
典獄　千圓
警察醫長　千圓

第二條　警察署長ニ補スル警視ノ俸給區別ハ內務大臣其警察署ニ就テ之ヲ指定スヘシ

附則

第三條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○北海道廳高等官俸給

明治二十四年七月勅令第百十九號

朕茲ニ北海道廳高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條　北海道廳高等官ノ年俸左ノ如シ

長官　四千圓
書記官　上級二千二百圓　下級二千圓
警部長　千八百圓
財務長　千八百圓
參事官　千圓
典獄　八百圓
郡區長　六百圓

第二條　內務大臣ニ於テ特ニ指定スル各郡區ノ郡區長ハ年俸八百圓ヲ給ス

但其人員ハ七人以內トス

第三條　書記官ハ上級俸下級俸各一人トス

附則

第四條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○地方高等官俸給令

明治二十四年七月勅令第百二十號

朕茲ニ地方高等官俸給令ヲ裁可ス

地方高等官俸給令

第一條　府縣知事書記官警部長收税長及典獄ノ年俸左ノ如シ

東京府知事四千圓

京都府知事、大阪府知事、神奈川縣知事、兵庫縣知事、長崎縣知事、新潟縣知事、愛知縣知事、宮城縣知事、廣島縣知事、熊本縣知事三千五百圓

其他ノ縣知事三千圓

	三府及神奈川兵庫長崎新潟愛知宮城廣島熊本ノ八縣	其他ノ諸縣
書記官	二千圓	千五百圓
警部長	千四百圓	千百圓
收税長	千四百圓	千百圓
典獄	八百圓	六百圓

第二條　東京府書記官ハ特ニ二千二百圓ヲ給スルコトヲ得

大阪府警部長ハ特ニ年俸千八百圓ヲ給スルコトヲ得

大阪府典獄ハ特ニ年俸千圓ヲ給スルコトヲ得

第三條　參事官ノ年俸ハ一人ヲ千圓トシ一人ヲ七百圓トス

第四條　郡長ノ年俸ハ六百圓トス

內務大臣ニ於テ特ニ指定スル各郡ノ郡長ハ年俸八百圓ヲ給ス但其人員ハ二百人以內トス

第五條　島司ノ年俸ハ千二百圓トス

附　則

第六條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治二十三年勅令第二百二十六號地方官官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○造幣局印刷局稅關職員俸給

明治二十四年七月勅令第百二十四號

朕茲ニ造幣局印刷局稅關職員俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條　造幣局印刷局稅關高等官ノ年俸左ノ如シ

造幣局	
局長	三千圓
理事官	千八百圓
印刷局	
局長	二千五百圓
理事官	千八百圓
稅關	
橫濱稅關長	三千圓

神戸税關長　二千五百圓
長崎税關長　千五百圓
函館税關長　千二百圓
横濱税關副長　千五百圓
神戸税關副長　千二百圓

第二條　税關鑒定官鑒定吏ニ關シテハ本年勅令第八十四號技術官俸給令ヲ適用ス

第三條　鑒定官試補ハ技師試補ノ例ニ依ル

第四條　監吏補ノ月俸ハ十五圓以下五圓以上トス

附　則

第五條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○理事錄事俸給明治二十四年七月勅令第百二十六號

朕茲ニ理事錄事俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條　理事ハ勅任又ハ奏任トス其年俸ハ別表ニ依ル但奏任理事ニハ別表定ムル所ノ年俸最低額以下ヲ給スルコトヲ得

第二條　錄事ハ判任トス其俸給ハ本年勅令第八十三號判任官俸給令ニ依ル

附　則

第三條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治二十年勅令第二號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

別表

勅任	奏任
三千四	一級二千四百圓　二級二千二百圓　三級二千圓　四級千八百圓　五級千六百圓　六級千四百圓　七級千二百圓　八級千圓　九級九百圓　十級八百圓　十一級七百圓　十二級六百圓

○千住製絨所高等官俸給明治二十四年七月勅令第百二十七號

朕茲ニ千住製絨所高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

千住製絨所高等官年俸左ノ如シ

所長　二千圓
事務官　千圓

附　則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○陸海軍諸學校文官教授俸給明治二十四年七月勅令第百二十八號

朕茲ニ陸軍海軍諸學校文官教授俸給ノ件ヲ裁可ス

陸軍海軍諸學校文官教授年俸左ノ如シ

一級　千八百圓
二級　千六百圓
三級　千四百圓
四級　千二百圓
五級　千圓
六級　九百圓
七級　八百圓
八級　七百圓
九級　六百圓
十級　五百圓

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○陸軍編修俸給明治二十四年七月勅令第百二十九號

朕茲ニ陸軍編修俸給ノ件ヲ裁可ス

陸軍編修ノ年俸左ノ如シ

一級　千八百圓
二級　千六百圓

三級　千四百圓
四級　千二百圓
五級　千圓
六級　九百圓
七級　八百圓
八級　七百圓
九級　六百圓
十級　五百圓

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○陸地測量官俸給明治二十四年七月勅令第百三十號

朕茲ニ陸地測量官俸給ノ件ヲ裁可ス

陸地測量官ノ俸給ハ本年勅令第八十四號技術官俸給令ニ依ル

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○海軍軍人俸給令明治二十四年七月勅令第百三十一號

朕茲ニ海軍軍人俸給令ノ改正ヲ裁可ス

海軍軍人俸給令

第一條　海軍高等武官ノ俸給ハ第一表准士官ノ俸給ハ第二表下士卒ノ俸給ハ第三表ニ依ル

第二條　准士官以上ニ修學ヲ命シタルトキ及待命者ニハ俸給十分ノ八ヲ給シ休職者ニハ俸給十分ノ六ヲ給ス

第三條　大佐及同等官ノ一級俸ヲ給スル人員ハ現役員（休職者停職者ヲ除ク以下同シ）ノ半數ヲ過クルコトヲ得ス

大尉及同等官ノ一級俸二級俸及三級俸ヲ給スル人員ハ現役員ノ四分ノ一ヲ過クルコトヲ得ス

少尉及同等官ノ一級俸ヲ給スル人員ハ現役員ノ半數ヲ過クルコトヲ得ス

第四條　候補生ニハ日給八十錢ヲ給ス又修學（練習トシテ乘艦スルモノヲ除ク）ヲ命シタルトキハ日給六十錢ヲ給ス

第五條　下士卒ノ定員俸ハ定員及定員ニ準スヘキ服役者ニ給シ員外俸ハ定員外ニ在ル者ニ給ス

第六條　士官以上ニ上官ノ職務心得ヲ命シタルトキハ上官ノ最下級俸ヲ給ス

第七條　下士ニ准士官ノ職務心得ヲ命シタルトキハ准士官ノ最下級俸ヲ給ス

第八條　善行章ヲ有スル者ニハ一線毎ニ一日一錢ノ加俸ヲ給ス

第九條　砲術教授適任證書及水雷術教授適任證書ヲ有スル者ニハ一日四錢

一等掌砲證狀及一等掌水雷證狀ヲ有スル者ニハ一日三錢二等掌砲證狀及二等掌水雷證狀ヲ有スル者ニハ一日二錢ノ加俸ヲ給ス但同種類ノ證書證狀ヲ併有スル者ニハ其證書ニ就キ之ヲ給ス

第十條　准士官以上及候補生左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ俸給十分ノ三ヲ給ス

一　停職ヲ命シタルトキ

二　處罰中

三　被告人ト爲リ遞傳護送留置收禁拘留中但審問ノ後無罪ト爲リタルトキハ此限ニアラス

四　禁錮ニ處セラレ其官ヲ失ハサルトキ

第十一條　下士卒左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ俸給及加俸ヲ給セス

一　海軍外部ノ各廳ヘ貸與シタルトキ但奏樂ノ爲メ一時貸與スル軍樂員ハ此限ニアラス

二　願ニ依リ歸鄉シタルトキ

三　被告人ト爲リ遞傳護送留置收禁拘留處刑中但審問ノ後無罪ト爲リタ

ルトキハ此限ニアラス

四　擅ニ艦船團隊若クハ職役ヲ離レタルトキ

第十二條　下士卒處罰中ハ俸給十分ノ二ヲ給シ加俸ヲ給セス

第十三條　下士卒左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ俸給十分ノ四ヲ給ス但公務ニ原因シタルトキ又ハ外國出張中若クハ航海中ニ在ルトキハ其全額ヲ給ス

一　傷痍疾病ニ依リ入院若クハ陸地療養ノトキ

二　陸上勤務外宿中傷痍疾病ニ依リ缺勤一週日以上ニ及フトキ

三　公務出張中傷痍疾病ニ依リ缺勤一週日以上ニ及フトキ

第十四條　死亡者若クハ逃亡者ニ給スヘキ金額アルトキハ其家族ノ請求ニ依リ之ヲ下付ス

第十五條　艦船ノ乘員航海中ハ俸給ノ半額ヲ其家族ニ下渡スコトヲ得

第十六條　准士官以上ノ俸給ハ三百六十五分シ其月ノ日數ニ應シ給スルモノトス但太平洋渡航ニ當リ日數ニ一日ノ增減アルトキハ曆ノ日數ニ依ル又二月ハ閏年ト雖モ二十八日分ヲ給ス

第十七條　俸給及加俸ハ毎月下旬ニ於テ之ヲ給ス

第十八條　豫備後備ノ准士官以上ヲ召集シタルトキハ現役者ニ準シ相當ノ俸給ヲ給ス

第十九條　豫備兵後備兵及歸休兵ヲ召集シタルトキハ現役者ニ準シ相當ノ俸給ヲ給ス

第二十條　豫備後備ノ准士官以上豫備兵後備兵及歸休兵ノ召集服役中給與ノ制ハ總テ本令ニ依ルモノトス

第二十一條　第十條第二第三第四第十一條第三第四及第十二條ハ海軍軍屬ニ適用ス

第二十二條　本令ニ關スル細則ハ海軍大臣大藏大臣ト商議シ之ヲ定ム

附則

第二十三條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

第一表　海軍高等武官俸給表

	大將	中將	少將及同等官	大佐及同等官	少佐及同等官	大尉及同等官	少尉及同等官
年俸	六千圓	四千圓	三千三百圓	一級二千四百九十六圓六十錢 二級二千八百九十八圓	一級一千二百七十七圓五十錢	一級八百七十六圓六十錢 二級八百十七圓六十錢 三級六百七十八圓九十錢 四級六百二十圓五十錢	一級四百五十六圓二十五錢 二級四百一圓五十錢

第二表　海軍准士官俸給表

	一級	二級	三級	四級	五級
年俸	五百四十圓廿錢	四百七十四圓五十錢	四百十六圓十錢	三百五十七圓七十錢	二百九十九圓四拾錢

第三表　海軍下士卒俸給表

	一等下士	二等下士	三等下士	卒
一等給	七十五錢	四十三錢	三十一錢	二十九錢
二等給	四十八錢	三十一錢	二十七錢	二十五錢
三等給	三十七錢	二十一錢	二十一錢	十八錢
四等給	二十六錢	二十一錢	十八錢	十五錢
一等給	二十三錢	十九錢	十五錢	十二錢
二等給	二錢	十八錢	十三錢	十一錢
一等卒	八錢	五錢		
二等卒				
三等卒				
四等卒				
五等卒				

定員俸　日當　七十錢　四十九錢　四十八錢　四十一錢

員外俸　日當　四十八錢

○主理錄事俸給明治二十四年七月勅令第百三十二號

朕茲ニ主理錄事俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條　主理ハ勅任又ハ奏任トス其年俸ハ別表ニ依ル但奏任主理ニハ別表定ムル所ノ年俸最低額以下ヲ給スルコトヲ得

第二條　錄事ハ判任トス其俸給ハ本年勅令第八十三號判任官俸給令ニ依ル

附則

第三條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治二十年勅令第五十五號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

別表

勅任　奏任

三千圓	一級	二千四百圓	三級	二千圓	五級	千六百圓	七級	千二百圓	九級	九百圓	十一級	七百圓
二級	二千二百圓	四級	千八百圓	六級	千四百圓	八級	千	圓	十級	八百圓	十二級	六百圓

○海軍編修俸給明治二十四年七月勅令第百三十三號

朕茲ニ海軍編修俸給ノ件ヲ裁可ス

海軍編修ノ年俸左ノ如シ

一級　千二百圓

二級　千圓

三級　八百圓

四級　六百圓

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○判事檢事俸給令明治二十四年七月勅令第百三十四號

朕茲ニ判事檢事俸給令ヲ裁可ス

第一條　判事檢事俸給令

第二條　判事檢事ノ年俸ハ別表定ムル所ニ依ル

大審院

長　一八

判事檢事ノ各職ニ付其人員及年俸ヲ限定スルコト左ノ如シ

勅任	五千圓	
部長	三人	
勅任	三千五百圓	
判事	二十七人	
勅任及奏任	三千圓乃至千六百圓	
大審院檢事局		
檢事總長	一人	
勅任	四千圓	
檢事	五人	
勅任及奏任	三千圓乃至千六百圓	
控訴院	七人	
長	東京大坂四千圓	
勅任	其他三千五百圓	
部長	十五人	
奏任	二千二百圓乃至千四百圓	
判事	八十五人	
奏任	千二百圓乃至九百圓	
控訴院檢事局		
檢事長	七人	
勅任	東京大坂三千五百圓	
	其他三千圓	
檢事	二十人	
奏任	二千圓乃至九百圓	
地方裁判所		
長	四十八人	
奏任	東京大坂二千五百圓	
	其他二千二百圓乃至千四百圓	
部長	九十人	
奏任	千二百圓乃至九百圓	
判事	四百十五人	
奏任	八百圓乃至六百圓	
地方裁判所檢事局		
檢事正	四十八人	
奏任	東京大坂二千二百圓	
	其他二千圓乃至千二百圓	

檢事	百二十五人
奏任	八百圓乃至六百圓
區裁判所	
判事	八百四十人
奏任	八百圓乃至六百圓
區裁判所檢事局	
檢事	二百七十五人
奏任	八百圓乃至六百圓

第三條　豫備判事ハ其人員ヲ三十五人トシ豫備檢事ハ其人員ヲ十五人トス

豫備判事豫備檢事ハ奏任トシ年俸四百圓ヲ給ス

司法官試補ハ其人員ヲ百十人トス

司法官試補ハ其待遇ヲ奏任トシ年俸三百圓以下ヲ給ス

第四條　第二條ノ各職中年俸ニ等差アルモノハ每俸平等ニ其人員ヲ定ム但端數ノ人員ヲ生スルトキハ最下級ヨリ漸次上級ノ人員ニ併合ス

第五條　裁判所構成法第六十二條ニ依リ新任スル判事又ハ檢事ニシテ直チニ補職スル者ハ奏任トシ最下級ノ年俸ヲ給ス豫備判事又ハ豫備檢事ニシテ補職スル者モ亦同シ

裁判所構成法第六十五條第一項ニ依リ新任スル判事又ハ檢事ハ其補スヘキ職ノ最下ノ年俸ヲ給ス

判事又ハ檢事ニシテ他ニ轉官シ若ハ退官シタル者ヲ更ニ判事又ハ檢事ニ任スルトキハ前官ト同年俸若ハ其以下ノ年俸ヲ給ス

第六條　判事又ハ檢事ノ進級ハ闕員アルトキニ限リ之ヲ行フ

第七條　判事又ハ檢事ノ進級ハ第二條ニ掲ケタル各職每ニ先任ノ順序ニ依リ之ヲ行フ但區裁判所判事ハ地方裁判所判事ト併合シ區裁判所檢事局檢事ハ地方裁判所檢事局檢事ト併合シテ先任順序ヲ定メ進級セシム

大審院ノ部長判事大審院檢事局ノ檢事總長檢事控訴院ノ長部長判事控訴院檢事局ノ檢事長檢事地方裁判所ノ長部長及地方裁判所檢事局ノ檢事正ノ補職ハ拔擢ヲ以テ之ヲ行フコトヲ得但其補スヘキ職ノ最下ノ年俸ニ非サレハ給スルコトヲ得ス

東京大阪控訴院ノ長同院檢事局ノ檢事長及東京大阪地方裁判所ノ長同地方裁判所檢事局ノ檢事正ノ補職モ亦拔擢ヲ以テ之ヲ行フコトヲ得

東京京都大阪横濱神戸長崎名古屋廣島仙臺熊本ノ各地方裁判所檢事局檢事ノ補職ハ二十人ヲ限リ拔擢ヲ以テ之ヲ行ヒ八級九級ノ年俸ヲ給スルコトヲ得

第八條　地方裁判所判事ニシテ豫審ヲ爲スコトヲ命セラレタル者ハ百人ヲ

限リ其事務取扱中一箇年百圓以内ノ加俸ヲ之ニ給スルコトヲ得

第九條　判事檢事ノ各職ニ於ケル先任順序ハ年俸ノ多寡ニ依リ年俸相同シキモノハ年俸下賜辭令ノ日付ニ依ル

判事檢事ノ裁判所内ニ於ケル席次ハ前項ノ規程ニ從フ

第十條　判事又ハ檢事轉職又ハ轉任スルトキハ前職ト同年俸若ハ其以下ノ年俸ニ非サレハ給スルコトヲ得ス此場合ニ於テハ前職ノ年俸下賜辭令ノ日付ニ依リ後職ノ先任順序ヲ定ム

待命ノ判事又ハ檢事補職セラレ又ハ轉任シテ補職セラルヽトキ及司法行政官吏ニシテ判事檢事タルノ資格ヲ有スル者判事又ハ檢事ニ轉任シ補職セラルヽトキモ亦同シ

退職ノ判事又ハ檢事補職セラレ又ハ轉任シテ補職セラルヽトキモ亦同シ但後職ノ年俸下賜辭令ノ日付ニ依リ先任順序ヲ定ム

附則

第十一條　本令施行ノ際年俸二千四百圓以下ノ奏任官ニシテ俸給減額四百圓ニ相當スル者ハ之ヲ二百圓ノ減額ニ止ムルコトヲ得

第十二條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治二十三年勅令第百五十八號判事檢事官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

別表

判事檢事年俸表

勅任	奏任											
一級	二級	三級	四級	一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級	九級	十級	十一級	十二級
五千圓	四千圓	三千五百圓	三千圓	二千五百圓	二千二百圓	二千圓	千八百圓	千六百圓	千四百圓	千二百圓	千圓	九百圓	八百圓	七百圓	六百圓

○裁判所書記長書記俸給明治二十四年七月勅令第百三十五號

朕茲ニ裁判所書記長書記俸給ノ件ヲ裁可ス

裁判所書記長書記俸給

第一條　裁判所書記長ハ奏任トス

裁判所書記ハ判任トス

裁判所書記見習ハ其待遇ヲ判任トシ月俸七圓以下ヲ給ス但特ニ拾圓マテヲ給スルコトアルヘシ

第二條　裁判所書記ノ各職ニ付其人員ヲ限定スルコト左ノ如シ

大審院		
書記長	一人	年俸千二百圓
裁判所書記	二十人	
大審院檢事局		
裁判所書記	五人	
控訴院		
書記長	七人	五人年俸千圓 二人年俸九百圓
裁判所書記	百四十五人	
控訴院檢事局		
裁判所書記	二十五人	
地方裁判所		
裁判所書記	七百七十五人	
地方裁判所檢事局		
裁判所書記	百五十人	

區裁判所	
裁判所書記	四千六百人
區裁判所檢事局	
裁判所書記	四百八十五人

附則

第三條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治二十三年勅令第百五十九號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○帝國大學文部省直轄諸學校等高等官俸給令

明治廿四年七月
勅令第百三十九號

朕茲ニ帝國大學文部省諸學校及圖書館高等官俸給令ヲ裁可ス

帝國大學文部省直轄諸學校及圖書館高等官俸給令

第一條　帝國大學文部省直轄諸學校及圖書館高等官ノ年俸左ノ如シ

帝國大學高等官	
總長	四千圓
教授	一號表ニ依ル

但勅任教授ニアラザレハ二級以上ノ年俸ヲ給スルコトヲ得ス

書記官　一級千二百圓　二級九百圓
助教授　一號表ニ依ル　一級九百圓　二級八百圓
舍監
高等師範學校高等官
學校長　二千五百圓
教授　二號表ニ依ル
教諭　二號表ニ依ル　一級五百圓　二級四百圓
舍監
女子高等師範學校高等官
學校長　二千圓
教授　二號表ニ依ル
教諭　二號表ニ依ル　一級二百五十圓　二級二百圓
舍監
高等商業學校高等官
學校長　二千圓
教授　二號表ニ依ル　一級五百圓　二級四百圓
舍監
各高等中學校高等官

學校長　二千圓
教授　二號表ニ依ル　一級五百圓　二級四百圓
舍監
東京工業學校高等官
學校長　二千圓
教授　二號表ニ依ル
東京美術學校高等官
學校長　二千圓
教授　二號表ニ依ル
東京音樂學校高等官
學校長　二千圓
教授　二號表ニ依ル
東京盲啞學校高等官
學校長　八百圓
教諭　二號表ニ依ル
東京圖書館高等官
館長　千二百圓

第二條　帝國大學書記官舍監及直轄諸學校舍監ハ一級俸二級俸各一人トス

第三條　教官ニシテ教官ニアラサル官吏ニ兼任シ又教官ニアラサル官吏ニシテ教官ニ兼任スル者ハ同廳內ト雖モ兼官相當ノ年俸三分ノ一以內ヲ增給スルコトヲ得

第四條　教官ハ其授業ノ時間及學科ノ輕重難易等ニ依リ別表ニ掲クル年俸最低額以下ヲ給スルコトアルヘシ

附　則

第五條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

（別表）

一號表

官名	年俸等級
帝國大學分科大學教授	一級三千圓 二級二千八百圓 三級二千五百圓 四級二千二百圓 五級二千圓 六級千八百圓 七級千六百圓 八級千四百圓 九級千二百圓 十級千圓
帝國大學分科大學助教授	一級千二百圓 二級千圓 三級九百圓 四級八百圓 五級七百圓 六級六百圓

二號表

官名	年俸等級
文部省直轄諸學校教授	一級二千圓 二級千八百圓 三級千六百圓 四級千四百圓 五級千二百圓 六級千圓 七級九百圓 八級八百圓 九級七百圓 十級六百圓
文部省直轄諸學校教諭	一級千二百圓 二級千圓 三級九百圓 四級八百圓 五級七百圓 六級六百圓 七級五百圓 八級四百圓

○札幌農學校高等官俸給　明治二十四年七月　勅令第百四十三號

朕茲ニ札幌農學校高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條　學校長舍監ノ年俸左ノ如シ

學校長　二千圓

舍監　五百圓

第二條　教授ノ年俸ニ關シテハ本年勅令第百三十九號帝國大學文部省直轄諸學校及圖書館高等官俸給令第二號表中文部省直轄諸學校教授年俸表並第三條第四條ヲ適用ス

附　則

第三條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○富岡製絲所大小林區署鑛山監督署職員俸給

明治二十四年七月　勅令第百四十六號

朕茲ニ富岡製絲所大小林區署鑛山監督署職員俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條　富岡製絲所大小林區署鑛山監督署高等官ノ年俸左ノ如シ

富岡製絲所長　千八百圓

林務官　別表ニ依ル

鑛山監督官　別表ニ依ル
大林區署技師　別表ニ依ル
鑛山監督署技師　別表ニ依ル

第二條　大小林區署鑛山監督署判任官ノ月俸左ノ如シ

林務官補　判任官俸給八級以上
大林區署書記　判任官俸給三級以下
營林主事　判任官俸給三級以下
營林主事補　二十五圓以下八圓以上
森林監守　十二圓以下五圓以上

附則

第三條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス
明治二十三年勅令第百二十八號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

別表

官名	年俸等級			
林務官	一級　千五百圓	二級　千二百圓	三級　千　圓	四級　八百圓
大林區署技師	一級　八百圓	二級　七百圓	三級　六百圓	四級　五百圓
鑛山監督官	一級　千五百圓	二級　千二百圓	三級　千　圓	四級　八百圓
鑛山監督署技師	一級　千二百圓	二級　千　圓	三級　八百圓	四級　六百圓

○郵便及電信局郵便爲替貯金管理所等ノ職員俸給

明治二十四年七月勅令第百五十五號

朕茲ニ郵便及電信局郵便爲替貯金管理所船舶司檢所航路標識管理所職員俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條　奏任ヲ以テ任スル一等郵便電信局長及司檢官ノ年俸ハ別表ニ依ル

第二條　郵便爲替貯金管理所長ノ年俸ハ二千圓トシ事務官ノ年俸ハ千圓八百圓各一人トス

第三條　東京一等郵便電信局事務官ノ年俸ハ千圓大坂一等郵便電信局事務官ノ年俸ハ八百圓トス

第四條　書記補ハ月俸十五圓以下五圓以上トス

第五條　三等郵便局長ハ俸給ヲ給セス一箇年四百圓以下ノ手當ヲ給ス其細則ハ遞信大臣之ヲ定ム

第六條　航路標識管理所看守ノ俸給ハ別表ニ依ル但一級俸ヲ受ケ三年ヲ踰エタルモノニシテ殊ニ勞績アルモノハ三十圓マテ增俸スルコトヲ得

附則

第七條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

別表

官名	年俸等級						
一等郵便電信局長	一級 二千圓	二級 千八百圓	三級 千六百圓	四級 千四百圓	五級 千二百圓	六級 千圓	七級 八百圓	八級 六百圓
司檢官	一級 千八百圓	二級 千六百圓	三級 千四百圓	四級 千二百圓	五級 千圓	六級 九百圓	七級 八百圓	八級 七百圓

官名	月俸等級			
看守	一級 二十五圓	二級 二十圓	三級 十五圓	四級 十二圓	五級 十圓

○遞信省所管諸學校職員俸給明治二十四年七月勅令第百五十六號

朕茲ニ遞信省所管學校職員俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條　商船學校長ノ年俸ハ千八百圓トス

第二條　商船學校教授東京郵便電信學校教授ノ年俸ハ別表ニ依ル

教授ニシテ幹事ヲ兼ルモノハ教授年俸ノ外年俸二百圓以內ヲ給ス

附則

第三條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

別表

一級 千四百圓	二級 千二百圓	三級 千圓	四級 九百圓	五級 八百圓	六級 七百圓	七級 六百圓	八級 五百圓

○海軍武官官階明治二十四年七月勅令第百五十七號

朕茲ニ海軍武官官階ヲ定ムルノ件ヲ裁可ス

第一條　海軍武官官階ヲ定ムルコト左表ノ如シ

海軍武官官階表

將官	上長官 又佐官	士官 又尉官	准士官	下士 一等	下士 二等	下士 三等
大將						
中將						
少將						
	大佐					
	少佐					
		大尉				
		少尉				
			上等兵曹	一等兵曹	二等兵曹	三等兵曹
			一等信號手	二等信號手	三等信號手	
			一等軍樂手	二等軍樂手	三等軍樂手	
			軍樂師			

機技部上長官	機技部士官准士官	機技部下士官				
機技總監	機關大監	機關少監	大機關士	機關師	一等機關手	二等機關手	三等機關手
大技監	少技監	大技士	少技士	船匠師	一等船匠手	二等船匠手	三等船匠手
					一等鍛冶手	二等鍛冶手	三等鍛冶手
軍醫部上長官	軍醫部士官准士官	軍醫部下士官				
軍醫總監	軍醫大監	軍醫少監	大軍醫	少軍醫	上等看護手	一等看護手	二等看護手	三等看護手
	藥劑監	大藥劑官	少藥劑官					
主計部上長官	主計部士官准士官	主計部下士官				
主計總監	主計大監	主計少監	大主計	少主計	上等主張	一等主張	二等主張	三等主張
						一等	二等	三等

第二條　本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

第三條　海軍武官官等表ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○收稅屬俸給

明治二十四年七月勅令第百六十號

朕茲ニ收稅屬俸給ノ件ヲ裁可ス

收稅屬ノ俸給ハ本年勅令第八十三號判任官俸給令ニ依ラシム但俸給定額ノ都合ニヨリ十圓又ハ八圓ノ俸給ヲ支給スルコトヲ得

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス明治二十三年勅令第七十五號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○豫備後備ノ軍籍ニアル文官召集條例ニ依リ召集中俸給支給方

明治二十四年七月勅令第百六十二號

朕豫備後備ノ軍籍ニアル文官陸軍召集條例ニ依リ召集中俸給支給方ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官ニシテ豫備後備ノ軍籍ニアル者陸軍給與令第十八條ニ依リ俸給ヲ受ク ル間ハ文官俸給ノ支給ヲ停止ス但其額文官俸給額ヨリ寡少ナルトキハ其不足額ハ奉職官廳ニ於テ文官俸給ヨリ之ヲ補給ス

○集治監假留監看守人員及俸給ニ關スル條項中追加

明治廿四年七月勅令第百十六號

朕茲ニ集治監假留監看守人員俸給ニ關スル條項中追加ノ件ヲ裁可ス

明治二十三年勅令第二百二十八號集治監假留監看守人員及俸給ノ件第四ニ左ノ一項ヲ追加ス

北海道集治監ニ限リ勤續滿五年以上ニシテ勤勞抜群ナルモノニハ現俸四分ノ一以內ノ加俸ヲ給スルコトヲ得

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○旅費手當

○三等郵便局長手當金竝退官死亡賜金給與方

明治廿三年八月勅令第百六十二號

朕三等郵便及電信局長手當金竝退官死亡賜金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　三等郵便電信局長及三等郵便局長及三等電信局長ハ俸給ヲ給セス年額四百圓以下ノ手當金ヲ給與ス其給與額ハ遞信大臣之ヲ定ム

第二條　三等郵便電信局長三等郵便局長及三等電信局長在官中死亡シタルトキ若クハ廢官廢局ノトキ又ハ滿三年以上勤續シタル者退官セシトキハ遞信大臣ニ於テ其勤勞ニ依リ百圓以內ノ金額ヲ給與ス但懲戒處分ニ依リ免官セラレ若クハ刑事裁判ニ依リ官職ヲ失ヒタル者ハ總テ之ヲ給與セス

○陸軍給與令中改正追加

明治廿三年九月勅令第百九十四號

陸軍給與令ハ法令類編第三卷第四類四十丁ニ載ス

朕陸軍給與令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍給與令中左ノ通改正ス

第二十四條第一項ニ左ノ但書ヲ加フ

但幼年學校生徒中半官費生ハ精米ヲ官給シ晩料ヲ自辨トス

第六十七條第二項

三里未滿ト雖モ船舶ニアラサレハ旅行シ難キ地方ノ船舶料ハ一海里以上又下士以下傷痍疾病ニ依リ步行シ難キトキノ馬車料ハ一里以上之ヲ給ス

第九表區分中「東京」ノ下「及橫須賀」「伏見」ノ下「由良」「福岡」ノ下「赤間關」ヲ加フ

第十二表中末項

幼年學校生徒中半官費生ハ大被服ヲ官給シ小被服ヲ自辨トス但修業用脚絆拍車體操用被服及裝具寢具ハ半官費生及自費生共官費生ニ準シ之ヲ貸與ス

第二十六表及第三十一表中「野戰電信隊」ノ上ニ「要塞砲兵隊ハ步兵隊ノ金額ニ」ノ十三字ヲ加フ

第三十六表ノ末ニ左ノ一項ヲ加フ

一　下士兵卒竝歸休兵解散ノトキ傷痍疾病ニ依リ步行シ難キ者ハ車馬料トシテ一里金五錢ヲ增給ス但三里未滿ニ在テハ一里毎ニ金七錢ヲ給ス

各條項及諸表中「砲兵工廠生徒學舍」トアルヲ「砲兵工科學舍」ニ「軍樂基本隊」トアルヲ「軍樂學舍」ト改ム

○同上

明治廿三年十二月勅令第二百八十四號

朕茲ニ陸軍給與令中改正追加ノ件ヲ裁可ス

陸軍給與令中左ノ通改正ス

第二條第二項中「看守卒」ノ下ニ「調馬卒」ノ三字ヲ加フ

第八條第一項中「諸學校」ノ下「要塞砲兵幹部練習所」ノ上ニ「諸學舍」ノ三字「教官」ノ上ニ「要塞砲兵幹部練習所及ヒ陸地測量部修技所」ノ十九字ヲ加フ

第十條第三項中「火工長」ヲ「火工曹長」ニ「火工下長」ヲ「火工一等軍曹」ニ改メ「二等軍曹」ノ下ニ「火工二等軍曹」ノ六字ヲ加ヘ第五項中「在營」ヲ「在隊」ニ改ム

第十一條ヲ左ノ如ク改ム

俸給ハ毎月下旬ニ於テ之ヲ給ス但營内居住ノ下士以下ハ毎旬ニ於テ之ヲ給ス

第二十條中「ニ依ル」ノ下ニ「營内居住ノ下士諸學校諸學舍ヘ入學中外宿セシムルトキモ亦之ニ準ス」ノ三十一字及ヒ左ノ一項ヲ加フ

前項宅料ハ毎月下旬ニ於テ之ヲ給ス

第二十四條第一項中「病院ニ入ルモノ」ノ下ニ「並營内居住ノ下士以下現役ヲ離レ又ハ復習濟ノ際病氣其他ノ事故ニ依リ歸鄉セシメ難キモノ」ノ四十一字ヲ加フ

第二十五條第二項中「幼年學校」ノ下ニ「戸山學校砲兵射的學校」ノ十字「砲兵工科學舍」ノ下ニ「被服工長學舍」ノ六字ヲ加フ

第二十六條ヘ左ノ一項ヲ加フ

准士官以上及ヒ營外居住ノ下士以下傳染病流行ノ際避病院ニ詰切ヲ命シタルトキハ食料ヲ給ス其金額ハ第九表ニ依ル軍屬モ亦之ニ準ス

第二十九條第二項中「砲兵工科學舍」ノ下ニ「被服工長學舍」ノ六字ヲ加フ

第三十條第一項中「地屯在中」ヲ「中自炊ヲ爲シタルトキ」ニ改メ第二項中「ノトキ其地屯在中」ヲ「中自炊ノトキ」ニ改ム

第三十一條第二項中「砲兵工科學舍」ノ下ニ「被服工長學舍」ノ六字ヲ加フ

第三十五條第二項中「見習藥劑官」ノ下ニ「獸醫部士官候補生」ノ八字及ヒ左ノ一項ヲ加フ

各兵科士官候補生及ヒ六週間現役兵被服ハ被服料ヲ給シ豫備役下士兵卒召集中被服ハ被服保續料ヲ給ス其金額ハ第二十一表ニ依ル

第三十六條中「砲兵工科學舍」ノ下ニ「被服工長學舍並ニ」ノ八字ヲ加フ

第三十八條第一項中「ニ係ルモノハ現員ニ應シ總テ」ヲ「六週間現役兵被服料及ヒ豫備役下士兵卒被服保續料ハ現員ニ應シ」ニ改メ第二項中「砲兵工科學舍」ノ下ニ「被服工長學舍並ニ」ノ八字ヲ加フ

第四十條第一項中「下士以下現員」ヲ「下士兵卒定員（一箇年間歸休セシムルモノヲ除ク）」ニ改メ第二項中「ニ於テモ前項ニ準ス」ヲ「被服工長學舍營内住居ノ下士以下ニ於テモ前項ニ準ス但定額ハ現員ニ應シ之ヲ交付ス」ニ改メ第三項ヲ削除ス

第四十三條ヘ左ノ一項ヲ加フ

前二項ノ馬飼料ハ毎月下旬ニ於テ之ヲ給ス

第四十四條中「委任ス」ノ下ニ「憲兵隊」ノ三字「諸學校」ノ下ニ「乘馬學校ニ於テハ裝蹄料別毛料ヲ除ク」ノ十七字ヲ加フ

第四十五條ヲ左ノ如ク改ム

軍馬育成所ノ馬匹ニハ飼養費及ヒ裝蹄費別毛費トシテ現馬數ニ應シ定額ヲ交付ス其金額ハ第二十三表ニ依ル但預托馬匹ニハ本條ニ準シ馬匹預托料ヲ交付スルコトヲ得其金額ハ第二十三表ニ依ル

第五十一條第一項中「委任ス」ノ下ニ「憲兵隊」ノ三字ヲ加ヘ第二項中「憲兵隊」ノ三字ヲ削除ス

第七十二條中「公務」ノ二字ヲ削除ス

第七十三條第二項中「但」ノ上ニ「若クハ歸休兵（兵員補缺トシテ）召集ノ者」ノ十七字ヲ加フ

第七十四條第二項中「見習藥劑官」ノ下ニ「見習獸醫官」ノ五字ヲ加ヘ第五項中「審判ヲ受ケ無罪又ハ免訴トナリタル」ヲ「旅行スル」ニ改ム

第七十五條第一項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

近傍三里未滿ト雖モ第六十七條第二項ノ場合ニ在テハ船舶料ヲ給ス其金額ハ第三十七表ニ依ル

第七十七條第一項中「依ル」ノ下ニ「疾疫其他ノ事故ニ依リ軍隊其他學生及ヒ諸生徒ヲ一時移轉セシムルトキモ亦之ニ準ス」ノ三十八字ヲ加ヘ及ヒ第二項ヲ左ノ如ク改ム

其旅行中自炊ヲ爲シ宿舍料ヲ要スルトキハ第三十八表ノ金額トシ又舟車馬ヲ要スルトキハ其舟車馬賃ハ實費トス

第七十八條第一項中「トス」ノ下ニ「疾疫其他ノ事故ニ依リ一時軍隊其他學生及ヒ諸生徒ヲ移轉セシムルトキモ亦之ニ準ス」ノ三十八字ヲ加フ

第八十二條ヘ左ノ一項ヲ加フ

歸鄉ノ者旅費ハ出發ノ際其順路ニ應シタル金額ヲ以テ精算拂ト爲シ之ヲ給スルコトヲ得

第八十五條第四項中「軍隊」ノ下ニ「其他」ノ二字ヲ加フ

第九十一條第三項中「及ヒ汽車船舶車馬料」ノ九字ヲ削除ス

第三表乃至第五表ヲ別表ノ如ク改ム

第六表中「在營」ヲ「在隊」ニ改ム

第九表第十一表乃至第二十一表及ヒ第二十三表第三十八表ヲ別表ノ如ク改ム

第四十一表ノ末ニ左ノ一項ヲ加フ

一　特ニ乘馬ニテ旅行ヲ命シタルモノ滯在中ニ限リ馬數ニ應シ一日金

三拾錢ヲ給ス

（別表畧之）

○同上　明治二十四年七月　勅令第百二十五號

陸軍給與令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍給與令中左ノ通改ム

第八條第一項中左ノ但書ヲ加フ

但參謀總長及監軍タル中將ハ大將ノ年額ニ依ル

第一表中左ノ通改ム

大將年額	中將年額	少將相當官俸
三千圓	二千圓	千五百七十五圓

第二表中左ノ通改ム

甲		
大將年額	中將年額	少將相當官俸
三千圓	二千圓	千五百七十五圓

陸軍給與令細則ハ法令類編第三卷第四類十七丁ニ載ス

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○陸軍給與令細則中改正　明治二十四年四月　陸軍省令第四號

明治二十三年四月陸軍省令第十號陸軍給與令細則第九章旅費ノ部中左ノ通改正ス

陸軍給與令細則

第九章　旅費

第一條中「赴任歸鄉旅行ハ日數ニ依リ日當ヲ給セス」ノ十八字ヲ削リ「計算ス」ノ下ヘ「ヘキ」ノ二字ヲ加フ

第三條ニ左ノ一項ヲ加フ

本令第七十五條ニ依リ陸路旅行ノ者海路ニアラサレハ到リ難キ里程ハ亦前項ノ改算法ニ依ル

第七條第八條ヲ削リ第九條以下順次繰上ク

第十條ニ左ノ一項ヲ加フ

營內居住ノ下士轉任轉職ノトキ事務引繼ノ爲メ滯在セシムルトキハ本令第三十五表ノ日當ヲ支給ス

第十一條ヲ左ノ如ク改ム

本令第七十七條第一項ノ旅費及第二項ノ宿舍料ハ其定額內ヲ以テ實費支辨スヘシ但准士官以上及營外居住ノ下士以下ニ在テハ宿舍料ヲ除クノ外時宜ニ依リ定額ヲ以テ支給スルコトヲ得

第十六條中「其甲額乙額ノ區別ハ其地方ニ依リ之ヲ定ムルモノトス」ノ二十四字ヲ削ル

第十九條第一項「軍隊」ノ下ヘ「及諸學生諸生徒」ノ七字ト第三項「先發後發」ノ下ヘ「(傷疾病其他公務等ニ依リ途中ヨリ歸營ヲ命シタル者其)」ノ割註ヲ加フ

第二十一條「赴任及」ノ三字ヲ削ル

第二十三條ヲ左ノ如ク改ム

本令第八十二條第二項歸鄉ノ者ニ日當ヲ給スルハ本令第六十六條但書ニ依リ計算ス故ニ早著スルモ返納セシメス延著スルモ追給セス

第二十四條　第一項ノ次ヘ左ノ三項ヲ加フ

兵器彈藥軍馬護送患者附添ノ爲メ前項行程ノ例ニ據リ難キトキハ現日數ニ應シ日當ヲ給ス

請願休暇旅行中公務ヲ命スルトキハ公務日數間ハ本令第三十二表ノ日當ヲ給シ又其公務ノ爲メ旅行ヲ命スルトキハ同表ノ旅費ヲ給ス

赴任途中他ノ公務ヲ帶ヒ某地ニ迂回シ或ハ某地ニ滯在セシムルトキハ實際ノ經路ニ依リ本令第三十二表ノ旅費ヲ給シ而シテ新舊任地間ハ本令第三十三表ノ移轉料ヲ給ス

一　乙表中四ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

五修技所教官及助教ハ官等ニ應シ班長又ハ測量掛ノ金額ヲ給ス

一　丁表ヘ左ノ一項ヲ加フ

對馬及紀州友ケ島ハ甲額其他ハ總テ乙額ヲ給ス

○屯田兵給與令

明治二十三年九月勅令第二百一號

朕屯田兵給與令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

屯田兵給與令

第一章　總則

第一條　屯田兵各部各隊ノ將校竝ニ相當官以下ニ係ル給與ハ總テ本令ニ依ル軍屬ニ在テ特ニ本令ニ規定シタルモノ亦同シ

第二條　本令中名稱ニ依リテ區別スルモノ左ノ如シ

一　屯田兵各隊ト稱スルハ屯田步兵屯田騎兵屯田砲兵屯田工兵ノ現役豫備ノ諸隊ヲ云フ

二　下士兵卒ト稱スルハ屯田各兵科下士兵卒竝其他ノ下士及看護手看守卒ヲ云フ

第三條　曹長ニシテ在職中准士官タルモノ及見習士官ハ特ニ給與ノ例ヲ定

ムルモノヽ外其給與ハ下士ニ異ナルコトナシ

第四條　屯田兵各隊ニハ被服馬匹消耗品陣營具ノ各章ニ掲クル定額ヲ交付シ該隊長ニ之カ經理ヲ委任ス

前項委任經理ニ屬スル諸品ノ廢物賣却代並損壞遺失授業シタルモノヽ補償金ハ之ヲ以テ直ニ該費ヲ補塡スルコトヲ得

第五條　屯田兵各隊ノ外各章ニ於テ特ニ委任經理ニ屬スルコトヲ掲ケタルモノハ第四條ニ準ス

第二章　俸給

第六條　俸給ヲ分ツ三トス

一　士官以上　俸給
二　下士兵卒　給料
三　見習士官　手當金

第七條　士官以上現役中俸給ハ陸軍給與令第一表ニ依ル但停職中ハ其半額ヲ給ス

第八條　士官以上在職中左ニ掲クルモノハ陸軍給與令第二表ノ職務俸甲額ヲ加給シ其他ハ乙額ヲ加給ス

屯田兵司令官同副司令官參謀官屯田兵司令部副官監督部長軍醫長歩兵大隊長騎砲工兵隊長

第九條　現役下士兵卒ノ給料ハ第一表ニ依ル但屯田兵移住給與規則ニ依ル扶助米鹽菜料ヲ受クル者ニハ之ヲ給セス

第十條　見習士官手當金ハ第二表ニ依ル

第十一條　豫備役下士兵卒公務ニ服シタルトキハ現役ニ準シ給料ヲ給ス

第十二條　現役下士兵卒第九條給料ノ外左ニ掲クルモノハ外宿加俸ヲ給ス

其金額ハ陸軍給與令第五表ニ依ル

一　他管ヨリ屯田各兵科ニ轉シタル下士

二　軍吏部衛生部下士及看守卒

第十三條　准士官タル曹長ニハ職務增俸ヲ給ス其金額ハ陸軍給與令第六表ニ依ル

第十四條　一等軍吏一等藥劑官ニシテ多年勤勞成績顯著ナルモノニハ陸軍給與令第七表ノ特別俸ヲ加給スルコトヲ得但此場合ニ於テハ第八條ノ職務俸ヲ給セス

第十五條　陸軍給與令第十三條第十四條第十五條第十六條第十七條第十八條第十九條ハ本令ニ之ヲ適用ス

第三章　宅料

第十六條　宅料ハ在職士官以上及ヒ外宿加俸ヲ受クル現役下士兵卒ニ給ス

其月額ハ陸軍給與令第八表ニ依ル

第十七條　陸軍給與令第二十一條第二十二條第二十三條ハ本令ニ之ヲ適用ス

第四章　食料

第十八條　食料ハ左ノ區別ニ由リ給ス其金額ハ第三表ニ依ル

一　豫備後備ノ下士兵卒召集中若クハ公務ニ服スルトキ但軍隊旅行演習旅行及其他旅費ヲ給スルトキハ給セス

二　現役及豫備役下士兵卒見習士官及外宿加俸ヲ受クル者ハ除ク病室ニ入リタルトキ

三　士官以上及下士兵卒公務ノ爲メ傷痍疾病ヲ受ケ病室ニ入リタルトキ

但軍屬モ之ニ準ス

第十九條　士官以上及下士兵卒演習中露營又ハ夜中行軍スルトキ其他下士兵卒不寢番ヲ爲ストキハ夜食料ヲ給ス其金額ハ第三表ニ依ル軍馬丁モ亦之ニ準ス

第二十條　下士兵卒營倉ニ處シタル者及檢察處分ニ由リ留置シタル者又ハ違警罪ニ依リ處分ヲ受ケタル者ノ食料ハ第四表ニ依ル

第二十一條　屯田兵監獄ニ入監スル者ノ糧食ハ第四表ニ依ル其糧食ハ現人員ニ應シ定額ヲ交付シ監獄ニ經理ヲ委任スルコトヲ得

第五章　被服

第二十二條　被服ハ士官以上自辨トシ見習士官並ニ下士以下ハ官給トス其給與ノ區別ハ左ノ各項ニ依ル

一　曹長ニシテ在職中准士官タル者ノ被服ハ現品及代金ヲ給ス其員數ト金額ハ陸軍給與令第十二表第十五表中歩兵下副官ニ同シ

二　各隊下士兵卒及見習士官ノ被服ハ現品ヲ給ス其員數下士卒ハ第五表ニ依リ定員ニ應シ地質ト金額トヲ以テ見習士官ハ陸軍給與令第十二表中歩兵科士官候補生ニ準シ現員ニ應シ金額ヲ以テ交付シ該隊ニ經理ヲ委任ス其地質ノ定尺及金額ハ陸軍大臣之ヲ定ム

三　外宿加俸ヲ受クル下士兵卒ノ被服ハ現品及代金ヲ給ス其員數ト金額トハ陸軍給與令第十二表第十五表ニ依ル

第二十三條　各隊ニ於テハ被服修理料及被服手入具永續料トシテ其定額ヲ下士兵卒ノ現員外宿加俸ヲ受クル下士兵卒ヲ除クニ應シ之ヲ交付シ該隊ニ其經理ヲ委任ス其金額ハ第六表ニ依ル

第二十四條　大隊本部中隊分屯隊ノ週番ニ要スル寢具及病室ノ被服ハ初度現品ヲ備付ケ爾後毎月永續料ヲ交付シ該隊ニ其經理ヲ委任ス其員數及金額ハ第七表第八表ニ依ル

第二十五條　陸軍給與令第三十四條第四十一條ハ本令ニ之ヲ適用ス

第六章　馬匹

第二十六條　騎兵及砲兵ノ馬匹ハ移住ノ初度之ヲ給ス但士官及外宿加俸ヲ

受クル下士ニハ貸與ス

前項給與ノ馬匹廢斃シタルトキハ下士兵卒現役中ニ限リ之ヲ換給ス

第二十七條　騎兵砲兵隊ノ下士兵卒ニハ現役中飼養料ヲ給ス其金額ハ第九表ノ乙額ニ依ル但宿外加俸ヲ受クル下士ニハ甲額ヲ給ス

第二十八條　騎兵及砲兵隊現役下士兵卒ノ馬匹ニハ裝蹄料トシテ定馬數ニ應シ定額ヲ交付シ該隊ニ其經理ヲ委任ス其金額ハ第九表ニ依ル

騎兵及砲兵隊ニハ裝蹄器械ヲ初度現品ニテ備付ケ爾後裝蹄料ノ内ヲ以テ之ヲ保續セシム

第二十九條　騎兵及砲兵隊ニハ馬療器械ヲ初度現品ニテ備付ケ爾後每月永續料トシテ第九表ノ金額ヲ交付シ該隊ニ其經理ヲ委任ス

第三十條　騎兵及砲兵隊現役下士兵卒ノ馬匹ニハ馬藥料トシテ定馬數ノ十分一ニ應シ定額ヲ交付シ該隊ニ其經理ヲ委任ス其金額ハ第九表ニ依ル

第三十一條　陸軍給與令第四十三條第四十八條第四十九條第五十條第五十二條ハ本令ニ之ヲ適用ス

第七章　消耗品及陣營具

第三十二條　各隊日常所要ノ消耗品ハ消耗品料及煖室用薪炭料ノ二種ニ分チ各定額金ヲ交付シ該隊ニ其經理ヲ委任ス其金額ハ第十表第十一表ニ依ル

第三十三條　煖室用薪炭料ハ煖室器備付ノ現數及焚方期限ニ應シ之ヲ交付ス但焚方期限ハ第十一表ニ依ルト雖モ其定額以内ヲ以テ本條ノ期限ヲ伸縮スルコトヲ得

第三十四條　各隊所要ノ陣營具ハ初度現品ヲ備付ケ爾後每月永續料トシテ定額金ヲ交付シ該隊ニ其經理ヲ委任ス其金額ハ第十二表ニ依ル

第八章　旅費

第三十五條　各隊本部移轉スルトキノ旅費ハ總テ赴任ニ準シ之ヲ給ス

第三十六條　工事監視並測量ノ爲メ出張ノ者並ニ大隊管轄地ヲ旅行スル該隊上長官士官及下士兵卒ノ旅費ハ陸軍大臣陸軍給與令第三十二表及本令第十三表ノ旅費定額内ヲ以テ別ニ之ヲ定ムルコトヲ得

第三十七條　陸軍給與令第六十五條第六十六條第六十七條第六十八條第六十九條第七十條第七十二條第七十三條第七十四條第七十五條第七十六條第七十七條第七十八條第七十九條第八十條第八十二條第八十三條第八十四條第八十五條第八十六條第八十七條ハ本令ニ之ヲ適用ス但北海道内陸路旅行ニ限リ陸軍給與令第三十二表第三十三表ノ車馬賃ハ本令第十三表ニ陸軍給與令第三十四表ノ車馬料ハ本令第十四表ニ陸軍給與令第三十五表ノ車馬料ハ本令第十五表ニ依ル

第九章　諸手當

第三十八條　野外演習又ハ行軍演習中ノ手當ハ陸軍給與令第八十八條ヲ適用ス

第三十九條　屯田兵移住給與規則ニ依リ扶助米鹽菜料ヲ受クル現役下士上等兵看護手及喇叭手タル一二等卒ニハ公務ニ服シタルトキニ限リ勤務手當ヲ給ス其金額ハ現役下士兵卒給料ノ額ニ同シ

第四十條　新ニ移殖セル地ニ於テ職ヲ奉スル上長官士官見習士官及外宿加俸ヲ受クル下士兵卒ニハ移殖後一箇年間移殖地在職手當ヲ給ス其金額ハ第十六表ニ依ル

第十章　雜則

第四十一條　現役及豫備役ノ下士兵卒見習士官及外宿加俸ヲ受クル者ハ除ク死亡スルトキハ埋葬料ヲ給ス其金額ハ陸軍給與令第四十六表ニ依ル

後備役下士兵卒召集中死亡スルトキモ亦同シ

第四十二條　本令中ニ陸軍給與令ヲ適用スル條項ニ於テ營內居住ノ下士兵卒ニ係ル事項ハ外宿加俸ヲ受ケサル下士兵卒ニ營外居住ノ下士兵卒ニ係ル事項ハ外宿加俸ヲ受クル下士兵卒ニ適用ス

第四十三條　本令第六條乃至第十七條及第三十九條第四十條ハ明治二十三年十二月一日ヨリ施行ス

第四十四條　本令ニ關スル細則ハ陸軍大臣之ヲ定ム

外國旅費規則ハ法令類纂第一卷六百十五丁ニ收ス

第四十五條　本令ト牴觸スル命令ハ本令施行ノ日ヨリ總テ廢止ス

第四十六條　本令中歩兵騎兵砲兵工兵ニ係ル規定ハ明治二十四年三月三十一日迄現今ノ屯田兵隊及屯田兵將校下士兵卒ニ適用ス但兵科ニ由リ給與ノ區別アルモノハ歩兵科ニ依ル

（別表略之）

○外國旅費規則第十三條中追加

明治廿三年十月勅令第二百五十九號

朕外國旅費規則中追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

外國旅費規則第十三條中左ノ一項ヲ追加ス

在外各廳在勤中死亡ノ者モ前項ニ準ス

○帝國議會議長副議長議員歲費旅費支給規則

明治二十三年十月勅令第二百六十五號

朕帝國議會議長副議長議員歲費及旅費支給規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝國議會議長副議長議員歲費及旅費支給規則

第一條　帝國議會議長副議長及議員ノ歲費ハ毎年七月ヨリ翌年六月ニ至ル十二箇月ヲ以テ一歲トシ計算ス

第二條　議長副議長及議員ノ歳費ハ其ノ前六箇月分ヲ帝國議會通常會開會ノ後三十日以内ニ其ノ後六箇月分ヲ閉會ノ後七日以内ニ支給ス

第三條　議長副議長ノ歳費ハ其ノ勅任セラレタル當月分ヨリ支給ス議長副議長ニ勅任セラレタル議員ノ歳費ハ其ノ勅任セラレタル前月分マテ支給ス

第四條　貴族院勅任議員ノ歳費ハ其ノ勅任セラレタル當月分ヨリ支給ス但シ多額納税者ノ互選セラレタル者ハ其ノ互選セラレタル當月分ヨリ支給ス

第五條　議長副議長及議員退職辭職除名ノ場合ニ於テハ其ノ當月分マテヲ支給ス

第六條　衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ其ノ議長副議長及議員ノ歳費ハ解散ヲ命セラレタル當月分マテヲ支給ス

第七條　衆議院解散ヲ命セラレタル後選擧セラレタル議員及補缺議員ノ歳費ハ其ノ選擧セラレタル當月分ヨリ支給ス

第八條　衆議院ノ議員貴族院ノ議員トナリタルトキ其ノ他如何ナル場合ヲ問ハス歳費ハ同一人ニ對シ重複支給セス

第九條　官吏ニシテ議員タル者官吏ヲ罷メタルトキハ其ノ當月分ヨリ議員ニシテ官吏ニ任セラレタル者仍議員タルトキハ其ノ當月分マテヲ支給ス

第十條　議長副議長及議員ノ旅費ハ別表定ムル所ニ從ヒ之ヲ支給ス官吏ニシテ議員タル者亦同シ

上京旅費ハ歳費ノ前半額ト歸鄉旅費ハ歳費ノ後半額ト同時ニ之ヲ支給ス

第十一條　旅費ハ當選區ノ何地ニ在ルヲ問ハス其ノ住居地ヨリ直路ノ里程ヲ計算シテ之ヲ支給ス

第十二條　議院ヲ距ル三里以内ノ地ニ住居スル者ハ何地ノ議員タルヲ問ハス旅費ヲ支給セス

第十三條　汽車旅行ハ一日二百哩詰汽船旅行ハ一日百海里詰陸路旅行ハ一日十二里詰ノ割合ヲ以テ直路ノ行程ニ應シ支給ス但シ一日ノ行程ニ滿タサル端數ハ切捨トス

第十四條　召集ニ應セサル議員ニハ事故ノ如何ヲ問ハス旅費ヲ支給セス

旅費表

汽車	一哩ニ付	汽船	一海里ニ付	車馬	一里ニ付	日當
拾錢	拾錢	參拾錢	二圓五拾錢			

○林區署管内旅費規則第八條中追加明治二十三年十月農商務省訓令第五十四號

林區署管內旅費規則ハ法令類編第三卷第四類七丁ニ載ス

明治二十三年二月農商務省訓令第十號林區署管內旅費規則第八條廢官ノ下退官ノ二字ヲ追加ス

○現役屯田兵下士卒食料給與方 明治二十三年十一月勅令第二百六十六號

朕現役屯田兵兵下士卒ノ食料ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十一年以前召募ノ屯田兵及屯田兵出身ノ下士ニシテ扶助年限滿期ノ後仍ホ現役ニ在ル者召集中若クハ公務ニ服シタルトキハ屯田兵給與令第三表ノ食料ヲ給ス

海軍軍人手當金規則ハ法令類編第一卷六百二十七丁ニ載ス

○海軍軍人手當金規則第七條削除 明治廿四年二月勅令第七號

朕海軍軍人手當金規則中削除ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍軍人手當金規則中第七條ヲ削除ス

海軍糧食條例ハ法令類編第三卷第四類五丁ニ載ス

○海軍糧食條例中追加ノ件 明治廿四年二月勅令第八號

朕海軍糧食條例中追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍糧食條例中左ノ通追加ス

第一條二項

難破船乘組ノ者又ハ漂流人救助スルトキ、俘虜ヲ監禁スルトキ、軍隊ニテ俘虜ヲ護衛スルトキ犯罪ノ常人ヲ拘禁スルトキ又ハ公務ニ原因スル傷疾疾病ニ罹リタル職工人夫ヲ病院ニテ治療セシムルトキハ前項ニ掲クル軍人軍屬ニ準シ糧食ヲ給スルコトヲ得

第六條中「食卓組合ヲ定メ」ノ下「生徒及」ノ三字ヲ加フ

海軍被服條例ハ法令類編第三卷第四類六十二丁ニ載ス

○海軍被服條例中追加 明治二十四年二月勅令第十三號

朕海軍被服條例中追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍被服條例中左ノ通追加ス

第二條並各表中「二等兵曹」ノ次ニ「二等信號手」「三等兵曹」ノ次ニ「三等信號手」「水兵」ノ次ニ「信號兵」ヲ加ヘ第一表及第二表中「一等兵曹」ノ次ニ「一等信號手」ヲ加ヘ又第一表中折メスノ欄「兵曹」ノ下ニ「信號手」ヲ「水兵」ノ下ニ「信號兵」ヲ加フ

第九條二項

難破船乘組ノ者又ハ漂流人ヲ救助シ若クハ俘虜ヲ監禁シ若クハ軍隊ニ於テ俘虜ヲ護衛スルトキハ之ニ適宜被服物品ヲ給スルコトヲ得但被服物品ヲ給スルトキハ徽章ヲ除去スヘシ

○明治六年大藏省達第百六十一號(辨當料改定)

同二十二年閣令第四號(文具料支給規則)廢止

明治二十四年三月勅令第二十七號

朕明治六年大藏省達第百六十一號及明治二十二年閣令第四號廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治六年大藏省達第百六十一號及明治二十二年閣令第四號ハ本年三月三十一日限廢止ス但宿直又ハ徹夜勤務使役ノ者ニハ適宜食料(現品又ハ代料)ヲ給與シ又特別用ノ文具ハ官廳ニ備ヘテ使用セシムルコトヲ得

○公使館領事館費用條例

明治二十四年三月勅令第三十三號

朕茲ニ公使館領事館費用條例ヲ裁可ス

公使館領事館費用條例

第一章　俸給

第一條　外交官、領事館、公使館書記生及領事館書記生ノ俸給ハ分テ本俸在勤俸及加俸ノ三種トス

第二條　外交官及領事官ノ本俸ハ(別表ニ依ル)但左ノ場合ニ於テハ其半額ヲ給ス(明治二十四年七月勅令第百三號ヲ以テ改正)

一　賜暇歸朝ヲ許サレタル者ニシテ歸朝後六箇月ヲ過キタルトキ

二　養痾ノ爲メ歸朝ヲ許サレタル者ニシテ歸朝後三箇月ヲ過キタルトキ

外交官及領事官ニシテ任所ナキ者ハ本俸三分ノ一ヲ給ス

第三條　公使館書記生及領事館書記生ノ本俸ハ本年勅令第八十三號判任官等俸給令ニ依ル(同上)

書記生ニシテ賜暇歸朝ヲ許サレタル者ニハ歸朝後六箇月間又養痾ノ爲メ歸朝ヲ許サレタル者ニハ歸朝後三箇月間ハ各本俸ノ全額ヲ給ス但此期限ヲ過キタル後ハ本俸ノ半額ヲ給ス

第四條　在勤俸ハ海外在勤ノ場合ニ於テ本俸ノ外任所到著ノ翌日ヨリ任所出發ノ前日マテ給スルモノトス

外交官及公使館書記生ノ在勤俸ハ別表第一號ニ依ル

領事官及領事館書記生ノ在勤俸ハ別表第二號第三號ニ依ル

在勤俸ハ年額ヲ十二分シ其一分ヲ以テ一箇月分ト爲シ毎月末之ヲ給ス但端日數ニ係ルモノハ日割計算ス

第五條　新ニ在勤ヲ命セラレタル者ニハ左ノ割合ニ依リ加俸ヲ給ス

一　公使、總領事、領事赴任スルトキハ在勤俸年額十分ノ三ヲ給ス但其妻ヲ同伴スルトキハ更ニ在勤俸年額十分ノ一ヲ給ス赴任後其妻ヲ任地ヘ呼寄スルトキモ亦同シ

二　公使館參事官、公使館書記官、交際官試補、副領事赴任スルトキハ在勤俸年額十分ノ二ヲ給ス但其妻ヲ同伴スルトキハ更ニ在勤俸年額十分ノ一ヲ給ス赴任後其妻ヲ任地ヘ呼寄スルトキモ亦同シ

三　公使館書記生、領事館書記生赴任スルトキハ在勤俸年額十分ノ二ヲ給ス

四　傭員ニハ百圓ヲ給ス但清國及朝鮮國ヘ在勤ヲ命セラレタル者ニハ其半額ヲ給ス

第六條　任所替若クハ官用歸朝ヲ命セラレタル者又ハ賜暇歸朝ヲ許サレタル者ニハ出發前加俸トシテ其在勤俸年額十分ノ一ヲ給ス但外交官及領事官ニシテ其妻ヲ同伴シタル者ニハ十分ノ二ヲ給ス（明治廿四年六月勅令第五十號ヲ以テ但ノ下數字追加）

第七條　官用歸朝ヲ命セラレタル者歸任スルトキハ前條ニ依リ出發前加俸ヲ給ス

第八條　外國在勤ヲ命セラレタル者ニシテ本邦出發前在勤ヲ免セラレタルトキハ出發前加俸ノ半額ヲ給ス

本邦出發前死去シタル者ニハ全額ヲ給ス

自己ノ情願ニ依リ在勤ヲ免セラレタル者ニハ之ヲ支給セス

第九條　外國ニ於テ任官、轉官若クハ官等ヲ陞降セラレタル者ノ俸給ハ辭令ニ對スル受書ニ載セタル月日ノ當日ヨリ起算ス

外國ニ於テ非職ヲ命セラレタル者及退官シタル者ニハ其辭令ニ對スル受書ニ載セタル月日ノ當日マテ在勤年俸ヲ給ス

第十條　歐米各國濠洲及布哇國ニ在勤スル者ノ俸給ハ金貨ヲ以テ支給ス但本邦滯在中又ハ旅中ノ本俸ハ銀貨ヲ以テ支給ス

東洋諸國ニ在勤スル者ノ俸給ハ銀貨ヲ以テ支給ス

第十一條　任所替若クハ歸朝ヲ命セラレタル者其辭令到達ノ日ヨリ四週間ヲ過キ尚出發セサルトキハ在勤俸ヲ給セス但病ニ罹リ外務大臣ノ許可ヲ得テ滯留スル者ニハ更ニ四週間ヲ限リ在勤俸十分ノ四ヲ給ス

第十二條　公使、總領事、領事其任所ニ於テ交代ノ場合ニ於テハ前任者ノ在勤俸ハ後任者著任ノ翌日ヨリ其十分ノ三ヲ減ス

第十三條　公使、總領事、領事ヲ代理スル副領事、公使館參事官及公使館書記官ニシテ其妻ヲ任所ニ同伴シ若クハ呼寄セタル者ニハ其妻任所ニ到著ノ翌日ヨリ出發ノ前日マテ其在勤俸十分ノ三ヲ增給ス

第十四條　公使館參事官又ハ公使館書記官ニシテ公使ノ代理ヲ命セラレタル者ニハ在勤俸十分ノ四ヲ加給ス

第二章　補助員傭給

第十五條　公使館又ハ領事館ニ置ク補助員ノ傭給ハ歐米各國濠洲及布哇ニ於テハ一箇月金貨四百圓東洋諸國及其他ニ於テハ銀貨貳百圓ヲ超過スル

コトヲ得ス

第三章　退官賜金非職給及死亡賜金

第十六條　外交官、領事官、公使館書記生及領事館書記生ノ退官賜金及非職給ハ其本俸ニ依リ之ヲ算出ス

第十七條　外交官、領事官、公使館書記生及領事館書記生外國在勤中死亡シタルトキハ明治二十三年法律第四十四號遺族扶助法及本年勅令第八十二號高等官任命及俸給令第十一條並本年勅令第八十三號判任官俸給令第五條ニ依リ給スルモノヽ外別ニ其在勤俸十分ノ二ヲ其遺族ニ給ス（明治廿四年七月勅令第百三號ヲ以テ本條中改正）

第四章　旅費

第一節　總則

第十八條　旅費トハ船車料日當ノ二種ヲ合稱ス

第十九條　旅費ハ外交官、領事官、公使館書記生及領事館書記生ノ赴任、官用歸朝、賜暇歸朝、任所替其他官務旅行ノ場合ニ限リ給スルモノトス

第二十條　任所ニ於テ非職ヲ命セラレ又ハ免官セラレタル者其辭令到達ノ日ヨリ四週間以內ニ出發歸朝スルトキ本官若クハ前官旅費ヲ給ス

第二十一條　公使館又ハ領事館所在地ニ於テ傭入レラレタル本邦人滿四年以上勤續ノ後解傭セラレ其當日ヨリ四週間以內ニ出發歸朝スルトキハ旅

費ヲ給ス

第二十二條　公使館又ハ領事館ニ置ク補助員ニハ任所替若クハ官務旅行ヲ命シタルトキニ限リ旅費ヲ給ス但其傭給額一箇月銀貨貳百五拾圓以上ナルトキハ奏任官本俸年俸千貳百圓相當ノ旅費ヲ給ス其他ニハ判任官相當ノ旅費ヲ給ス（同上）

第二節　船車料

第二十三條　外交官、領事官、公使館書記生、領事館書記生、及補助員ニハ一等船車料ヲ傭員及從者ニハ二等船車料ヲ別表第四號ニ依リ給ス但表中規定セサルモノハ實費ヲ給ス

官船若クハ官ノ雇船ニテ旅行スル者現ニ船料ヲ要セサルトキハ之ヲ給セス

汽船汽車ノ便ナキ處ヲ旅行スル場合ニ於テハ人馬舟車ノ雇賃實費ヲ給ス

往返ノ路程十二哩ニ滿タサルトキハ船車料及前項ノ實費ヲ給セス

第二十四條　左ノ場合ニ於テハ外交官、領事官、公使館書記生領事館書記生ノ妻ニハ別表第四號ニ依リ一等船車料ヲ給ス

一　夫ノ赴任、官用歸朝、賜暇歸朝及任所替ノ際夫ト同行スルトキ

二　夫ト同行セサルトキト雖モ本邦ヨリ夫ノ任所ヘ一回限リ往復スルトキ

三　公使官務ヲ帶ヒテ兼任國ヘ旅行スル場合ニ於テ其妻ヲ同伴スルトキ前條第二項以下ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第二十五條　公使赴任、官用歸朝、賜暇歸朝任所替又ハ官務ヲ帶ヒテ兼任國ヘ旅行スル場合ニ於テ現ニ其妻ヲ同伴シ從者二人ヲ隨伴セシムルトキハ從者二人分若シ現ニ從者一人ナルトキハ一人分ノ二等船車料ヲ給ス

前項ノ場合ニ於テ公使其妻ヲ同伴セサルトキハ現ニ從者二人ヲ隨伴セシムルト雖モ一人分ノ二等船車料ヲ給ス

公使以外ノ外交官及領事官ニシテ赴任、官用歸朝、賜暇歸朝又ハ任所替ノ際現ニ妻ヲ同伴シ從者ヲ隨伴セシムルトキハ一人分ノ二等船車料ヲ給ス

但從者ヲ隨伴スルモ妻ヲ同伴セサルモノハ支給ノ限リニアラス

第二十六條　外交官及領事官其妻ヲ任所ニ呼寄スル際現ニ從者ヲ隨伴セシムルトキハ一人分ノ二等船車料ヲ給ス

第二十七條　外交官、領事官、書記生ノ妻任所ニ於テ死亡シ其遺骸ヲ本邦ヘ回送スル場合ニ於テハ第四號表ニ依リ本邦迄ノ一等船車料ヲ手當トシテ給ス

第三節　日當

第二十八條　陸行中及出張地滯在中ハ左ノ割合ニ依リ日當ヲ給ス但往返一日ヲ出テサルトキハ之ヲ給セス又出張地到著ノ翌日ヨリ起算シ滿二週間ヲ過クルトキハ其滯在中日當ヲ半額ニ減ス（同上勅令ニ依リ日當表中改正）

官等 ＼ 任所	歐米濠洲布哇	東洋及其他諸國	朝鮮
勅任官	金貨拾圓	銀貨拾圓	銀貨八圓
奏任官 本俸年俸千二百圓及其以上	同七圓	同七圓	同五圓
奏任官 本俸年俸千二百圓未滿	同六圓	同五圓	同四圓
判任官	同五圓	同四圓	同三圓
傭員	同四圓	同三圓	同貳圓

第二十九條　航行中ハ前條日當ノ半額ヲ給ス但船料ヲ給セサル場合ニ於テハ日當十分ノ七ヲ給ス

第三十條　公使兼任國ニ出張スル場合ニ於テハ到著ノ翌日ヨリ起算シ其滯在日數滿四週間マテハ第二十八條ノ日當ノ外更ニ其十分ノ五ヲ給ス

第五章　經費

第三十一條　公使館領事館經費ハ實費精算ヲ要スルモノト精算ヲ問ハス渡切ルモノトノ二種ニ區分シ其區分ニ屬スル費目ハ外務大臣大藏大臣ニ協議シテ之ヲ定ムヘシ

第三十二條　外務大臣ハ特ニ事務所費ヲ名譽領事ニ給スルコトヲ得但一箇年貳千五百圓ヲ超過スルコトヲ得ス

第六章　補則

第三十三條　本條例ニ掲クル領事官ニ關スル條項ハ貿易事務官ニモ適用ス

第三十四條　本條例ハ明治二十四年四月一日ヨリ施行ス

本條例ノ施行ニ關スル細則ハ外務大臣之ヲ定ム

明治十九年勅令第二十三號無任所外交官年俸及同年勅令第四十九號交際官並領事費用條例ハ本條例施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

交際官並領事官本俸

官名	年俸
特命全權公使	一級　四千五百圓 二級　四千三百圓
辨理公使 代理公使 總領事	三千圓
領事	二千五百圓
貿易事務官	千八百圓
公使館參事官	一級　千百圓 二級　千百圓 三級　千百圓
公使館書記官	一級　八百圓 二級　六百圓 三級　四百圓 四級　二百圓 五級　百圓
交際官試補 副領事	一級　千八百圓 二級　千六百圓 三級　千百圓

第一號

外交官及公使館書記生在勤俸

官／任所	英露米	佛獨澳	伊	蘭	清	朝
特命全權公使	五千圓	四千七百圓	四千三百圓	四千圓	四千三百圓	四千圓
辨理公使	四千五百圓	四千貳百圓	三千八百圓	三千五百圓	三千八百圓	三千五百圓
代理公使	三千七百圓	三千四百圓	三千圓	貳千七百圓	三千圓	貳千七百圓
公使館參事官	貳千圓	千八百圓	千六百圓	千五百圓	千六百圓	千五百圓
公使館書記官	貳千圓	千八百圓	千六百圓	千五百圓	千六百圓	千五百圓
交際官試補	千四百圓	千貳百圓	千百圓	千圓	千圓	九百圓
公使館書記生	千三百圓以下	千百圓以下	千圓以下	九百圓以下	九百圓以下	八百圓以下

第二號

領事官及領事館書記生在勤俸

官／任所	倫敦	紐育	里昂	桑港	ヴァンクーヴハー
總領事	三千圓	貳千九百圓	貳千七百圓	貳千六百圓	貳千六百圓
總領事代理	貳千五百圓	貳千四百圓	貳千三百圓	貳千貳百圓	貳千貳百圓

領事	貳千三百圓
領事代理	貳千　圓
總領事館事務代理	千七百圓
領事館事務代理	千五百圓
副領事	千四百圓
書記生	千三百圓以下

第三號

領事官及領事館書記生在勤俸

任官所			
上海	津	山元	嘉
香港	釜山	新潟	坡
天津	仁川	京城	芝罘、福州、漢口、廣東、可爾薩
總領事	三千圓	貳千八百圓	貳千七百圓
總領事代理	貳千四百圓	貳千三百圓	貳千貳百五拾圓
領事	貳千貳百圓	貳千百圓	貳千貳百圓
領事代理	千九百圓	千八百圓	千七百圓
總領事館事務代理	千六百圓	千五百圓	千四百圓
領事館事務代理	千四百圓	千三百圓	千貳百圓
副領事	千三百圓	千貳百圓	千百圓
書記生	千貳百圓以下	千百圓以下	九百圓以下

千貳百圓以下	千百圓以下	九百圓以下	八百圓以下	八百圓以下	八百圓以下
千貳百圓以下	千百圓以下	九百圓以下	八百圓以下	八百圓以下	八百圓以下
千三百圓以下	千貳百圓以下	千百圓以下	九百圓以下	八百圓以下	八百圓以下
千四百圓	千三百圓	千貳百圓	千百圓	千百圓	千百圓
千五百圓	千四百圓	千三百圓	千貳百圓	千貳百圓	千貳百圓
千六百圓	千五百圓	千四百圓	千三百圓	千三百圓	千三百圓
千七百圓	千六百圓	千五百圓	千四百圓	千四百圓	千四百圓
千八百圓	千七百圓	千六百圓	千五百圓	千五百圓	千五百圓
千九百圓	千八百圓	千七百圓	千六百圓	千六百圓	千六百圓
貳千百圓	千九百圓	千八百圓	千七百圓	千七百圓	千七百圓
貳千貳百五拾圓	貳千百圓	千九百圓	千八百圓	千八百圓	千八百圓
貳千三百圓	貳千貳百五拾圓	貳千百圓	千九百圓	千九百圓	千九百圓
貳千四百圓	貳千三百圓	貳千貳百五拾圓	貳千百圓	貳千百圓	貳千百圓
貳千貳百圓	貳千四百圓	貳千三百圓	貳千貳百五拾圓	貳千貳百五拾圓	貳千貳百五拾圓
貳千貳百圓	貳千五百圓	貳千四百圓	貳千三百圓	貳千三百圓	貳千三百圓
貳千貳百圓	貳千貳百圓	貳千五百圓	貳千四百圓	貳千四百圓	貳千四百圓
千百圓以下	千百圓以下	千貳百圓	千三百圓	千五百圓	千六百圓
千百圓以下	千百圓以下	千百圓	千貳百圓	千四百圓	千五百圓
千百圓以下	千百圓以下	千百圓	千百圓	千百圓	千百圓

第四號

任所片道船車料

等	一等	二等
東京馬耳塞間	四百八拾壹圓	貳百八拾九圓
同羅馬間	四百九拾八圓	貳百九拾七圓
同維也納間	五百三拾五圓	三百貳拾三圓
同伯林間	五百三拾五圓	三百貳拾三圓
同里昂間	四百九拾壹圓	貳百九拾四圓
同巴里間	五百　圓	三百　貳圓
同海牙間	五百拾八圓	三百八圓
同聖彼得堡間	五百八拾四圓	三百五拾八圓
同倫敦間	五百貳拾貳圓	三百拾五圓
同リバプール間	五百三拾四圓	三百貳拾五圓
同桑港間	貳百三拾三圓	九拾九圓
同バンクーヴハー間	貳百三拾三圓	九拾九圓

同紐育間	四百拾五圓	貳百拾圓	五拾八圓
同華盛頓間	四百拾五圓	貳百貳拾圓	五拾八圓
同布哇間	貳百三拾三圓	九拾九圓	五拾八圓
同メルボルン間	四百拾七圓	貳百五拾四圓	五拾八圓
同釜山間	四百拾五圓	貳拾五圓	三拾貳圓
同元山間	五拾六圓	三拾貳圓	三拾貳圓
同仁川間	五拾六圓	三拾貳圓	三拾貳圓
同京城間	六拾三圓	三拾七圓	三拾貳圓
同浦潮間	七拾壹圓	四拾壹圓	四拾壹圓
同哥爾薩間	百拾貳圓	五拾三圓	五拾三圓
同上海間	五拾三圓	三拾三圓	三拾三圓
同北京間	百貳拾四圓	七拾四圓	七拾四圓
同漢口間	百四圓	五拾壹圓	五拾壹圓
同天津間	七拾八圓	四拾五圓	四拾五圓
同芝罘間	六拾八圓	三拾九圓	三拾九圓
同福州間	八拾四圓	四拾五圓	四拾五圓
同廣東間	八拾貳圓	五拾八圓	五拾八圓
同香港間	七拾貳圓	五拾三圓	五拾三圓
同新嘉坡間	百三拾圓	八拾貳圓	百五拾九圓
同マニラ間	貳百五圓	百五拾九圓	百五拾九圓

以上銀貨ヲ以テ支給ス

○公使館領事館費用條例細則

明治二十四年勅令第三十三號公使館領事館費用條例細則左ノ通定メ該條例施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十四年四月外務省令第一號

第一條　費用條例第十四條ノ代理者加給及ヒ領事代理俸ハ事務引繼ヲ了リタル翌日ヨリ之ヲ給シ本任官歸任若クハ新任本官到著ノ日ニ到リテ止ム

第二條　補助員及傭員ノ月俸ハ毎月末之ヲ給ス但端日數ニ係ルモノハ日割計算ス

第三條　東京任所間往返ノ途次自己ノ都合ニ因リ滯在若クハ迂路ヲ同行シタルトキハ其日子ニ對スル日當及實費船車料ヲ給セス但船待セシ者又ハ病ニ罹リ醫師ノ診斷書ヲ添證明シタル者ハ此限ニ在ラス

第四條　公使館領事館ノ經費ハ左ノ如ク區分ス

實費精算ヲ要スル費目

修繕費　家屋塀壁溝渠旗竿等ノ修繕費竝對客間事務所破物費
裁判及囚徒費
朝鮮國居留地取締費
地所家屋借料
廳費
備品費ノ內
器具
國旗竝綱
官印
公務所椅子竝机
書棚鐵函
窓飾戸帳　對客間食堂ニ限ル
椅子
食堂用テーブル
食堂用戸棚
圖書費ノ內
書籍地圖類
通信運搬費ノ內

電信料
運搬費　保險料及公館移轉ノ節什器運搬ノ費用
見本品購入代
雜費
諸謝金　公館ヨリ訴訟若クハ要求ヲ爲サヽルヘカラサル場合ニ於テ代言人ニ依賴等ノ支拂
爲換料
火災保險料
道路疏水等ノ手當　上水風金其他ノ諸稅等
在外國難民貸與金
受繼電信料
墓地管理費
精算ヲ問ハサル渡切費目
廳費
備品費ノ內
點火器
圖書費ノ內
新聞雜誌類　內外各種ノ新聞雜誌アルマナックノ類
製本費

筆紙墨文具
用紙封筒ノ類
諸帳簿　會計諸帳簿
消耗品
薪炭油　朝鮮國諜衛所及警察署ニ限ル
通信運搬費ノ内
郵便税　郵便發送ノ爲メニ要スル諸費共
傭人被服費　公使館ニ限ル
雜費
諸手數料
廣告料
印紙料
器具器械其他借料
雜給
雇人料　僕長支爾番公務所小使但公使館ニ限ル
宴會費　領事館ハ天長節ニ限ル

第五條　前條科目外ノ費用ハ公使領事若クハ其代理者ノ負擔トス

第六條　渡切費用ハ各科目定額ヲ十二分シ其一分ヲ以テ一箇月トシ毎月末之ヲ各館長官ニ交付シ當該長官ノ領收證書ヲ以テ支拂ヲ證明スヘシ

○内國税徴收費支辨旅費支給方

明治廿四年三月大藏省訓令第廿一號

府　縣

内國税徴收費支辨旅費支給方左ノ通相定メ明治二十四年四月一日ヨリ施行ス

但明治十九年六月當省訓令第二十八號第二項及明治二十三年十一月四十七號本年一月訓令第六號ハ本訓令施行ノ日ヨリ相廢ス

一普通旅行ハ内國旅費規則ニ據リ左表ノ通支給スヘシ

官等	汽車賃	汽船賃 一等海里	汽船賃 二等海里	管外車馬賃 一里	管内車馬賃 一里	管外日當 一日	管内日當 一日
收税長	上等賃費 六錢	十五錢	十二錢	一圓三十錢	一圓		
收税屬	中等賃費 五錢	八錢	六錢	七十錢	五十錢		

一土地檢査員所轄内ノ巡回旅費ハ月額金十五圓ヲ支給スヘシ
一間税檢査員所轄内ノ巡回旅費ハ月額金十二圓ヲ支給スヘシ
一土地及間税ノ檢査員其分署所在地市町村内ノ巡回ハ旅費ヲ給セス
一分署所在地市町村ノ接續スル町村若ハ其町村ノ一部落大字等ヲ總稱スニシテ分署所在地市町村ト別ニ區分ヲ要セサルモノハ大藏大臣ノ認可ヲ經テ分署所

在地市町村ニ準スルコトヲ得

一土地及間税ノ檢査員巡回日數一箇月ニ滿タサルモノハ月額三十分一ノ割合ヲ以テ其日數ニ應シ支給スヘシ

一土地ノ便利其他ノ狀況ニ依リ府縣知事大藏大臣ノ認可ヲ經テ適宜減額支給スルコトヲ得

一雇員ノ旅費ハ府縣知事適宜其支給額ヲ定メ大藏大臣ノ認可ヲ經ヘシ

○宿直及徹夜者食料支給方

明治二十四年四月農商務省訓令第十九號

大林區署

宿直及徹夜者食料支給方左ノ通相定メ本年四月一日ヨリ施行ス但小林區署派出所在勤員ニハ食料支給ノ限リニアラス

一　宿直ノ者ニハ一直ニ付官吏傭員ハ金七錢小使ハ金五錢ヲ支給ス

二　徹夜ノ者ニハ一夜ニ付官吏傭員ハ金拾錢五厘給仕小使ハ金七錢五厘支給ス

三　食料ハ毎一箇月分ヲ取纏メ翌月三日迄ニ支給シ休日ニ當ルトキハ繰下ケトス

○各種ノ試驗傳習其他ノ必要ニ由リ地方廳若クハ營業者ノ請求ニ應シ農商務省ノ技術官派遣ノトキハ其旅費及日當ヲ負擔セシム

明治二十四年四月農商務省告示第四號

當省所管ニ關スル事項ニ就キ各種ノ試驗傳習其他ノ必要ニ由リ地方廳若クハ營業者ノ請求ニ應シ當省ノ技術官ヲ派遣スルトキハ其官廳若クハ當業者ニ於テ該官相當ノ旅費及日當ヲ負擔スヘシ

○海軍造船學校生徒手當金規則

明治二十四年六月勅令第五十三號

朕茲ニ海軍造船工學校生徒手當金規則ヲ裁可ス

海軍造船工學校生徒手當金規則

第一條　海軍造船工學校生徒ニハ糧食ヲ給セス糧食被服其他日用物品ノ費用トシテ一日貳拾五錢ノ手當金ヲ給ス

第二條　傷痍疾病ニ依リ入院セシムルトキハ其當日ヨリ歸校ノ前日マテ一日貳錢ノ手當金ヲ給ス但入院中ハ海軍糧食條例ニ依リ糧食ヲ給スルモノトス

第三條　手當金ハ生徒ヲ命シタル日ヨリ技手見習ヲ命シタル前日マテ之ヲ給ス死亡若クハ生徒ヲ免シタルトキハ其當日マテ之ヲ給ス（明治二十四年七月勅令第百五十九號ヲ以テ本條中改正）

第四條　處刑留置收禁拘留逃亡若クハ遞傳護送中ノ者其他事故ヲ以テ在校セサル者ニハ手當金ヲ給セス

第五條　品行不正課業怠惰又ハ試驗成績不良ニ因リ生徒ヲ免シタル時ハ其日ヨリ三十日限リ身元保證人ヲシテ既ニ給與シタル手當金ヲ辨償セシム

第六條　手當金ハ毎月下旬ニ於テ之ヲ給ス

○在外國本邦郵便電信局長郵便局長以下局員月手當金給與額ヲ定ム

明治二十四年六月勅令第六十七號

朕在外國本邦郵便電信局長郵便局長以下局員月手當金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

在外國本邦郵便電信局長郵便局長以下局員月手當金ハ別表定ムル所ニ依ル其給與細則ハ遞信大臣之ヲ定ム

本令ハ明治二十四年七月一日ヨリ施行ス

（別表）

國名	官名	手當額
清國	局長	金五拾圓
	書記	金三拾圓
	書記補	金拾五圓
朝鮮國	局長	金貳拾五圓
	書記手	金拾五圓
	書記補	金拾圓

○在外國本邦郵便電信局長郵便局長以下局員月手當金給與細則

明治二十四年七月遞信省令第七號

明治二十四年勅令第六十七號在外國本邦郵便電信局長郵便局長以下局員月手當金給與細則左ノ通相定ム

在外國本邦郵便電信局長郵便局長以下局員月手當金給與細則

第一條　在外國本邦郵便電信局長郵便局長以下局員ノ月手當金ハ任地著翌日ヨリ歸朝又ハ任地替等ノ爲メ其地出發前日マテ之ヲ支給ス

第二條　任地ニ於テ他廳ヘ轉任セシ者ノ月手當金ハ事務引繼濟ノ當日迄其退官又ハ非職トナリシ者ノ月手當金ハ辭令接受ノ當日迄之ヲ支給ス但其退官又ハ非職者ニシテ特ニ事務引繼ヲ命シタルトキハ他廳ヘ轉任ノ例ニ依ル

第三條　歸省其他私事旅行中ノ日數ハ月手當金ヲ支給セス

第四條　轉官ノ爲メ月手當金ノ增減ハ總テ辭令接受ノ翌日ヨリ計算ス

第五條　在勤中死亡セシ者ノ其月分ノ手當金ハ全額ヲ支給ス

第六條　第一條乃至第四條ノ場合ニシテ一箇月未滿トナル月ノ手當金ハ總テ其月ノ日割ヲ以テ計算ス

第七條　月手當金ハ毎月末日支給スルモノトス但休暇日ニ當ル時ハ繰上ケトス

第五類　任免

○任免

○執達吏登用規則

明治二十三年八月
司法省令第二號

明治二十三年二月法律第六號裁判所構成法第九十五條及第九十九條ニ依リ執達吏登用規則左ノ通リ相定ム

執達吏登用規則

第一條　執達吏ニ任セラルヽニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一　年齡滿二十五歲以上ナルコト

第二　陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコト

第三　身體健全ナルコト

第四　家計ノ整理シタルコト

第五　品行方正ナルコト

第六　試驗ニ及第シタルコト

第二條　左ニ揭クル者ハ執達吏ニ任セラルヽコトヲ得ス

第一　重罪ヲ犯シタル者但國事犯ニシテ復權シタ者ハ此限ニ非ス

第二　定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三　身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免カレサル者

第四　懲戒ノ處分ニ由リ免職セラレタル者

第三條　執達吏ノ試驗ヲ受ケントスル者ハ少クトモ六箇月間區裁判所ニ於テ主トシテ執達吏ノ職務ヲ修習シ傍ラ書記ノ職務ヲ修習スルコトヲ要ス

職務ノ修習ヲ爲ス者ハ職務上ノ秘密ヲ漏洩スヘカラス

第四條　職務修習ヲ願フニハ願書ニ兵役ニ關ル證書及履歴書ヲ添付シ之ヲ控訴院長ニ差出シ其許可ヲ受クヘシ

第五條　職務修習ノ許可ヲ爲シタルトキハ控訴院長ハ修習者ノ屬スヘキ區裁判所ヲ指定スヘシ

區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ授業ヲ擔當スヘキ執達吏及裁判所書記ヲ選定シ職務ノ訓導ヲ爲サシムヘシ

第六條　控訴院長ハ修習者ノ行狀執達吏トナルニ不適當ナリト認ムルトキハ其修習ヲ止ムルコトヲ得

第七條　職務修習者試驗ヲ受ケントスルニハ第一條一乃乃至第五ノ諸件ヲ具備シタルコト及第二條ノ諸件ニ觸レサルコトヲ證明シ並修習ノ日數ヲ記入シタル願書ヲ區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ヲ經由シテ控訴院長ニ差出スヘシ

區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ前項ノ願書ニ意見ヲ付スヘシ

控訴院長ハ書類ヲ調査シ試驗ノ許否ヲ定ムヘシ

第八條　試驗ハ地方裁判所ニ於テ毎年一回之ヲ行フ

第九條　試驗委員長及試驗委員ハ地方裁判所ノ判事檢事ノ中ヨリ試驗擧行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第十條　控訴院長ハ試驗ヲ受クヘキ修習者ノ名簿ヲ試驗委員長ニ送付スヘシ

前項ノ送付アリタルトキハ試驗委員長ハ試驗期日ヲ定メ之ヲ修習者ニ告知スヘシ

第十一條　試驗ハ筆記口述ノ二樣トス

口述試驗ハ筆記試驗ニ及第シタル者ニ之ヲ行フ

第十二條　試驗ハ左ノ科目ニ就キ之ヲ行フ

第一　民事訴訟法及治罪法ノ中書類送達及執行ニ關ル規程

第二　執達吏ニ關ル諸規則

第三　算術(加減乘除分數比例)

第四　讀書筆寫

第十三條　筆記試驗問題ノ答案ハ裁判所ノ官吏監督シテ之ヲ作ラシム

試驗委員長ハ受驗者ノ申立アルトキハ區裁判所ニ於テ筆記試驗問題ノ答案ヲ作ラシムルコトヲ得

第十四條　受驗者ノ及第落第及及第者ノ優劣ハ筆記試驗口述試驗ノ成績ニ

對スル委員過半數ノ意見ニ從テ之ヲ決ス

第十五條　試驗ニ及第シタル者ニハ試驗委員長及試驗委員ノ連署シタル及第證書ヲ授與ス

第十六條　試驗ニ落第シタル者ハ更ニ三箇月以上修習ヲ爲スニ非サレハ再ヒ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第十七條　不正ノ方法ヲ以テ及第ヲ企テタル者ハ再ヒ試驗ヲ受クルコトヲ得ス其及第シタル者ハ及第ノ效ナキモノトス

第十八條　試驗委員ハ試驗ノ問題及成績ヲ記錄ニ記載スヘシ

第十九條　試驗委員長ハ及第者ノ氏名及其試驗成績ヲ控訴院長ニ報告スヘシ

第二十條　左ニ掲クル者ハ試驗ヲ要セス執達吏ニ任セラルヽコトヲ得

第一　官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校司法省舊法學校又ハ帝國大學ノ監督ヲ受ケタル舊私立法學校及文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

第二　裁判所書記ノ登用試驗ニ及第シタル者

第三　判任官以上ノ職ヲ現ニ奉シ又ハ曾テ奉シタル者

第四　陸軍下士ニシテ文官奉職ヲ請願スルコトヲ得ル者

第二十一條　第三條乃至第六條ノ規程ハ前條ニ掲ケタル者ニモ亦之ヲ適用ス

前條第四ニ該ル者ハ職務修習ノ願書ニ修習ヲ爲サントスル區裁判所ヲ記載シ陸軍大臣ヲ經由シテ司法大臣ニ差出スヘシ司法大臣ハ願書ヲ管轄控訴院長ニ送付スヘシ

第二十二條　試驗及第者及第二十條ニ掲ケタル者ニシテ職務修習ヲ終リタル者ノ任補ハ執達吏ノ缺員アルヲ待テ控訴院長之ヲ攝行ス

第二十三條　執達吏ニ任セラレタル者ハ任補ノ日ヨリ三十日內ニ保證金ヲ管轄地方裁判所ニ納ムヘシ若シ其期間內ニ保證金ヲ差出サヽルトキハ職務ヲ罷免ス

保證金ハ五百圓以下ニ於テ土地ノ情況ニ從ヒ控訴院長之ヲ定ム

保證金ハ相當ノ價格アル公債證書若ハ日本銀行株券ヲ以テ之ニ代ユルコトヲ得

第二十四條　執達吏保證金ヲ納メタルトキハ裁判所ハ官印ヲ交付ス執達吏ハ官印ノ交付ヲ得タル後ニ非サレハ職務ヲ行フコトヲ得ス

附則

第二十五條　本則實施ノ際ハ職務修習ヲ要セス試驗及任補ヲ行フコトヲ得

○郵便及電信局並ニ郵便爲替貯金局書記補試驗規則

明治二十三年八月遞信省令第十六號

明治二十三年七月勅令第百三十號ニ據リ郵便及電信局並ニ郵便爲替貯金局書記補試驗規則左ノ通之ヲ定ム

郵便及電信局並ニ郵便爲替貯金局書記補試驗規則

第一條　年齡滿十七歲以上四十五歲以下ニシテ一年以上郵便電信又ハ郵便爲替貯金ノ業務ニ從事シタル者ハ書記補ノ試驗ニ應スルコトヲ得

第二條　郵便電信局郵便局電信局並ニ郵便爲替貯金局ニ於テ書記補ノ任用ヲ要スル時ハ其局長ハ第一條ニ適合スル者ニ就キ別ニ定ムル試驗手續ニ依リ試驗ヲ執行シタル上其成績ヲ遞信大臣ヘ申出ツヘシ

遞信大臣ハ遞信省文官普通試驗委員ニ下附シテ之ヲ點査セシメ合格者中所要ノ人員ヲ採用スルモノトス

第三條　左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ハ試驗ヲ要セス直ニ書記補ニ任用スルコトヲ得

一本規則施行ノ前二年以上郵便電信局郵便局電信局又ハ郵便爲替貯金局ノ雇員トナリ現ニ其職ニ在ル者ニシテ遞信大臣ニ於テ事務ニ熟練シタリト認ムル者

陸軍下士文官採用細則ハ法令類編第一卷六百五十三丁ニ載ス

二遞信省規定ノ電氣通信技術員養成規則ニ依リ電氣通信技術ノ傳習ヲ卒業シ六箇月以上其業務ニ從事シタル者

○陸軍下士文官採用細則中追加改正

明治二十三年八月陸軍省令第二十五號

明治二十一年二月陸軍省令第二號陸軍下士文官採用細則中左ノ通追加改正ス

陸軍下士文官採用細則第一條第一書式中診斷書割註ノ下ニ「及伎倆證明書」ノ六字ヲ加ヘ同第二第三書式中精勤證書ヲ「伎倆證明」書ニ改ム

○鐵道驛長任用ノ件

明治二十三年九月勅令第二百號

朕鐵道驛長任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鐵道驛長ハ鐵道廳長官別ニ試驗規則ヲ定メ之ヲ採用スルコトヲ得

本令發布以前ヨリ驛長ノ職ニ就キ現ニ其事務ヲ執ルモノハ試驗ヲ要セス直ニ驛長ニ採用スルコトヲ得

前二項ニ依リ採用セラレタルモノハ普通試驗ヲ經ルニ非サレハ他ノ判任官ニ轉スルコトヲ得ス

○府縣參事官典獄特別任用令

明治二十三年十月勅令第二百廿七號

朕府縣參事官及典獄特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣參事官典獄特別任用

第一條　府縣參事官並典獄ハ五箇年以上官務ニ從事シ判任官三等以上ノ現職ニ在ル者ニ限リ當分ノ內試驗ヲ要セス高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條　前條ニ依リ高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用シタル府縣參事官並典獄ハ高等試驗ヲ經ルニ非レハ各他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

○裁判官撿察官及裁判所書記ノ官名及裁判官休職ニ係ル件

明治二十三年十月勅令第二百五十四號

朕裁判官撿察官裁判所書記ノ官名裁判官休職ニ係ル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　裁判所構成法實施ノ際在職ノ裁判官撿察官及裁判所書記ハ同法ニ定メタル判事撿事及裁判所書記トス

第二條　裁判所構成法實施ノ際在職ノ裁判官ニシテ同法ニ依リ更ニ補職セラレサル者ハ休職トス

第三條　判事十五年以上奉職ノ者裁判所構成法實施後疾病其他ノ事故ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルニ至リ休職ヲ願出タルトキハ司法大臣ハ休職ヲ命スルコトヲ得但撿事ヨリ判事ニ轉任シタル者ハ撿事ノ勤務年數ヲ通算ス

第四條　休職中ハ現俸三分ノ一ヲ支給ス

第五條　休職判事ノ俸給支給ノ方法ニ付テハ一般非職官吏ノ例ニ依ル

○技術官休職ニ關スル件

明治二十三年十二月勅令第二百八十六號

朕技術官ノ休職ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　技術官ノ休職ハ一年ヲ一期トス期滿レハ其官ヲ免ス

第二條　技術官ノ休職ニ關シ特別ノ規定ナキモノハ總テ官吏非職ノ例ニ依ル

第三條　本令ハ明治二十四年二月一日ヨリ施行ス現ニ休職中ノ者ノ休職期限モ亦同日ヨリ起算ス

○海軍高等武官任用條例中追加ノ件

明治二十四年一月勅令第二號

朕海軍高等武官任用條例中追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍高等武官任用條例中左ノ通追加ス

第一條第四條中「少尉候補生」ノ下ニ「少機關士候補生」ノ七字ヲ加フ

海軍高等武官任用條例ハ法令類編第一卷六百五十七丁ニ載ス

第十六條　明治二十八年マテハ少尉候補生ヲ少機關士ニ任用スルヿヲ得

○官吏非職條例第五條削除 明治二十四年三月 勅令第二十三號

官吏非職條例第一卷六百七十九丁ニ載ス

朕官吏非職條例中削除ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム本令ハ明治二十四年四月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

官吏非職條例第五條ヲ削除ス但明治二十四年四月一日現在ノ非職員ニハ其非職年限內仍ホ現俸四分ノ一ヲ支給ス

○警察署長ニ補スベキ警視特別任用ノ件 明治二十四年 四月勅令第三十七號

朕警察署長ニ補スヘキ警視特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　警察署長ニ補スヘキ警視ハ五箇年以上警部ニ奉職シ判任官三等以上ノ現職ニ在ル者ニ限リ當分ノ內試驗ヲ要セス高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條　前條ニ依リ任用シタル警視ハ高等試驗ヲ經ルニ非レハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

○判事檢事登用試驗規則 明治二十四年五月 司法省令第三號

判事檢事登用試驗規則左ノ通リ相定ム

第一章　試驗委員

第一條　判事檢事登用試驗委員ハ委員長一名委員數名ヲ以テ之ヲ組織ス

第二條　判事檢事登用試驗委員長及委員ハ大審院控訴院ノ判事檢事司法省高等官ノ中ヨリ試驗擧行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第三條　判事檢事登用試驗委員長ハ委員ヲ監督シ試驗ニ關スル一切ノ事務ヲ總理ス

第四條　試驗委員附屬ノ書記ハ司法屬又ハ裁判所書記ノ中ヨリ試驗擧行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第二章　受驗資格

第五條　判事檢事登用試驗ヲ受クルコトヲ得ル者ハ成年以上ノ男子ニシテ左ノ各項ノ一ニ該ル者ニ限ル

一　第一及第三高等中學ニ於テ法科ヲ卒業シタル者

二　文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學ヲ敎授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

三　外國ノ大學校又ハ之ト同等ナル學校ニ於テ法律學ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

第六條　裁判所構成法第六十六條ニ該ル者ハ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第三章　第一回試驗

第七條　第一回試驗ハ司法省ニ於テ之ヲ行フ試驗ノ期日ハ試驗委員長之ヲ定メ官報ヲ以テ公告ス

第八條　試驗志願者ハ其志願書ニ左ノ證書ヲ添ヘ之ヲ試驗委員長ニ差出スヘシ

一　履歷書

二　身分年齡及兵役ニ關スル證明書

三　第五條ニ定メタル要件ノ證明書

第九條　試驗ハ受驗者ノ學識ヲ試驗スルヲ以テ目的トシ筆記口述ノ二樣トス

第十條　筆記試驗ハ民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ各法ニ就キ之ヲ施行ス

第十一條　試驗委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試驗ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ口述試驗ノ爲メ志願者ヲ呼出スヘシ

第十二條　口述試驗ハ民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中少クトモ三科目ニ就キ之ヲ施行ス

第十三條　受驗者ノ及第落第及及第者ノ優劣ハ筆記試驗口述試驗ノ成績ニ對スル委員過半數ノ意見ニ從テ之ヲ決ス

及第落第ニ付テノ意見數相半スルトキハ落第ト看做スヘシ

第十四條　志願者口述試驗ニ闕席シタルトキハ試驗ハ成立タサルモノトス

第十五條　試驗委員長ハ及第者ノ氏名及其試驗ノ成績ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

第十六條　帝國大學法律科卒業生ニシテ司法官ノ任用ヲ望ム者ハ第八條ノ規程ヲ準用シ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第四章　實地修習

第十七條　試補ハ區裁判所及地方裁判所並其檢事局ニ於テ一名若ハ數名ノ判事又ハ檢事ニ附屬シテ事務ヲ修習スヘシ

第十八條　修習事務直接ノ指揮監督ハ地方裁判所長之ヲ爲ス檢事ノ事務ヲ修習スルトキハ檢事正之ヲ爲ス

裁判長若ハ檢事正ハ毎年末ニ試補ノ職務上及職務外ノ行狀並執務ニ關ル成績ノ證明書ヲ作リ控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第十九條　試補ハ修習目錄ヲ作リ其取扱ヒタル事件ヲ記載スヘシ

此目錄ハ毎月直接指揮監督者ニ差出シ檢閲ヲ受クヘシ

第二十條　試補ノ疾病又ハ兵役履行ノ爲メ修習ヲ缺キタル日數一箇年間二

箇月以内ハ修習日數ニ算入ス

賜暇其他ノ原因ニ由リ修習ヲ缺キタル日數一箇年間一箇月以内亦同シ

第一項第二項ノ場合併起スルトキハ通計シテ二箇月以内ニ非サレハ算入スルコトヲ得ス

第二十一條　試補ノ直接指揮監督者ハ試補職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若ハ職務外ニ於テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ之ヲ諭告スヘシ此場合ニ於テハ指揮監督者ハ諭告ヲ爲シタルコトヲ試補ノ履歷ニ記入スヘシ

第二十二條　試補職務上若ハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進歩不十分ニシテ第二回試驗ニ及第ノ見込ナキトキハ直接指揮監督者ハ控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

司法大臣前ノ報告ヲ受ケタルトキハ試補ヲ免スルコトアルヘシ

第五章　第二回試驗

第二十三條　第二回試驗ハ控訴院ニ於テ之ヲ行フ

試驗ノ場所ハ司法大臣之ヲ定メ試驗ノ期日ハ試驗委員長之ヲ定ム

第二十四條　試補第二回試驗ヲ受クルニハ直接指揮監督者ヲ經由シテ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

志願書ニハ修習目錄ト陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコトヲ證明スル書面トヲ添フヘシ

第二十五條　司法大臣ハ第二回試驗ヲ受クヘキ試補ノ氏名ヲ試驗委員長ニ通知シ試驗ヲ行ハシム

第二十六條　第二回試驗ハ受驗者ノ實務ニ習熟シタルヤ否ヤヲ試驗スルヲ以テ主タル目的トシ筆記口述ノ二樣トス

第二十七條　試驗委員ハ試補ニ筆記試驗ノ爲メ二件以上ノ訴訟記錄ヲ付與スヘシ

第二十八條　受驗者ハ付與セラレタル訴訟記錄ニ就キ事實及理由ヲ詳示シタル判決案ヲ答案トシテ差出スヘシ

答案ハ二十日ノ期間内ニ之ヲ差出スヘシ若シ此期間内ニ答案ヲ差出サヽルトキハ試驗ハ成立タサルモノトス

第二十九條　口述試驗ハ民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中少クトモ三科目ニ就キ之ヲ施行ス

又訴訟記錄ニ就キ問ヲ發シ之ニ答ヘシムヘシ其記錄ハ試驗期日ノ三日前ニ之ヲ付與ス

第三十條　左ノ場合ニ於テハ司法大臣ハ試驗委員長ノ報告ニ因リ試補ヲ免ス

一　第二回試驗ニ及第セサルトキ

二　第二回試驗ノ成立タサルトキ

第三十一條　前條第二ノ場合ニ於テ試補已ムヲ得サル事故アリシコトヲ證明シ試驗委員之ヲ正當ト認メタルトキハ其旨ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

司法大臣前項ノ報告ヲ受ケタルトキハ其試補ニ一回ヲ限リ次期ノ試驗マテ引續キ修習ヲ爲サシムルコトアルヘシ

第三十二條　第一回試驗ニ關ル第十一條及第十三條乃至第十五ノ規程ハ第二回試驗ニモ亦之ヲ適用ス

○裁判所書記登用試驗規則

明治二十四年五月司法省令第四號

裁判所書記登用試驗規則左ノ通相定ム

第一章　試驗

第一條　裁判所書記登用試驗ハ文官試驗ニ關ル勅令ノ外本則ノ規程ニ從フ

第二條　試驗ハ各控訴院ニ於テ之ヲ行フ

第三條　試驗委員ハ控訴院判事檢事書記長又ハ其管內地方裁判所ノ判事檢事ノ中ヨリ司法大臣之ヲ命ス

試驗委員長ハ委員中官等最モ高キ者ヲ以テ之ニ充ツ

第四條　試驗ハ作文筆記書取算術簿記ノ外民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中ニ就キ之ヲ施行ス

第五條　試驗委員長ハ受驗者ノ申立アルトキハ地方裁判所ニ於テ筆記試驗ヲ受ケシムルコトヲ得此場合ニ於テ試驗問題ノ答案ハ其裁判所ノ官吏監督シテ之ヲ作ラシム

第六條　試驗委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試驗ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ口述試驗ノ爲メ受驗者ヲ呼出スヘシ

第七條　受驗者口述試驗ニ闕席シタルトキハ試驗ノ成立タサルモノトス

第八條　試驗ニ及第シタル者ニハ試驗委員長及試驗委員ノ連書シタル及第證書ヲ授與ス

第九條　試驗委員長ハ及第者ノ氏名其試驗ノ成績ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

第二章　實地修習

第十條　試驗ニ及第シタル者ハ裁判所書記見習ヲ命セラルヽコトヲ得

裁判所書記見習ハ區裁判所及地方裁判所並其檢事局ニ於テ實地修習ヲ爲スヘシ

第十一條　實地修習ノ順序ハ控訴院長檢事長協議シテ之ヲ定ム

第十二條　實地修習ノ指揮監督ハ地方裁判所長若ハ檢事正又ハ區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事若ハ檢事之ヲ爲ス

指揮監督者ハ修習ノ事務ヲ直接ニ指示スヘキ官吏ヲ定ムヘシ

第十三條　裁判所書記見習職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若ハ職務外ニ於

テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ指揮監督者之ヲ諭告スヘシ

第十四條　裁判所書記見習職務上若ハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進歩不十分ナリト認ムルトキハ指揮監督者ハ控訴院長檢事長ニ之ヲ報告スヘシ

第十五條　指揮監督者ハ裁判所書記見習其指揮監督ニ係ル修習ヲ終リタル修習ニ關ル證明書ヲ作リ修習ノ成績並職務上及職務外ノ行狀ヲ記載シテ之ヲ控訴院長檢事長ニ差出スヘシ

若シ行狀ニ就キ諭告シタルコトアルトキハ其旨ヲ證明書ニ附記スヘシ

控訴院長檢事長ハ證明書ニ意見ヲ附シ之ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第十六條　本章ノ規程ハ試驗ヲ經スシテ裁判所書記見習トナリタル者ノ實地修習ニモ亦之ヲ適用ス

○北海道集治監分監長及北海道廳典獄特別任用ノ件

明治二十四年七月
勅令第百十三號

朕北海道集治監分監長及北海道典獄特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　北海道集治監分監長北海道典獄ハ五箇年以上官務ニ從事シ現ニ判任官六級以上ノ俸給ヲ受クル者ニ限リ當分ノ內試驗ヲ要セス文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用シタル北海道集治監分監長北海道廳典獄ハ高等試驗ヲ經ルニ非サレハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

附　則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

第六類　服務　懲戒　商業禁制　乘馬飼養

○服務

○稅關監吏補賞罰規則（明治二十三年十月勅令第二百十八號）

朕稅關監吏補賞罰規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

稅關監吏補賞罰規則

第一條　監吏補其職務上勤勞アル者ハ事ノ大小難易ニ由リ每事五圓以下ノ賞ヲ與フ

第二條　監吏補其職務上怠慢過失アル者ハ情狀ニ由リ左ノ懲罰ニ處ス

第一　譴責

第二　罰俸

第三　免職

第三條　罰俸ハ月俸額百分ノ一以上一箇月以下トス

第四條　罰俸ハ每月俸給ヲ以テ納付セシム但月俸額三分ノ一ヲ超ルコトヲ得ス

第五條　罰俸ニ處セラレタル者罰俸完納前退官免職又ハ死去スルトキハ之ヲ追徵セス

第六條　大藏大臣ハ本規則ノ執行ヲ稅關長ニ委任スルコトヲ得

○判事懲戒法　明治二十三年八月法律第六十八號

朕判事懲戒法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

判事懲戒法

第一章　總則

第一條　凡ソ判事ヲ懲戒スルハ左ノ場合ニ於テ懲戒裁判所ノ裁判ヲ以テスヘシ

第一　職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ

第二　官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ

第二章　懲罰

第二條　懲罰ハ左ノ如シ

第一　譴責

第二　減俸

第三　轉所

第四　停職

第五　免職

第三條　前條何レノ懲罰ヲ適用スヘキヤ否ハ所犯ノ輕重ニ從ヒ懲戒裁判所之ヲ定ムヘシ

懲戒裁判所ハ懲罰ノ適用ヲ定ムルニ當リ平生ノ行狀ヲ斟酌スルコトヲ得

第四條　減俸ハ一月以上一年以下年俸月割額ノ三分ノ一以內ヲ減ス

第五條　轉所ハ他ノ裁判所若ハ他ノ職ニ轉セシム但シ情狀ニ因リ減俸ヲ併セ科スルコトヲ得

第六條　停職ハ三月以上一年以下職務ノ執行ヲ停止ス

停職中ハ俸給ヲ給セス

第七條　免職ノ言渡ヲ受ケタル者ハ現任ノ官ヲ失ヒ及恩給ヲ受クルノ權ヲ失フ

第三章　懲戒裁判所

第八條　懲戒裁判所ハ各控訴院及大審院ニ之ヲ置ク

第九條　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ控訴院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事五人ヲ以テ組立テ院長ヲ以テ長トス

大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ大審院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事七人ヲ以テ組立テ院長ヲ以テ長トス

第十條　控訴院長及大審院長ハ毎年部長ト協議シ前以テ懲戒裁判所ノ判事ヲ定メ並ニ裁判所長判事差支アルトキノ代理順序ヲ定ム

第十一條　懲戒裁判所ノ判事ノ忌避回避ニ付テハ治罪法ノ規程ヲ準用ス

第十二條　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ檢事ノ職務ハ檢事長之ヲ行ヒ大審

院ニ於ケル懲戒裁判所ノ檢事ノ職務ハ檢事總長之ヲ行フ

第十三條　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命シ大審院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命ス

第十四條　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ院長及部長ヲ除ク外其ノ院ノ判事及其ノ管轄區域內ノ總テノ下級裁判所ノ判事ニ對スル懲戒事件ヲ管轄ス

第十五條　大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ左ノ事件ヲ管轄ス

第一　第一審ニシテ終審トシテ大審院ノ判事、控訴院長及控訴院部長ニ對スル懲戒事件

第二　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ裁判ニ對スル抗告及控訴

第十六條　懲戒裁判所ノ管轄ハ所犯ノ地ニ拘ラス裁判手續開始ノトキ判事ノ奉職スル裁判所ニ依テ定マルモノトス

第四章　裁判手續

第十七條　懲戒裁判所ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ懲戒裁判ヲ開始スヘキヤ否ヲ決定ス但シ職權ヲ以テスル場合ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽クヘシ

第十八條　檢事ハ裁判手續ノ開始ヲ拒ミタル懲戒裁判所ノ決定ニ對シテハ七日ノ期間內ニ抗告裁判所ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第十九條　抗告裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後抗告ヲ裁判ス若シ抗告ヲ正當ナリト認メタルトキハ裁判手續開始ノ決定ヲ爲シ管轄懲戒裁判所ヲシテ其ノ後ノ手續ヲ爲サシムヘシ

第二十條　開始決定ニハ懲戒スヘキ所爲及證據ヲ開示スヘシ

第二十一條　開始決定ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十二條　懲戒裁判所ニ於テ下調ヲ必要ナリト決定スルトキハ懲戒裁判所長ハ懲戒裁判ヲ開始シタル院ノ判事若ハ管轄區域內ノ地方裁判所ノ判事ニ下調ヲ命スヘシ

第二十三條　下調ノ命ヲ受ケタル判事ハ必要ナル證據ヲ集取スヘシ

受命判事ハ被告ヲ呼出シテ事實ヲ陳述セシムルコトヲ得

被告ハ代理人ヲシテ代理セシムルコトヲ得

證人ハ治罪法ノ規程ニ從ヒ之ヲ訊問スヘシ

第二十四條　受命判事ハ證人訊問其ノ他證據集取ヲ他ノ裁判所ノ判事ニ囑託スルコトヲ得

第二十五條　受命判事ハ下調結了ノ後調書及一切ノ證據ヲ懲戒裁判所長ニ差出シ裁判所長ハ二十四時內ニ檢事ニ之ヲ送付スヘシ

第二十六條　檢事ハ三日內ニ意見ヲ付シ記錄ヲ懲戒裁判所長ニ還付スヘシ

第二十七條　懲戒裁判所ハ下調ヲ十分ナリト思料スルトキハ口頭辯論ヲ爲

スノ決定ヲ爲シ又ハ免訴ノ判決ヲ爲スヘシ

免訴ノ理由ナキモ現時裁判ニ著手スルコトヲ得サルトキハ訴追停止ノ決定ヲ爲スヘシ

第二十八條　前條ノ裁判ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十九條　懲戒裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ

第三十條　辯論ハ之ヲ公行セス

第三十一條　口頭辯論ハ裁判所書記開始決定ヲ朗讀スルヲ以テ始マルモノトス

裁判長ハ先ツ被告ヲ審訊シ次テ證據調ヲ爲シ檢事及被告ヲシテ證據ノ結果ニ付辯論ヲ爲サシメ被告ニ最終ノ發言ヲ許スヘシ

第三十二條　懲戒裁判所ハ被告若ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ更ニ證據ヲ提出セシムルコトヲ適當ナリトスルトキハ之カ爲必要ナル命令ヲ發シ且辯論ヲ他日ニ延期スルコトヲ得

第三十三條　被告ハ他人ヲシテ辯護セシメ又ハ代理人ヲ用ヰルコトヲ得

第三十四條　懲戒裁判所ハ事件ノ辯論既ニ十分ナリトスルトキハ之ヲ終結シ評議判決スヘシ

第三十五條　判決ハ即時ニ之ヲ言渡ス若シ即時ニ之ヲ言渡スコト能ハサルトキハ七日內ニ判決ヲ被告及檢事ニ送達スヘシ

第三十六條　被告又ハ代理人辯論期日ニ出頭セスト雖判決ヲ言渡スコトヲ得

第三十七條　評議及言渡ニ關シテハ裁判所構成法ノ規程ニ從フ

ニ關シテハ治罪法ノ規程ニ從ヒ證據ノ判斷

第三十八條　被告及檢事ハ十四日ノ期間內ニ控訴ノ申立ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ期間ハ判決言渡ヨリ起算ス若シ被告出頭セサルトキハ判決ノ送達アリタルヨリ起算ス

第三十九條　控訴ノ申立ハ判決ヲ受ケタル懲戒裁判所ニ之ヲ爲スヘシ

控訴狀ハ控訴ノ申立ヲ爲シタルヨリ十四日ノ期間內ニ之ヲ差出スヘシ

第四十條　懲戒裁判所ハ控訴ノ申立及控訴狀ノ謄本ヲ對手人ニ送達スヘシ

對手人ハ送達ヲ受ケタルヨリ十四日ノ期間內ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

第四十一條　懲戒裁判所ハ前條ノ期間經過シタル後其ノ書類ヲ控訴裁判所ニ送付スヘシ

控訴裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ

第四十二條　控訴裁判所ハ第一審ニ於テ申出テサル證據ヲ提出シタトルキハ之ヲ取調フヘシ若シ第一審ニ於テ訊問シタル證人ノ再訊問ヲ申立テタルトキハ其ノ重要ノ點ニ於テ陳述ヲ異ニシ又ハ新ナル重要ノ事實ヲ證言セントノ推測十分ナルトキニ限リ之ヲ許ス

職權ヲ以テスル訊問ハ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第四十三條　第二審ニ於ケル裁判手續ハ第三十條乃至第三十七條ノ規程ヲ適用ス

第四十四條　控訴ヲ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却シ其ノ費用ヲ控訴人ニ負擔セシムベシ

控訴ヲ理由アリトスルトキハ第一審判決言渡ヲ取消シ控訴裁判所更ニ判決ヲ爲シ且其ノ費用ニ付裁判ヲ爲スベシ

控訴完結ノ後其ノ記錄ハ第二審ニ於テ爲シタル判決ノ認證アル謄本ト共ニ原裁判所ニ之ヲ還付スベシ

第四十五條　調書ノ調製期間ノ計算及書類ノ送達ニ付テハ治罪法ノ規程ニ從フ

懲戒裁判手續ノ費用ハ刑事裁判費用ニ關ル規程ニ從フ

第四十六條　懲戒裁判所ノ裁判ハ確定ノ後ニ非サレバ之ヲ執行スルコトヲ得ス

第四十七條　懲戒裁判確定シタルトキハ懲戒裁判所長ハ司法大臣ニ事件ノ情況ヲ報告シ且判決ノ謄本ヲ差出スベシ

第四十八條　懲戒裁判所減俸轉所若ハ停職ノ裁判ヲ言渡シタルトキハ司法大臣其ノ執行ノ手續ヲ爲ス

第五章　職務停止

第四十九條　判事ハ左ノ場合ニ於テハ當然職務ヲ停止セラルルモノトス

第一　刑事裁判手續ニ於テ勾留セラレタルトキ

第二　刑事裁判ニ於テ官職ノ喪失ニ該ル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第三　懲戒裁判ニ依テ免職ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第五十條　刑事裁判ニ依テ拘留ノ刑ノ確定裁判ヲ受ケタルトキハ其ノ刑期ノ終ルマテ當然職務ヲ停止セラルルモノトス

第五十一條　懲戒裁判所ハ懲戒事件ノ轉所停職若ハ免職ニ該當スルモノト思料スルトキハ何時ニテモ職權ヲ以テ又ハ檢事ノ申立ニ因リ懲戒裁判手續結了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得但シ職權ヲ以テ決定ヲ爲ストキハ檢事ノ意見ヲ聽クベシ

刑事裁判手續中何レノ場合ニ於テモ懲戒裁判所ハ其ノ手續結了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得

第五十二條　懲戒裁判所ノ決定ニ因リ又ハ當然職務ヲ停止セラレタル後其ノ判事ノ爲シタル職務上ノ行爲ハ無効トス

第五十三條　被告ハ職務停止ノ決定ニ對シ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第六章　懲戒裁判手續

第五十四條　刑事裁判手續中ハ同事件ニ付被告ニ對シ懲戒裁判手續ヲ開始

スルコトヲ得ス

懲戒裁判所ニ於テ判決ノ言渡前同事件ニ付被告ニ對シ刑事訴追ノ始マリタルトキハ其ノ事件ノ判決ヲ終ルマテ懲戒裁判手續ヲ停止スヘシ

第五十五條　刑事裁判ニ依テ法律ニ觸レサルニ因リ免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタルトキト雖同一ノ所爲ニ付懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スルヲ妨ケス

刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ヲ起ササル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキハ懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スルコトヲ得

第七章　補則

第五十六條　懲戒スヘキ所爲ハ本法實施前ニ關ルモノト雖本法ニ從ヒ之ヲ訴追ス

第五十七條　此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行ス

○乘馬飼養

○乘馬飼養令廢止

明治二十四年七月勅令第百六十一號

朕茲ニ乘馬飼養令廢止ノ件ヲ裁可ス

○陸軍乘馬飼養條例第一條第二條改正削除

明治二十四年六月勅令第六十三號

朕陸軍乘馬飼養條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍乘馬飼養條例中左ノ通改正ス

第一條

三　副官（大隊區警備隊區司令部副官及警備隊副官ヲ除ク）タル尉官

五　在職騎兵砲兵（要塞砲兵隊及警備隊砲兵隊附ヲ除ク）輜重兵科尉官

七　削除

八　工兵隊附尉官及教導團工兵生徒隊長

九　削除

十　獸醫長

第二條

三　參謀佐官各兵監タル佐官歩兵砲兵聯隊長歩兵騎兵砲兵（要塞砲兵ヲ除ク）工兵輜重兵大隊長騎兵隊（屯田騎兵隊ヲ除ク）附尉官乘馬學校長砲兵射的學校長及乘馬學校教官タル佐尉官

第七類　公文　官報　伺請訓

○公文

○省令廳令府縣令及警察令ニ關スル罰則ノ件

明治廿三年九月
勅令第二百八號

朕省令廳令府縣令及警察令ニ關スル罰則ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　各省大臣ハ法律ヲ以テ特ニ規定シタル場合ヲ除クノ外其發スル所ノ省令ニ二十五圓以内ノ罰金若ハ二十五日以下ノ禁錮ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

第二條　地方長官及警視總監ハ其ノ發スル所ノ命令ニ十圓以内ノ罰金若ハ拘留ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

○法例

明治廿三年十月
法律第九十七號

朕法例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

法例

第一條　法律ハ公布アリタル日ヨリ滿二十日ノ後ハ之ヲ遵守ス可キモノト

ス但法律ニ特別ノ規定アルモノハ此限ニ在ラズ

第二條　法律ハ既往ニ遡ル効力ヲ有セズ

第三條　人ノ身分及ヒ能力ハ其本國法ニ從フ

親屬ノ關係及ヒ其關係ヨリ生ズル權利義務ニ付テモ亦同シ

第四條　動產不動產ハ其所在地ノ法律ニ從フ

然レドモ相續及ヒ遺贈ニ付テハ被相續人及ヒ遺贈者ノ本國法ニ從フ

第五條　外國ニ於テ爲シタル合意ニ付テハ當事者ノ明示又ハ默示ノ意思ニ從ヒテ何レノ國ノ法律ヲ適用ス可キヤヲ定ム

當事者ノ意思分明ナラサル場合ニ於テハ同國人ナルトキハ其本國法ヲ適用シ又同國人ニ非サルトキハ事實上合意ニ最大ノ關係ヲ有スル地ノ法律ヲ適用ス

第六條　外國人カ日本ニ於テ日本人ト合意ヲ爲ストキハ外國人ノ能力ニ付テハ其本國法ト日本法トノ中ニテ合意ノ成立ニ最モ有益ナル法律ヲ適用ス

第七條　不當ノ利得、不正ノ損害及ヒ法律上ノ管理ハ其原因ノ生シタル地ノ法律ニ從フ

第八條　本國法ヲ適用ス可キ諸般ノ場合ニ於テ何レノ國民分限ヲモ有セサル者又ハ地方ニ依リ法律ヲ異ニスル國ノ人民ハ其住所ノ法律ニ從フ若シ

住所知レサルトキハ其居所ノ法律ニ從フ

日本ト外國人トノ分限ヲ有スル者ハ日本法律ニ從ヒ又二箇以上ノ外國國民分限ヲ有スル者ハ最後ニ之ヲ取得シタル國ノ法律ニ從フ

第九條　公正證書及ヒ私署證書ノ方式ハ之ヲ作ル國ノ法律ニ從フ但一人又ハ同國人ナル數人ノ作ル私署證書ニ付テハ其本國法ニ從フコトヲ得

第十條　要式ノ合意又ハ行爲ト雖モ之ヲ爲ス國ノ方式ニ從フトキハ方式上有效トス但故意ヲ以テ日本法律ヲ脫シタルトキハ此限ニ在ラス

第十一條　外國ニ於テ其國ノ方式ニ依リテ作リタル證書ハ不動產物權ヲ移轉スル行爲ニ係ルトキハ其不動產所在地ノ地方裁判所長又他ノ行爲ニ係ルトキハ當事者ノ住所又ハ居所ノ地方裁判所長其證書ノ適法ナルコトヲ檢認シタル上ニ非サレハ日本ニ於テ其效用ヲ致サシムルコトヲ得ス

第十二條　第三者ノ利益ノ爲メニ設定スル公示ノ方式ハ不動產ニ係ルトキハ其所在地ノ法律他ノ場合ニ於テハ其原因ノ生シタル國ノ法律ニ從フ

第十三條　訴訟手續ハ其訴訟ヲ爲ス國ノ法律ニ從フ

裁判及ヒ合意ノ執行方法ハ其執行ヲ爲ス國ノ法律ニ從フ

第十四條　刑罰法其他公法ノ事項ニ關シ及ヒ公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ關スルトキハ行爲ノ地、當事者ノ國民分限及ヒ財產ノ性質ノ如何ヲ問ハス日本法律ヲ適用ス

第十五條　公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ關スル法律ニ牴觸シ又ハ其適用ヲ免カレントスル合意又ハ行爲ハ不成立トス

第十六條　身分又ハ能力ヲ規定スル法律ヲ免カルル合意又ハ行爲ハ無效トス

第十七條　判事ハ法律ニ不明、不備又ハ欠缺アルヲ口實トシテ裁判ヲ爲スヲ拒絶スルコトヲ得ス

○司法事務ニ屬スル廳府縣令發布ノトキ報告方

明治二十四年五月
司法省訓令第二號

警視廳　北海道廳　府縣

廳府縣ニ於テ發布スル廳府縣令ハ其司法事務ニ關係スルモノニ限リ發布ノ都度當省ヘ報告シ且ツ其管内ニ在ル地方裁判所區裁判所及ヒ其地ヲ管轄スル控訴院ヘ報告スヘシ

但十五年四月司法省丙第十五號達ハ廢止ス

第八類　建白　請願

○請願

○訴願法

明治二十三年十月
法律第百五號

朕訴願法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

訴願法

第一條　訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ掲クル事件ニ付之ヲ提起スルコトヲ得

一　租稅及手數料ノ賦課ニ關スル事件
二　租稅滯納處分ニ關スル事件
三　營業免許拒否又ハ取消ニ關スル事件
四　水利及土木ニ關スル事件
五　土地ノ官民有區分ニ關スル事件
六　地方警察ニ關スル事件
其他法律勅令ニ於テ特ニ訴願ヲ許シタル事件

第二條　訴願セントスル者ハ處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シ直接上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ

訴願ノ裁決ヲ受ケタル後更ニ上級行政廳ニ訴願スルトキハ其裁決ヲ爲シ

タル行政廳ヲ經由スヘシ

國ノ行政ニ付此法律ニ依リ郡參事會又ハ市參事會ノ處分若クハ裁決ニ對シテ訴願セントスル者ハ其處分若クハ裁決ヲ爲シタル郡參事會又ハ市參事會ヲ經由シテ府縣參事會ニ之ヲ提起スヘシ

第三條　各省大臣ノ處分ニ對シ訴願セントスル者ハ其省ニ之ヲ提起スヘシ

第四條　裁判所ノ裁判各省ノ裁決及第二條第三項府縣參事會ノ裁決ヲ經タルモノハ其事件ニ付更ニ訴願スルコトヲ得ス

第五條　訴願ハ文書ヲ以テ之ヲ提起スヘシ

訴願書ノ侮辱誹毀ニ涉ルモノハ之ヲ受理セス

第六條　訴願書ハ其不服ノ要點理由要求及訴願人ノ身分職業住所年齡ヲ記載シ之ニ署名捺印スヘシ

訴願書ニハ證據書類ヲ添ヘ竝下級行政廳ノ裁決ヲ經タルモノハ其裁決書ヲ添フヘシ

第七條　多數ノ人員共同シテ訴願セントスルトキハ其訴願書ニ各訴願人ノ身分職業住所年齡ヲ記載シ署名捺印シ其中ヨリ三名以下ノ總代人ヲ選ヒ之ニ委任シ總代委任ノ正當ナルコトヲ證明スヘシ

法律ニ依リ法人ト認メラレタル者ハ其名ヲ以テ訴願ヲ提起スルコトヲ得

第八條　行政處分ヲ受ケタル後六十日ヲ經過シタルトキハ其處分ニ對シ訴願スルコトヲ得ス

行政廳ノ裁決ヲ經タル訴願ニシテ其裁決ヲ受ケタル後三十日ヲ經過シタルモノハ更ニ上級行政廳ニ訴願スルコトヲ得ス

行政廳ニ於テ宥恕スヘキ事由アリト認ムルトキハ期限經過後ニ於テモ仍之ヲ受理スルコトヲ得

第九條　法律勅令ニ依リ訴願ヲ提起スヘカラサルモノナルカ又ハ適法ノ手續ニ違背スルモノナルトキハ之ヲ却下ス

其訴願書ノ方式ヲ缺クニ止マルモノハ期限ヲ指定シテ還付スヘシ

第十條　訴願書ハ郵便ヲ以テ之ヲ差出スコトヲ得

郵便遞送ノ日數ハ第八條ノ訴願期限內ニ之ヲ算入セス

第十一條　第二條第一項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ十日以內ニ辯明書及必要文書ヲ添ヘ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ

第二條第二項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ三日以內ニ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ

第二條第三項ノ場合ニ於テ訴願書ヲ發送スルトキ亦前二項ノ例ニ依ルヘシ

第十二條　訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外行政處分ノ執行

ヲ停止セス但行政廳ハ其職權ニ依リ又ハ訴願人ノ願ニ依リ必要ナリト認ムルトキハ其執行ヲ停止スルコトヲ得

第十三條　訴願ハ口頭審問ヲ爲サス其文書ニ就キ之ヲ裁決ス但行政廳ニ於テ必要ナリト認ムルトキハ口頭審問ヲ爲スコトヲ得

第十四條　訴願ノ裁決ハ文書ヲ以テ之ヲ爲シ其理由ヲ付スヘシ訴願ヲ却下スルトキ亦同シ

第十五條　訴願ノ裁決書ハ其處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シテ之ヲ訴願人ニ交付スヘシ訴願書ヲ却下スルトキ亦同シ

第十六條　上級行政廳ニ於テ爲シタル裁決ハ下級行政廳ヲ羈束ス

第十七條　訴願ノ手續ニ關シ他ノ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノハ各其規程ニ依ル

附則

第十八條　明治十五年十二月第五十八號布告請願規則ハ此法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第十九條　此法律施行ノ前請願規則ニ依リ受理シタル請願ハ仍其規則ニ依リ之ヲ處分ス

請願規則ニ依リ下級行政廳ノ指令ヲ受ケタル者訴願スルヲ得ヘキ場合ニ於テ更ニ訴願セントスルトキハ此法律ニ從ヒ其上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ

第二十條　第八條ノ訴願期限ハ此法律施行ノ前行政處分ヲ受ケ又ハ請願規則ニ依リ指令ヲ受ケタル事件ニシテ其處分又ハ指令ヲ受ケタル日ヨリ滿五年ヲ經過セサルモノニ對シテハ此法律施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第二十一條　行政廳ニ呈出スル請願ハ此法律ニ依ルノ限ニ在ラス